

# むなかた電子博物館 紀要

## 第2号 目次

巻頭言.....	7
座談会：科学への憧れ「WEB博物館の役割」 .....	8
1.宮原先生の専門について.....	9
2.電子博物館について.....	10
3.研究成果の可視化と科学への憧れ.....	11
4.オゾン層破壊・地震と気圧配置 .....	12
5.地球温暖化について.....	14
6.情報提供に対する評価 .....	16
7.リンクの実際について .....	18
8.最後に .....	24
<b>フランス情報化政策と</b>	
<b>ミュージアムの教育普及における取り組み .....</b>	<b>27</b>
1.はじめに .....	27
2.フランスにおける情報化政策の動向.....	27
2.1ブロードバンド化が進む欧州のインターネット環境.....	27
2.2インターネットへの展開が遅れたフランス.....	30
2.3情報化社会に向けた政府の取り組み .....	30
3.ミュージアムの情報化政策と教育支援 .....	32
3.1フランスが取り組む文化財デジタルアーカイブ .....	32
3.2ルーブル美術館のデジタルアーカイブへの取り組み.....	33

3.3フランスミュージアムにおける教育支援の現状とデジタルコンテンツの連携 .....	34
4. 考察 .....	38
<b>江口海岸の縄文遺跡 ～さつき松原遺跡の調査から～ .....</b>	<b>41</b>
1.発見の経緯 .....	41
2.遺跡の概要 .....	42
3.宗像の縄文遺跡 .....	43
4.まとめ .....	44
<b>宗像地域の古代史と遺跡概説 .....</b>	<b>46</b>
1.はじめに .....	46
2.古代地形と遺跡 .....	47
2-1.入海と釣川の形成 .....	47
2-1-1.縄文時代の入海 .....	47
2-1-2.弥生～古墳時代の宗像潟 .....	47
2-1-3.奈良・平安時代 .....	48
2-1-4.鎌倉～江戸前期 .....	48
2-1-5.江戸中期以降（釣川の改修） .....	49
2-2.福間潟と桂潟 .....	49
2-2-1.福間潟 .....	49
2-2-2.桂潟 .....	49
3.旧石器時代・縄文時代の遺跡 .....	50
3-1.旧石器時代 .....	50

3-2.縄文時代.....	50
4.弥生時代の遺跡.....	52
4-1.弥生集落の様相.....	52
4-1-1.釣川水系.....	52
4-1-2.西郷川水系（西郷川流域の遺跡）.....	57
4-1-3.玄界灘沿岸（海浜の遺跡）.....	57
4-2.弥生集落と袋状竪穴.....	58
4-3.弥生墓制の様相.....	59
4-3-1.墓地.....	59
4-3-2.青銅器の副葬.....	61
5.古墳時代.....	62
5-1.古墳時代の集落.....	62
5-1-1.釣川水系（内陸部の遺跡）.....	62
5-1-2.海浜部の遺跡.....	64
5-1-3.集落の性格と特質.....	68
5-2.前方後円墳の造墓.....	70
5-2-1.立地と分布と造墓時期と古墳.....	70
5-2-2.新原奴山・須多田古墳群.....	78
5-2-3.群集墳.....	80
5-2-4.在地首長墓の動向.....	84
5-2-5.生産工房.....	85

6.奈良時代～平安時代 .....	88
6-1.遺跡の様相.....	88
6-2.宗像郡衙の位置 .....	90
7.宗形氏とヤマト政権 .....	92
7-1.海民の地方神.....	92
7-2.ヤマト政権の航海神の昇華段階.....	93
7-3.ヤマト政権の地域施策推進と関与.....	94
7-4.大宰府設置に伴う地方官人化 .....	95
参考文献.....	95
<b>この瞬間、この感動、そして、想いを記録に.....</b>	<b>99</b>
1.はじめに .....	99
2.「北斗の水くみ写真展」の経過 .....	100
3.二回の写真展で何が見えたか? .....	101
4.宗像海岸の夜空の明るさ .....	101
5.便利な観察カレンダー.....	104
<b>さつき松原遺跡の発見と海岸浸食 .....</b>	<b>106</b>
1.はじめに .....	106
2.川は水が流れるだけではない.....	107
3.アジアの思想で水に流す .....	108
4.我が国の海岸浸食状況 .....	108
5.海はおなかが空いている .....	110
<b>むなかたの弥生時代の人々の暮らし .....</b>	<b>113</b>
1.はじめに .....	113

2.田熊石畑遺跡から出土した武器型青銅器.....	113
3.「銅戈」のレプリカをつくる.....	115
3-1.つくり方.....	115
<b>文献にみる宗像三女神降臨伝承について .....</b>	<b>118</b>
1.はじめに .....	118
2.古代の三女神の出現と鎮座に関する文献（奈良・平安時代まで） .....	119
2-1.『古事記』 .....	119
2-2.『日本書紀』 .....	120
2-3.『風土記』 .....	121
3.中世の文書に見る三女神伝承（鎌倉・南北朝・室町・安土桃山） .....	122
3-1.『宗像大菩薩御縁起』 .....	122
3-1-1.鎌倉末期から南北朝時代にかけての写本.....	123
3-1-2.戦国時代初期の写本.....	123
3-1-3.安土桃山時代末期の写本.....	124
3-2.実物古写本の巻末の一紙について .....	125
4.江戸時代から明治までの主な文献（風土記逸文掲載） .....	125
5. 近代の主な文献（明治・大正・昭和・平成時代） .....	126
6.現代の三女神信仰.....	126
6-1.鞍手町の現状.....	126
6-2.福岡県神社誌.....	128
7.まとめ .....	129
<b>むなかた地域遺跡分布図（第1版） .....</b>	<b>131</b>
1.はじめに .....	131

2.遺跡分布図の地点番号と出典文献番号.....	131
3.遺跡分布図.....	135
3-1.遺跡分布図.....	135
3-2.遺跡鳥瞰図.....	137
4.出典文献.....	139
<b>2009年～2010年の「むなかた電子博物館」.....</b>	<b>141</b>
<b>編集後記.....</b>	<b>144</b>



「むなかた電子博物館」事務局の許可なく商用利用を禁ず

2010年4月1日  
「むなかた電子博物館」紀要委員会

## 巻頭言

「むなかた電子博物館」紀要委員会委員長 平井正則

昨秋、衆議院選挙で自民党から民主党への政権交代が実現し、桜の咲く今日この頃、半年後を迎えてそろそろ政権の綻びも見え始めたようですが！とにかく、国民の意思が選挙に反映した結果には違いない。政治が政策を変え、新たな制度に転換される、いま、多くの犠牲を伴ったあの戦争の次第がふと頭をよぎる。戦争への突入、貧しい生活に苛まれた市民に結局一層の困難を強いた政府？そんなトラウマは杞憂であろうか？生き証人の去っていく戦後65年に、改めて市民一人ひとりの認識と行動の基と成る情報の開示がいかに重要かを再び考えさせられる。区別ない情報の発信と自由な情報収集に基づく議論の提示、開示が進むことを願う。

「むなかた電子博物館」が郷土“むなかた”を中心に、この地に備なわった自然の発見、この地の人々の永い営みの系譜、この地に生きた人々の生活史、訪れる人々により、押し寄せ、滞まり、通過し、再び去った技術・文化、逞しい人の担った文化の遺産を提示し、あるいは興味ある学者や技術者や市民の意見をこだわりなく伝える試みに挑み続けたい。

昨年、創刊号を編み、本誌「むなかた電子博物館」編集のための素材や取材“部品”、ページにならなかった活動の資料などその舞台裏と博物館へのスタッフの思いを示した。

これに続き、第2号を編み、博物館製作の提案と将来を考える議論の素材をと考えている。

読者諸氏の関心の強い目次項目から始めて博物館運営のさらなる熱い議論をお願いしたいと考えている。

## 座談会：科学への憧れ「WEB博物館の役割」 —理学博士 宮原三郎先生を囲んで—

出席者

宮原三郎先生 \*1

平井正則、伊津信之介、平松秋子、堀内伸太郎、清水比呂之、上田めぐみ、西高志（「むなかた電子博物館」紀要委員、スタッフ）

12月15日（火）紀要委員 平井・伊津・平松・堀内・清水・上田・西は九州大学副学長兼理学研究院長で理学博士の宮原三郎先生を囲んで、『科学への憧れ「WEB博物館の役割」』をテーマとした座談会を行うため、九州大学理学部を訪れました。

1時間の短い時間の中で、宮原先生の専門分野である大気力学について、島原の地震火山観測研究センターの取組み、理学研究院内のWeb科学博物館について、また、今後のWebでの情報提供のあり方など内容の濃い議論となりました。今、「むなかた電子博物館」に何が足りないのか、そして、何を求められているのかを考える絶好の機会となりました。

私たちの身近なものであり、また、永遠の憧れでもある科学の可能性と、Web博物館の役割についてこの座談会の記事を通して、皆様も一緒に考えていきませんか。

（以降、発言者の敬称は省略いたします。編集は平井が行いました。）

\*1) 宮原 三郎：理学博士（専門分野：大気力学）

九州大学副学長・理学研究院長・理学府長・理学部長

1. 宮原先生の専門について
2. 電子博物館について
3. 研究成果の可視化と科学への憧れ
4. オゾン層破壊・地震と気圧配置
5. 地球温暖化について
6. 情報提供に対する評価
7. リンクの実際について
8. 最後に



平井 : おはようございます

どうも今日はありがとうございます。

今日は国際的にも評価の高い理論気象の専門家で、この九州大学の副学長としてリーダーシップを発揮しておられますし、理学部長として研究のリーダーでもおられます宮原先生を囲み、いろいろな事についてお話したいと思います。

私の専門は天文学ですけど、気象分野といいますのは非常に社会との結びつきが大きくて、文科省だけでなく、気象庁というのも明治以降、長い社会に対する情報の提供について経験を持っています。そういう機関の人材の中にはかなりたくさん、この宮原先生が率います理学部の気象学教室、現在の地球惑星科学科の卒業生たちが貢献しています。そういう意味で非常に重要な部分を担っておられる教室の先生です。

現在は理学部長でいらっしゃいますが、地元宗像の福岡教育大学で、宮原先生の師にあたられます澤田龍吉先生が、かつて、学長でおられました。当時、地域の教育大学では珍しい大学院の設立に奮闘され、福岡教育大学にご尽力を頂いたという経緯もございます。

「むなかた電子博物館」として宮原先生と一緒にお話ができることは、非常にラッキーではないかと感謝しております。どうもありがとうございます。

## 1.宮原先生の専門について

それでは、恐縮ですが最初に少し簡単に宮原先生の研究のことを、市民に分かるようにお話いただきたいと思います。

宮原 : はい、広い意味で皆さんよく耳にされる言葉で言えば気象学という事ですが、その中でも気象力学という力学ですね。その分野になります。

ただし、気象と名前がついておりましても私がやっております事はいわゆる天気の良いくなったり、悪くなったりという意味での一般的な言葉の気象ではなくて、もう少し広い概念の大気の運動というような面から見た気象力学といいますか。正確に言えば大気力学というようなものを専門としております。

私がやっております事は直接天気に関係があるわけではなく、むしろそういう天気現象とか気象現象を理解する基礎の力学を専門にやっております。

平井 : ありがとうございます。なかなか難しいですね。では進めさせていただきます。我々は紀要の原稿の記事として発展させていきたいと思いますが、以前お見せしましたように創刊号が出まして、箱物ではなくてこういう電子博物館の

まあ裏方と言いましょか、ちょっと部屋の中に入ったときにどういう風な企画をしたり、どういう部品を付けているかという部品側の一つの情報として紀要をまとめたというのが経緯でございます。

## 2.電子博物館について

平井 : それで先生、今までの研究あるいは大学での運営の結果として、現在、箱物の博物館というのが流行ってる。九州大学でも総合研究博物館というのがありますけれども、そういう箱物博物館と、この電子博物館のようなホームページで展開していく情報提供の形について先生にご感想をお聞かせいただきたい。

宮原 : まず、「むなかた電子博物館」というのは、宗像という地の利というのですかね、歴史ある所でやっておられて、しかも歴史とかいわゆる民族的な物だけでなく、自然科学的なものまでやっておられて、ちゃんと組織としてやっておられるところに感心しております。

それで電子博物館といいますと、実は理学研究院のホームページに入ってくださいますと、web博物館というのがありますので、そこを開けて頂くと、そこに写真が出ているんですけども、雲仙が噴火して以来の、雲仙の噴火の経緯とか、それから噴火のメカニズムとかそういう物を非常に詳しく説明、まあ詳しくと言ってもあまり専門的ではなくて、一般の方に分かっていただくというようなweb博物館のページがあります。

それから、九大の総合研究博物館にもこの地球惑星・昔の地質学科が持っていた鉱物・高標本（高壮吉先生により蒐集された鉱物標本）（注1）という非常に有名な標本がありますが、それも実際に市民の方が見ようと思うとここまで来ないと見ることができないのですが、これを博物館でデータベース化してweb上で博物館が展示しているわけですが、それも地質学科ということもありまして我が理学研究院のwebからリンクを張って見られるというような形とっています。

我々も、現物その物を展示するという事ではなくて、インターネットでいろんな活動あるいは我々の研究を紹介するという事をやっております。これからますますインターネット利用者が増えると思いますので、これは発展する方向に行くのではないかと思います。

紀要を読ませていただいて、将来的にはいろんな所と提携されて、その中には九大も参加して広げていけるような将来性があると思っております。

(注1) 九州大学総合研究博物館 高壮吉鉱物標本Web展示

<http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/specimen/koumenu.html>

平井 : そうですね。リンクは非常に重要になっていく。西谷先生とのお話の中でも九州全域の博物館のホームページと言うお話がありました。

### 3.研究成果の可視化と科学への憧れ

伊津 : 少し話題が戻ってしまいますが、大気の研究では、スーパーコンピュータを含めて、コンピュータでその高層大気の力学という、シミュレーションをすとか計算をする事が主になると思います。

今、計算機科学も発達してきましたが、先生の研究では、かなり大規模な計算機システムが必要なのでしょうか。

宮原 : 僕の研究では確かに数値シミュレーションですから、計算機で計算して結果を出すということをやっております。

一昔前だといわゆるスーパーコンピュータでないと計算できなかったのですが、今はパソコンの性能が非常に上がりましたので、よほど大きな特別な計算をしない限りは、自分のパソコンでも計算ができるような時代になっています。

伊津 : そうすると、シミュレーションをした結果を一般向けに表示すること等は可能になりつつあるんですか？

「むなかた電子博物館」で、まだ扱ってないのが大気などです。天文は平井先生の方野ですので多少は扱っていますけれども、いわゆる海面から上の大気部分をどう扱うかがまだ欠けているように思うので、その辺が可能かどうかをお聞きしたい。

宮原 : そうですね。計算した結果について、我々専門家はグラフとか図を見れば分かるのですけれども、一般の人に分かりやすいような図にするっていうのはなかなか難しいですね。特に気象は空間的に3次元・しかも時間が入ると4次元になってしまうので、そこを一般の方に見ていただいて非常に良く分かるような可視化をするというのはなかなか難しいわけで・・・。

私自身はあまり可視化をやっていないのですけれども、例えば宇宙天気というか太陽と地球の間のいろんな現象をシミュレーションした後、それを可視化し

て3次元的に見て分かるという所までやらないとシミュレーションをやったという事にならないんじゃないかという先生もおられます。

ただ、我々専門家は、先生もご承知のように学会誌に論文として発表する場合には、プリントした2次元的な絵で訴える。ただ、どうしても必要な場合には何か付属のムービーみたいなのをどこかに置いて見ていただく。博物館という事であれば最後の可視化というのが非常にアピールする要因になると思います。

平井 : 学者として進化していく学問の根っこの所と、市民の方々に公開してこんなですよ、という所でだいぶニュアンスが違うのですよね。それがなかなか難しい所だと思うのですけど。

伊津 : ただ、今の時代、何でも公開、公開となるし、それから予算削減やら何かの中で一般の人に理解されないと削られちゃうということであると非常に難しい状況になってますよね。

宮原 : 僕が思うのは一般の市民は、科学に対する憧れが非常にあって。これはもう人間として生まれたからには本能的にそういうのがあって、何故だろうとかです。それは自分がやらなくても誰かほかの人がやったとき、そしてその話を聞いたとき、ああ、そうだったんですねと分かれば自分が解いた訳ではないのに嬉しくなるという感覚はありますよね。

平井 : 知る喜びというかね！

宮原 : だから、それはやっぱり提供する必要がある。もう古いですけど、僕自身は湯川さんがノーベル賞をとったときの事があまり小さくて覚えてないけど、日本国民として喜びだったわけで、いくらノーベル賞がたくさん出るようになって、この間のノーベル賞も皆さん喜んだわけですから。

平井 : 理学部でもそういうアピールというか研究を紹介されて、我々とある種共通するような市民の方々への努力をやっているという事ですが？

#### 4.オゾン層破壊・地震と気圧配置

平松 : 専門的によく理解できていませんけど、オゾン層の破壊ですね。これは南極の上で起こっているのでしょうか？

その破壊によって気象への影響、そして、紫外線が直接地球にふりかかる。そのことについてどのように考えておられるでしょうか？

宮原 : まずオゾン層は今言われたとおり南極大陸上空で、10月頃に非常に減りまして、普通の状態からしたら3分の1くらいになって、紫外線が直接地面まで到達するという状態になっています。

ただ、幸いに南極には観測に行く人以外人は住んでいませんので、一般市民にオゾン層破壊の直接の影響がすぐ出るというわけではありません。

ただし、地球全体でもオゾンは減っています。日本付近でもオゾンは昔に比べたら減っていますので、紫外線が強くなって皮膚癌が増えるとか、そういう心配はやっぱりあります。

ただ、今、CO<sub>2</sub>の問題と違ってフロン規制がかなり上手くいきましたので、あと50年後ぐらいにはオゾンホールが出来る前の状態に回復するのではないかとされています。まあ、これもコンピューターシミュレーションの予測ですから当たるかどうか分かりませんが。

今現在はオゾンホールは相変わらず底を打った段階。もうこれ以上減らないという状態の所で今続いています。

堀内 : 地震と気圧配置との関わりがあると言う話を聞いた事があるのですが、それについてお教え願えませんでしょうか？

宮原 : 地震と気圧配置ですか。それはちょっと僕では分かりませんね。地震のトリガーになるかといわれるとちょっと私は懐疑的ですけど。ただ、これもまた私のところの研究室の若い方がやっている研究ですけども、地球の地震を調べるために地震計というのが地球の上にたくさん置いてありますが、世界中で大きな地震が起こっていないときでも地球は微妙に揺れている。それは地球の固有振動、固有振動というのも難しいんですけど、弦を弾いた時にゆれるように常に数分周期くらいで地球がゆれる。

それが大気の振動と関係あるのではないかというような事が言われ始めています。それは地震専門の人がもともと発見した現象ですけども、大気と関係があると言う事で、今、うちの中島先生が学生さんと一生懸命研究しており、今度、学位論文が出る事になりました。

ということで、地球という非常に質量あるものと、本当は大きな質量があるのですが、我々にはほとんど質量があるとは実感できないような大気の振動との関

係があるということは間違いありません。それが地震を起こすかとなると僕もちょっとそこまでは…。

## 5.地球温暖化について

清水 : 昨日、ずっと北海道に在住している友人が来まして、オホーツクのサロマ湖周辺に住んでいるんですけども。

流氷が年々少なくなってきた、量も少ないですし、そして来る期間も短くなってきたという話を聞きまして。そういうことが温暖化の一つの現象の表れなのかですね。

電子博物館には考古学的な研究発表などもしています。今までの気象現象として温暖化と寒冷化という事が繰り返し地球規模ではあったと思うのですが、そういう線上に今の状況というのは捉えられるのか、やはりCO<sub>2</sub>の影響とかで確実に温暖化とかが進んでいくのかですね。

そのあたりはどうでしょうか？

宮原 : まず最初に例に出されたオホーツクの流氷の問題ですけども、別にオホーツクに限らないのですけれども、我々人間が普通に体感するのは、例えば10年前に比べたら暖かくなったとか寒くなったとかそういう非常にローカルな現象を感じるわけです。けれども、いま地球温暖化といわれている時に世界的に問題になっているのはまずグローバルウォーミングといわれるように全体的に平均して気温が上がるということです。で、これは恐らく私自身は間違いのない事実だと思います。

これは物理法則に則って考えても、CO<sub>2</sub>が増えて赤外線が直接外に出なくなると、地球がエネルギーを保つ率が上がるということで、グローバルに温暖化するということはまあ間違いないと。

これについてもいろいろと異論があって、いや雲が増えるから日傘になってそんなに上がらないとかですね。そういう要素はあるとは思いますがね、基本的には上がると思って間違いないと。

ただ問題はですね、これが例えば東アジアでどうなるとかですね、アメリカでどうなる、ヨーロッパでどうなるかというような、世界の20ぐらいの機関が、数値シミュレーションで独立のモデルをそれぞれ作って研究をしています。

ただし、IPCC【国連の気候変動に関する政府間パネル (Intergovernmental

Panel on Climate Change)】 が作ったシナリオがあって、こういうシナリオでCO<sub>2</sub>が増えたらどうなるか、別のシナリオでいったらどうなるかというような、幾つかのシナリオで独立に計算を行った結果、当然モデルによって量の差はありますけれども、どこのモデルでも温暖化の傾向を示している。

ただし、それが今度は地域のどこが上がるかとか、どこの温度が下がらないかといった意味でいきますと、もっとバラつきが増えます。

それは、普通に考えて細かい所までやろうとするとなかなか難しいという、一般的な常識に合った結果が出ておりますので、例えば北海道が温暖化しているかどうかというのをシミュレーションの結果と比べて合っているか、合っていないかという議論はなかなか難しい所だと思います。

ただ、これもすでに観測事実としてあるのは、例えば夏の北極海の氷の面積が、ここ数年ものすごく減っていて、ご承知のように白熊が生きていけなくなるのではないかというような危機的状況になっていることは事実ですね。

ただ、それがすぐCO<sub>2</sub>のせいだと結びつけて言えるかどうかというのは、我々は、少なくとも私はCO<sub>2</sub>が主因だと思っていますけど、じゃあ証明できるかと言われると、これはなかなか難しい。

これは、いわゆる気候システムというものが非常に複雑でいろんな要因、物理学的なものだけではなく、化学的なもの、生物学的なもの、それから気候、我々は大気の中に住んでいるので空の事だけやっていけばいいかということ、それはとんでもない話で、気候を一番支配しているのは海と言う非常に熱容量の大きなものがありますので、海をどうするのか。

海も非常に深いところまで考えますと、千年のオーダーで循環しているものですから、そういうところまでしっかり因果関係を説明すると、ものすごく複雑なシステムで、どこがどう変わったからどこがどう変わるという一つ一つロジックを繋げていくのはなかなか難しいと思いますね。

平松 : 今の海についてですけど、縄文海進という言葉があります。やっぱり、この時代も温暖化が進んだ結果、海が進んできたと言うことでしょうか。

宮原 : それはですね。縄文海進という言葉がありましていろいろな地質学的な証拠がありますし、それからその当時の気温がどうであったかというものを調べる方法もあるらしくて。

私は専門ではないので分かりませんが、やはり縄文期は温暖化して、弥生期になつたらまた元に戻ったと言うようなことはあるようですね。

平井 : そういう縄文期のデータの質と現在のデータの質というのは大幅に違っているのだからこういう一つのものさしで考えなさいという事は無理だよね。

シミュレーションはすごく細かくなっていったけど、現実にもっと長いスパンでどうなんでしょう？

宮原 : 我々の歴史と同じで、昔の事は何年何月何日が暑かったとか寒かったとかは問題にならなくて、縄文海進といったって凄い時間スケールですよ。ものすごく幅があって。

おそらく、もしその時代に行って我々が温度計で測ったら、暖かいときも寒いときもあって寒冷化したとかしなかったとかおそらく言うと思いますけど。まあ全体として見れば温暖化している。

## 6. 情報提供に対する評価

平井 : 今、丁度いい質問が出ましたので、「むなかた電子博物館」としても、そういう古環境についての情報を提供すると言うのはかなり重要なことなので、気象関係ではこういう所に情報がありますよとか。それについて参考の意見があればお聞きしたいと思いますけれど。

宮原 : そうですね、今、私自身はどこにデータがあるとか、例えばここに古環境のデータがあるとか分かりませんが、少なくとも地球惑星科学科には、縄文海進の頃、当時のことを研究しておられる先生もおりますし、それからもっと本格的に、海底に積もる物を調べて、堆積した年代の気候がどうであったかというようなことを非常に詳しく研究しておられる先生もおられますし、その辺りに話を聞くともう、いろんなところからデータが出てくると思いますね。

ただ、あまりにも専門的すぎてそれを一般的に表しているデータがすぐあるかっていうのはちょっと分かりませんが。

平井 : 少し話を戻して恐縮ですけども、こういう博物館が情報を提供していく中で、九州大学ではいろいろなパーツで情報を発信されているでしょうけど、その事について、市民からの評価などについて、何か取り組んでおられますか。

宮原 : いえ、そういう評価が来たと言う話は少なくともこの理学研究院が公



開しているホームページについてはないですね。

ただ、例えば雲仙のインターネット博物館に来場者が月どれくらいあったとか、そういうデータをずっととったグラフがあったのですが、だいたい小学校や中学校あたりの教材として使っておられるというのが多いようで、シーズンで急に増えるという事があるんですね。小中学校でそういう課外授業みたいなものをする時期というのは割合決まっているらしい。

平井 : 宮原先生としては、そういうものを評価することについて有効かどうか分かりませんが、我々も電子博物館というのをやって、どれくらい反響があるかということをやっぱり評価していかなければ先に進めないだろうと思います。それもこの紀要の中でそういう取り組みを議論したいと思うのだけれども、何かご意見があったら。

宮原 : なかなか難しい所ですね。例えば先程の雲仙の博物館は、島原の地震火山観測研究センターの先生方と名誉教授の方がボランティアでやっておられるのですが、名誉教授の方はすでに退官されているのでいいですけど、島原の先生方は日常の業務があるので、内容を更新するというのはなかなか難しいですね。

でも、去年だったかな？島原の火山が噴火したときに、火道といって溶岩が通る道を横からボーリングして、その火が、溶岩が通ったところの状況がどうなっているかというようなことを調べるプロジェクトを東大と九大が中心になってやったんです。

その結果を市民の方に発信するのは意義があるので、噴火の後、こういうプロジェクトがあったので、その結果を市民に分かりやすく載せてくださいということをお願いして、難しいところをセンターの方が頑張って、またその結果を分かりやすくホームページのweb博物館の付録2でこういうのをやりました、こういう結果が出ましたというのを発信しました。更新していこうと思っているのですが、日常、常にバージョンアップしていくというのは難しい所があります。

平井 : そういうものの提示も含めて、今おっしゃった理学部の先生方と、「むなかた電子博物館」と何らかの形でリンクするとか関心のある方はリンク先へ入っていくとか、そういうことは可能なんでしょうか？

## 7. リンクの実際について

宮原 : 私自身思うのは、「むなかた電子博物館」という立派な電子博物館があって、沖ノ島に関しては独立したホームページがありますよね。

そういう形で、例えば「むなかた電子博物館」に自然科学に興味があるという方が来ると、自然科学だったら近所に九州大学があってそこには自然科学関係のいろんなホームページが開いているらしいと知る。そのような感じでリンクできるのは僕自身の考えでは良いと思っています。

ただ難しいのはリンクを張られる側、それを作った方が、そういうことを想定せずに作っている場合その方のご理解をいただけるかどうかというのが。

平井 : そうですね、それはありますね。著作権とかはどうなっているのですかね？自由にリンクできるんですか。

伊津 : リンクは人によって違いますね。

平井 : 大学は？

伊津 : 自分の所属する部分において研究者それぞれがどうするかっていうのは大学がコントロールしていますから、ある意味個人が余暇でやっている部分とそうでない部分を厳密にしなければならないので難しいですね。

宮原 : ホームページを見てもリンクは自由に張ってくださいって公に書いている人と、そうでない人がありますよね。そこを書いていない人は意識して書いているのか書いてないのか分かりませんがね。

平井 : 理学部として、「むなかた電子博物館」にリンクしてはいけませんとか、そういう法律はあるのですか？

宮原 : いや、それはないと思います。理学研究院の中には情報推進専門委員会というのがあるのでですけど、そこで議論して、例えばむなかた電子博物館からこういう申し出がありました。ついては我々のホームページをリンクするにあたって問題がありますか、とかそういう話になると思いますね。

伊津 : 九州大学のトップページにリンクを張ったり理学部のトップページにリンクを張るのはおそらくそんなに大きな問題じゃない。でもね、電子博物館の立場からすると、そのページの中の、何とか先生がやっている縄文海進の推移・変化のグラフが出てくるような所へ、ある展示からリンクを張りたいとする。そうになると、今議論になった個々の先生の了解が取れるか、大学全体としてOKが出せるかという何段階かのステップがある。

だから、何をリンク張りたいのか、どういう記事が良いのかっていうのはやっぱり電子博物館側で全部さらって、それで個々にお問い合わせするっていう作業が必要です。そういう役割分担が必要ですよね。

宮原 : 今こちらの情報推進専門委員会と言いましたのは、理学研究院が管理しているホームページというのはいくらまでということをちゃんと規定して、理学研究院の一番トップのページから何回クリックしたところのレベルまでは我々理学研究院が管理しますよ、と。

それから下、例えば研究室に行って研究室の中でもまた教員が、とクリックしていったらどんどん深層の所まで入っていくわけですけども、その下の方の事は我々としては管理してなくて、教員や学生の良心に任せているわけですね。そして、とんでもない事を書いていないかとかは殆どチェックしていません。

ですから例えば僕の研究について、「むなかた電子博物館」が興味を持っておられて、私のホームページに直接リンクを張りたいというようなお申し出があった時には、やっぱりその私、教員が判断して、いやこれは違う目的で開いておりますからとかあるいは、これは公開されていることですからというのはその個々の教員の判断になってしまいますね。

平井 : 「むなかた電子博物館」自身が個人じゃなくて公共のボランティアの組織という事もあって、もちろん財政的にも市から支援されてアピールしておりますから単純に個人と個人ではないですよ。リンクがね。

例えば今言った温暖化一つにしてみても全然意見が違うものを並べることによって一つの議論が起こりうるので非常に難しいですね。

できたら「むなかた電子博物館」の一つのレベルとして個人的な意見をお持ちの先生方も含めて、もっとこういうリンクが合わさって一つの博物館というのかな？いつでも入っていけるような物が実現されればですね、お互いの努力が実るという意味では僕は非常に有効だと思うんですけど。そういう企画を考えないといけないですかね？

今おっしゃった古環境だとか、例えば遺跡が出たことについても、若干のいろんな情報が欲しい。そのときにやっぱり九大の先生方にご意見を伺ったり、リンクしたいですね。

そういう便宜を図ることは電子博物館としては非常に重要なことかもしれないですね。

伊津 : だから、そういう点でもこの紀要のような、電子博物館媒体とは違って紙媒体でこういうようなことをやっているところですよというふうな事があると個々の先生や研究者に意見をいただくときは便利ですね。

宮原 : 個々の先生にこういうことをやっておりますというのをもって話に行くと分かっていただけるかもしれない。

平井 : 分かっていただけるかもしれませんがね。清水さん、その点に関してはいかがですか。今までの経験で、どこかリンク張ることに関して。

清水 : そうですね、宮原先生が言われているような公開されている公式的な部分とのリンクというのは簡単にできるのではと思いますが、ターゲットを絞った所とのリンク付けというのは殆どやられてないので、そこはお互い了解した上でという話にはなるかと思います。

平井 : そういう時は、口約束という訳にもいかないでしょ。どうするのですかね。

上田 : 例えば、こちらからリンクをさせていただきたいという事になると、リンクをさせていただきたいという依頼文を出して、それに対して承諾とか拒否という返事をいただくという形になるかと思います。

平井 : 沖ノ島の場合には部署内での話しの中で良いということになったんですかね？

清水 : はい。それはすごく簡単な話でしたけど。

伊津 : 「むなかた電子博物館」企画運営委員長平井正則が、事務を通して行

い、担当の先生にお願いします。受けない人は受けないけど、受ける人は殆ど受けてくれると思います。

だって、webに載せるということは検索かければ隠せないということですから、よほどパスワードを切って入らない限り、そして、パスワード切ってあるものによろざろざリンクを貼ったって意味無いわけですよ。そうするとやっぱり、気持ちとしては見てもらいたいという気持ちがあるでしょう。

宮原 : 僕はあんまりやらないんですけど、自分の研究ノートみたいなものを公開している先生は沢山います。だから、そういう方は対象が専門家の場合もありますし、一般の方に分かりやすく説明しておられるホームページもありますし。そういうのを持っておられる先生方は、おそらく自分の事を学会だけじゃなくって一般の方に知ってもらいたいという事もあると思いますので、基本的にそういう方は公開に対してNOとは言われなないと思います。

ただ、専門家を相手にしていますので、これを一般的な「むなかた電子博物館」の要望に合うように書き換えるという作業はしませんという方はおられると思いますね。これは専門家向けのホームページです、誰がリンク貼っても良いけど一般の方には難しいというのは重々承知の上で。

平井 : ただね、例えば電子博物館の中に一つのトピックスとか一つの看板を掲げて、その古環境に関わってこういう時期についてこういうものがある、この辺の情報については先生のご意見も入れたいので、そういうコメントを書くことをお願いできませんか、という形での情報リストみたいなものを、一つのフレームの中で入れることは出来る事ですね。

宮原 : だからその先生方も、例えば僕の研究分野で「むなかた電子博物館」が何か作りたいので、その時に協力して私が新たに何か書き下ろしてみたいというような事であれば。

平井 : そういう程度ですよ、コメントをいただくというのは。

伊津 : だから、コミュニケーションが円滑に取れるかどうかという事だと思うのです。例えば平井さんと宮原さんだったらコミュニケーション取れているからこういう場もできますけど、普通いきなり頼んだら難しいでしょう。

例えば僕のところに知らない所からこの事について記事に載せるから、そのの

解説書いてくれって言われたら、おそらく自分で解説書いて送って、間違いがあったら直すからそれでやってくださいという事になると思います。やっぱりアプローチするときのコミュニケーションというのは、とても大事で、そういう事言うと宮原先生はかなり大所帯の上にはいらっしゃるから、今、日本の教員、研究者、学生、全部ひっくるめて個々にターゲット絞るのは難しいでしょう。

全体としてはコミュニケーションについて、九大あたりでは特に問題はないんですか。

宮原 : どうでしょうかね。

伊津 : 僕は今短大なので、あまり連携をしたことがないのですが、webとか掲示板なんかを見ると、日本人のコミュニケーション、意見の言い方というのが非常に特殊みたいで、自分の興味のあることに対してはとことんやるけれども、そうでない一般的なことについてはあまり発言をしないという事が、学生層以外のところにもかなりあるようですね。ですから、一般的に情報が公開されていくときに積極的に自分がアプローチしていることに対して人に出して行こうとか、あるいは理解してもらうためには努力しようというようなのは、大学以外でも世界的にも、先生なんかの研究分野では日本と世界とでは違いは無いでしょうか？

宮原 : それは確かにありますね。これは一般市民向けではないんですけども、我々の業界向けのことをアメリカコロラドの私の同僚のアメリカ人と共同研究をしているのですが、先程話しが出たシミュレーションの結果のデータを、彼が使いたいからという事で渡したんです。しばらくしたら向こうからこういうホームページを作ったので、これで宜しいかと言うんです。

つまりそのデータを僕は誰でも使って良いよと彼に言っていたのですね。そうすると彼はホームページに掲載してしまって、何処の誰がそれを使うことについてはそれに同意するか？はい、同意します、とやれば、どこそこの何月何日のデータを、私が計算したデータを、アメリカからダウンロードできるというような事を彼がやっていて、そういう事を積極的にしている。日本はなかなかそういう事を普通やらない。

伊津 : いや、たぶんその違い、温度差というのはかなりあるように感じるんです。文部科学省に科学研究費というのがありますよね、これが最近になって、研究内容を全て公開する方向に急速に進んでいる。で、取得した研究費の額とか、

そのあとどういう論文を書いたとかいうようなこともある。申請自体がwebでの電子的なものになっている。

私も2回ほど申請するときには会ったこともない人とメールでやりとりして、共同研究して通った後に会うという機会があったんです。

だから日本の中にもそんな事が出てきているのだけれども、それは非常に特殊、離れた人とメールでやりとりできれば、それで良いんだったら、それで良いじゃないと言うと、そういう事って非常に特殊みたいです。

ですからたぶん、このwebの電子博物館みたいな物がそういう窓口。一般向けの入り口とそうでない少しは知識とか研究やっている人の窓口とかいうような、普通の博物館だと入り口は一つですけども。電子博物館はいろんな入り口があって、そしてその中にいろんな層があるというようなやり方が出来るので、ある面で大学や研究所が研究していた物を一般に広げていくための幾つかの層というのが、この博物館には出来るような気がしますね。

宮原 : 博物館があるとかかなり良いと思うのが、非常に語弊があるけれども、物好きな方は、博物館がなくても今やインターネットの時代ですから、例えば九州大学に自分が興味持っているようなことを研究している人がいるかなあと調べて探して行って、どんどん個人のホームページまで入っていく。おそらく博物館がなくてもやられると思いますけど。

そうでなくて一般的に「むなかた電子博物館」という所にたまたま行ったら、自然科学もあって歴史もあって地理もあって、といったときに、ああこんなのもやってるんだと、やっているうちに、知らないうちにどこかの大学のそういう専門の先生の意見が読めたとかですね。そういうルートで行く人はおそらくそれが無かったら、直接調べて行こうとは思われない方がほとんどだと思います。

平松 : 九大博物館に見学に行ったときに丁度雲仙の火山についてのパネルの展示がありました。それを読んで私はもうちょっと詳しく知りたいなあと思っただけです。あのパネルは大きな文字で何枚かしか飾ってないです。

そして、その資料として箇条書き程度にしかなかったのもう少し詳しく知りたいと思ったのです。その場ですぐホームページを見れば良かったんですけど、知りたいと思ったのですけれども結局はその後続きませんでした。いつかはもっと読んでみたい。そういう事を思ったときにやはりそのホームページを開いて、そして自分の知りたい事があれば大変楽しいし、勉強にもなると思います。

宮原 : そうですね。

平井 : 博物館に行って、そう思って九大のホームページに行けばそういった情報がありますか。

宮原 : 今博物館から理学研究院の島原のweb博物館にリンクしているかははっきり分からないけれど、少なくとも理学研究院のホームページに入るとトップページの下の方にweb博物館というのがあります。雲仙と、この自然いわゆる大学の博物館の公共の話と、それからあと2つほどあります。1つはもう亡くなられた名誉教授の方が書かれた一般市民向けではないですけども非常に易しい量子力学の解説版で、これは本にもなっているんですけども、そのインターネット版というのがあります。読んで見ると我々物理の人にとっては非常に楽しくて、入門ですから簡単に読めるので、平井先生もぜひ。

平井 : ぜひ。

宮原 : それともう一つは、これも私の前の研究員長だった小田垣先生がやっておられた、バーチャルラボラトリーというのがあります。これも物理の非常に簡単な高校生レベルから大学初級レベルのような実験、例えば振り子の実験とかを見せて、これを式で解いたらこうなるとかですね、そういうようなものが本になっていますし、そういうのに必要な数学の簡単な方程式の説明とかですね。そういうのがありますね。これは専門家というより、そういうのを学ぼうとしている若い人に訴えるというもので、将来プロになろうとか、あるいはセミプロになろうという人向けの入門書で、ホームページでもあります。

## 8.最後に

平井 : はい。時間もそろそろですけども、何か最後にございませんか？まとめるわけではないんですが。今先生からもお話に出ましたが、「むなかた電子博物館」に向かい合っている人々はある意味で多層です。しかし、一般というかゼネラルな市民へということで取り組んでいますけれども、やっぱりおっしゃるように何か少し勉強してみたいとか、非常に関心が強い方々と「むなかた電子博物館」が一つのコミュニケーションの助けになって、九大の先生方のご意見も伺うことが出来るとか。そういう一つのリンク役となる。博物館がそういう役割を果たすことは非常に重要だろうと思います。その点で先生のご意見の通りか



と思います。

それからそういう点で、ここで先生と話す機会が出来ましたから、「むなかた電子博物館」の企画の中で、できたらお世話いただいて、個々の先生方の、ある程度の制限があるとしても意見にリンク出来るような企画も可能というのは私たちとしては非常に嬉しいことですので、今後とも是非よろしくお願いいたします。

宮原 : 私自身としてはそういう要望があれば、是非個々の先生方までのレベルであってもお願いしたいし、理学研究院のレベルであればもちろん正式に議論して、そういう方向で行きましょうとか、そういうことを決められますし。例えば平井先生の専門の天文でいきますと、ハッブル望遠鏡の写真なんかNASAが凄いいろんな手段で公開していますよね。見に行くと非常に楽しいのですけれども。そういうような事を日本も、やっぱり積極的にやっていかないといけないな、と思います。

一つ宣伝になりますけれども、日本の小惑星探査の衛星が来年降りてきますよね。無事戻ってきてサンプルをもし採っていたら、我が地球惑星科学科の先生が責任者になって、それから質量分析するというのを今メインでやっておられます。

例えば、そういう成果が出た時に、それは当然専門的で素晴らしい成果にもなるのですが、日本がああいう小惑星にロケットを送り込んで持って帰った結果、こういうことが分かりました、ということを市民にアピールすると、ハッブル望遠鏡じゃないけれど、非常に市民受けする内容だと思います。

平井 : 来年6月でしたっけ。

宮原 : エンジンも少し無事に動いているという話です

伊津 : それまでにリンクができる体制を整えておかないと。

平井 : 宿題が出ちゃいましたね。どうも、今日はありがとうございました。素晴らしい結論となりました！



左から、伊津、平井、宮原、堀内、平松、清水

【研究論文】

# フランス情報化政策と ミュージアムの教育普及における取り組み

星野浩司

## 1.はじめに

近年、人材や予算の不足など、状況がますます逼迫する国内の施設ミュージアムでは、文化情報の集積拠点として地域との連携を積極的に図り、教育や文化・芸術における醸成に務めるなど、都市や地域におけるそのあり方を模索するさまざまな取り組みがなされている。また、国内外を問わず、若年層の施設ミュージアム離れはより深刻な状況に向かっており、低迷する年齢層について効果的な取り組みが必要とされる。本論文では、世界を牽引する文化大国フランスが取り組む情報化政策を背景とした文化政策としてのミュージアムコンテンツの活用を調査・検証し、国内ミュージアムにおける将来的なあり方を考察するものである。

具体的には、第2章でフランスが行っている国家的情報化政策の動向を捉え、第3章でそれらの政策を受けて、フランス国内のミュージアムが取り組む教育普及支援におけるデジタルコンテンツの活用を検証し、第4章でそれらを踏まえた考察を述べる。

## 2.フランスにおける情報化政策の動向

### 2.1ブロードバンド化が進む欧州のインターネット環境

ITU<sup>注1</sup>の報告によれば、現在、世界のインターネット利用者は14億人を超えており、世界規模でIT利用者の数は増加している。特に、世界経済フォーラム（WEF：World Economic Forum）が毎年発表する“グローバルITレポート（図2-1）”では、IT競争力として各国のIT利用に関する67項目の評価により世界ランキングが発表されている。その順位は毎年激しく変化しており、経済先進国を中心とした各国の熾烈なIT投資の様相を理解することが出来る。過去2カ年の動向を表2-1に示す。



図2-1 The Global Information Technology Report 2007-2008  
(WEF : World Economic Forum)

2007年度ランキング		2008年度ランキング	
1	デンマーク	1	デンマーク
2	スウェーデン	2	スウェーデン
3	シンガポール	3	スイス
4	フィンランド	4	米国
5	スイス	5	シンガポール
6	オランダ	6	フィンランド
7	アメリカ	7	オランダ
8	アイスランド	8	アイスランド
9	イギリス	9	韓国
10	ノルウェー	10	ノルウェー

表2-1 「グローバルITレポート」 (<http://www.weforum.org/gitr>より)

このように激化するITを機軸とした世界的規模の情報化競争において、表2-1に示すように欧州におけるインターネットの普及は高水準にあり、WEFの“グローバルITレポート”でもランキングの10位以内に、その半数以上を欧州勢が占めている。また、ITUが3ヶ月ごとに更新を行っている全世界の情報通信市場に関する統計データでは、欧州各国がインターネットの普及に加え、ブロードバンドの加入率においても図2-2に示すように、南北アメリカに次いで高水準にあると報告している。今や欧州各国は世界を牽引するIT先進国であり、フランスにおいてもイン

ターネットの普及は高水準にある。近年、フランスでは、ブロードバンド網のインフラ整備に伴い、インターネット人口やブロードバンド人口が急速に伸びている（図2-3）（図2-4）。また、光ファイバーの敷設についても、政府が2012年までに人口の50%が光ファイバー網へのアクセスを可能にし、国民の400万人が光ファイバーに加入するという新たな目標を発表している。

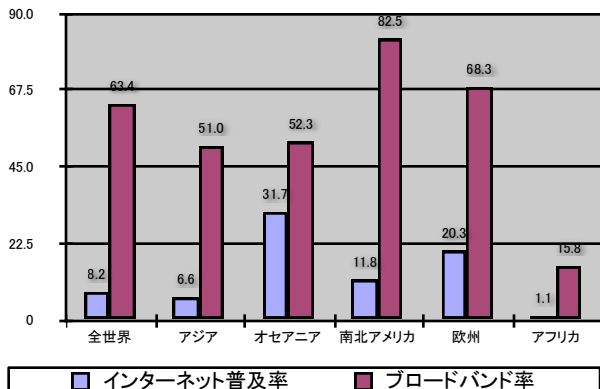


図2-2 地域別のインターネット普及とブロードバンド率  
 (総務省 平成20年度版 情報通信白書 P169-170)、  
 ITU(国際電気通信連合: International Telecommunication Union)  
 “World Telecommunication/ICT Indicators Database”

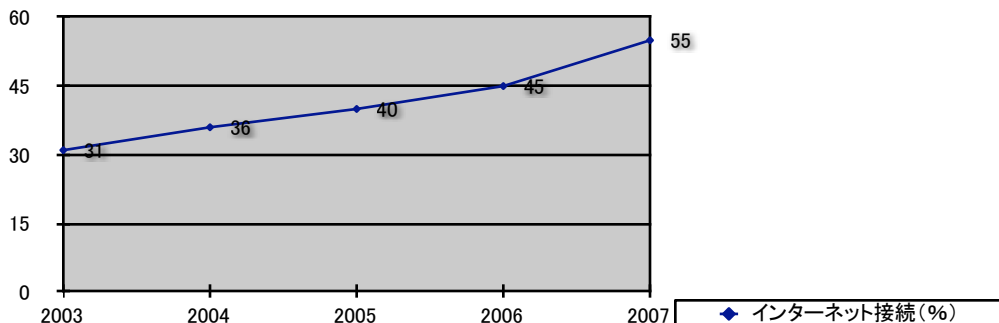


図2-3 フランスにおけるインターネット接続率の推移 (「La diffusion des technologies de l'information dans la société française」 de l'Autorité de Régulation des Communications Electroniques et des Postes)

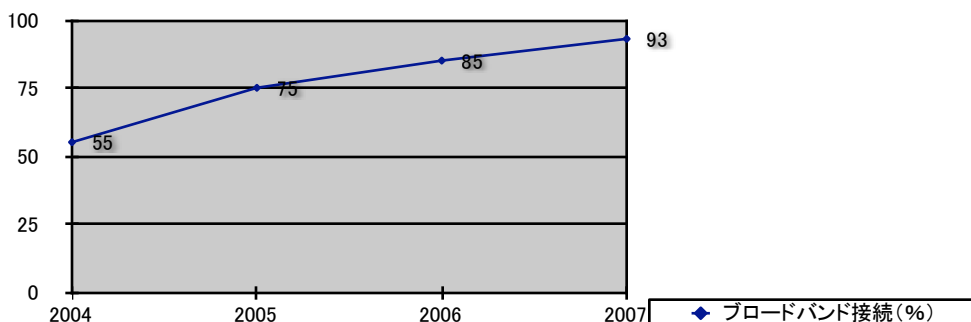


図2-4 フランスにおけるブロードバンド接続率の推移（「La diffusion des technologies de l'information dans la société française」 de l'Autorité de Régulation des Communications Electroniques et des Postes）

## 2.2 インターネットへの展開が遅れたフランス

今やIT分野における先進的状況にある欧州各国の中で徐々に競争力を高めるフランスではあるが、これまでインターネットの普及は大きく遅れをとっていた。その背景には、かつて1980年代より展開されるミニテルを中心とする国を挙げたメディアサービスが要因として挙げられる。ミニテルとは日本におけるキャプテンシステムに類し、電話とテレビを組み合わせたビデオテックス（Videotex）<sup>注2</sup> 端末の名称である。1980年代、電話番号案内の無人化、電話番号簿の無料配布にかかるコスト削減、紙資源の浪費を抑えるため、フランス郵政省（Ministere des Postes et Telecommunications）が電話番号案内用の端末としてミニテルが無料配布された。それら端末の中にはビデオテックスと統合された多機能なものもあり、電話番号案内をはじめとして、時報、天気予報、声のタウン案内、特にタウン案内は観光情報から交通案内、美術館・博物館案内、映画案内などさまざまな情報が取得できた。しかし、その頃まではビデオテックスシステムとして世界で唯一成功したフランス・ミニテルがニューメディアを牽引しているかにみえたが、時代は次の通信テクノロジーへと移行し、ミニテル成功への安心感と、フランス語以外の言語に対する拒絶感によってフランスはインターネットへの展開が大きく遅れてしまう。1990年代にこの状況を憂慮した政府当局の情報化政策としての挺入れが大々的に行なわれるが、その後、2003年時のインターネット普及率でも日本60.6%<sup>注3</sup>、フランス31%<sup>注4</sup>と大きな開きが出ている。

## 2.3 情報化社会に向けた政府の取組み

1998年1月、リオネル・ジョスパン首相が当時のフランス情報化政策に向けて発表した「情報社会のための省庁間アクション・プログラム（PAGSI : The

governmental action programme promoting the development of the Information Society in France) 」では、優先的課題として、1) 教育分野 2) 情報コンテンツの充実と文化政策 3) 情報サービスの近代化 4) 企業における商取引 5) 情報通信に関する技術開発 6) 情報セキュリティの保護という6つの分野が挙げられた<sup>注5</sup>。その中でも特に、“1) 教育分野”において、新しい情報通信ツールの整備を念頭に、教育機関への機器の設置とインターネットへの接続や、教材のマルチメディア化が推し進められた。また、“2) 文化分野”では、フランスにおける文化資産のデジタル化とインターネットによる配信や、マルチメディア文化センター (Espaces Culture Multimedia) が新たに設けられ、フランスの文化資産へのアクセス強化とその国際化が図られた。さらに、1999年-2000年の間に進められた「情報社会のための省庁間アクション・プログラム」では、社会や地域間でネットワーク・アクセスに格差があることが懸念され、国民全員のインターネット・アクセスによるデジタルデバイドの解消が進められた<sup>注6</sup>。また、ここで注目すべきは、優先課題の中に「文化とコンテンツを豊かにし、インターネットによるフランスの存在感を強化する」という文化政策に大きく係わる方針が新たに加えられたことである。



図3-2 膨大な収蔵品を持つルーブル美術館



図3-1 「JOCONDE」 (<http://www.culture.gouv.fr/documentation/joconde/fr/pres.htm>)

### 3. ミュージアムの情報化政策と教育支援

#### 3.1 フランスが取り組む文化財デジタルアーカイブ

絶対君主制が敷かれたアンシャンレジームに反する形で勃発したフランス革命が掲げた「自由・平等・同胞愛」は、現在でもフランスに息づいており、文化政策においても教育、文化の機会均等という形で伝統的に受け継がれてきた。また、中でも教育、文化は情報化制作における中心をなす分野として捉えられた。そうした中で、ITテクノロジーが発達し、情報のボーダレス化が加速する一方でフランス政府は文化情報のアーカイブ化に先進的に取り組んできた。現在、フランスで取り組まれているデジタルアーカイブの源流となるのは、「総目録」(Inventaire general)と称される事業にある。これは、1960年代に美術史家アンドレ・シャステルの提言を受け、当時の文化大臣アンドレ・マルローが文化財の全てを目録として記載する事業としてスタートさせたものである。ただし、この取り組みも当初は困難を極め、「総目録」と単に表現するが、アンドレ・マルローが設けた「フランス建造物・美術品総目録担当国家委員会」(Commission nationale chargée de l'Inventaire general des monuments et oeuvres d'art de la France)の初代委員長ジュリアン・ケーンは当時の事業目標として、

- 1) 地上にある標定可能なものをすべて、それらと関わりを持つ人々の意識を啓発するようなやり方で「特定」(identifier)すること。
- 2) 建物や美術品を、国民的な記憶に導入するようなやり方で、もっとも高性能な技術を駆使しながら「研究」(etudier)し、分類すること。
- 3) そのようなやり方で作成された「索引データを活用」(exploiter le thesaurus)し、更新された資料を、行政、地域開発事業の調査、地域と国の歴史、教育、レジャー、等々に提供すること。

という膨大な情報の蓄積を目指した<sup>注7</sup>。

さまざまに形を変えてはいるが、時を経た現在でも文化財局にて事業への取り組みが引き続き行なわれており、1970年代に入って、コンピュータによる情報処理システムが導入され、文字・画像のデータベース構築が事業の重点目標とされた。

また、文化省はフランスが独自に開発した「ミストラル」(MISTRAL)というデータベースソフトでさまざまなデータベースサービスを立ち上げており、この中には、前述の「総目録」も含まれる。その他、博物館局が管理する「JOCONDE」(<http://www.culture.gouv.fr/documentation/joconde/fr/pres.htm>) (図3-1)には、フランス全土の美術館の収蔵作品が収録さ



れ、137,500件のデータベースと、24,000点の画像が登録されている。その他に、文化財関連のアーカイブ・データベースとしてMNR、ARCADE、NARCISSE、などのデータベースが挙げられる。

### 3.2 ルーブル美術館のデジタルアーカイブへの取り組み

フランスは国内にある約1,200館の国公立ミュージアムをはじめとして、欧州連合各国にある美術館所蔵作品のデジタル化を1990年から着手しており、その中心的位置付けとなるのが、ルーブル美術館にあるフランス文化省フランス美術館修復研究所（C2RMF：Centre de Recherche et de Restauration des Musées de France）である。ここでは、ルーブル美術館をはじめ、フランス全土の美術館が所蔵する絵画や彫刻等の保存や修復に伴い、その制作手法の詳細な研究を行なっている。このように、C2RMFが設置されるルーブル美術館は、国家的デジタルアーカイブを牽引する立場にあり、古くからデータの登録が行なわれてきた。ルーブル美術館におけるデジタルアーカイブの着手は古代ギリシャ・ローマ部門が一番古く、ユピテルデータベース<sup>注8</sup>といわれるもので、25年前から取り組まれてきた。ルーブル美術館は、作品のジャンルや、地域、時代などによって8つの部門に分かれており、古代オリエント美術、古代エジプト美術、古代ギリシア・エトルリア・ローマ美術、イスラム美術、彫刻、工芸品、絵画、素描・版画の部門がある。その中でも、素描・版画部門においてデジタル化が特に進んでおり、他の部門に比べ先行する背景として、所蔵されている作品が全般的に非常にモロく、約3か月程度で展示を入れ替えており、その部門だけが作品について常にアクセスできるように他に先立ってデジタル化が進められていった。また、デジタル化と同時にデータベースも構築し、現在、120のキーワードで作品検索が出来るようになって<sup>注9</sup>いる。

現在、ルーブル美術館でデジタルアーカイブされたデータは、一般向けに一部公開されており、Atlasというこれまで展示された作品3万点が検索できるものや、

Inventaire informatisé des Arts Graphiques<sup>注10</sup>という素描・版画部門の目録データ14万点以上の作品と4,500の作者の情報が収録されたものや、La Fayetteというアメリカ人アーティストの作品について1,700点以上を収録したデータベースを利用することができる。しかし、これらのデータはルーブル美術館が所蔵する作品のごく一部に過ぎない。現在、一般公開しているデータベースは館内で過去に展示されたものに限られるが、所蔵品そのものは膨大な物量を保有しており、公開されているデータの20倍以上はある。つまり、これまでルーブル美術館で展示された所蔵品は5%以下しか公開されておらず、所蔵品全体として少なくとも70万

点以上はあるという計算になる(図3-2)。

特に、前出したAtlasデータベースはあくまで、一般向けに開発されたシステムであり、ルーブル美術館内部で行なわれている作品のデジタル化に使用されるデータベースとは異なる。また、8つの部門は独立した権限をそれぞれに持っており、古くから作品のデータベース化が別々に行なわれてきた。各部門では、既に10年程前からデジタル化が進められているが、それぞれの部門で別々のソフトが使われているため、現在は、その統一化のための作業が行なわれている。具体的には、各分野の独自性を残しながらも、それぞれに共通する要素を取り出し、1つのデータベースに統一するというものである。もともと、各部門は扱う作品の性質が異なり、歴史や文化的背景も異なるため、これまで、共同で作業を行うことも無く、データベース化もそれぞれが独自に進めてきた背景がある。近年になって、ハードやソフトのテクノロジーの進歩に伴い、全てに共通するようなデータベース構築の可能性が高くなり、ようやく各部門の歩み寄りが始まったといえる。ただし、内部にあるデータベースはあくまで学術的であり、検索分野も複雑なため、学芸員に限って、その情報を参照することが出来るが、一般に公開されていない。それらの中で一般の観客に公開する情報を「どのように選別すべきか」「それを部門ごとにどのように統一すべきか」ということが検討課題となっている。現在は、まだ、その作業が進められている段階であり、例えば、ある作品の研究を行っている研究者は、美術館へ足を運び、それぞれの閲覧室で作品の情報を紙媒体でのみ参照するしか手段が無い。その他にも、作品の画像だけでなく、それらを解説するテキストの著作権処理問題など、一般公開を行なうためには解決すべき点がまだまだ山積している。

### 3.3 フランスミュージアムにおける教育支援の現状とデジタルコンテンツの連携

フランスの学習指導要領(Programme)では日本の初等教育にあたる段階で、基礎学習期(保育学校年長組~小学校第2学年)と深化学習期(小学校第3~5学年)に分けられ、それぞれの優先課題に芸術教育の時間が設けられている。基礎学習期には最低・最大3時間、深化学習期には最低・最大3時間と科目全体が26時間ある中の10%以上を占めている。ちなみに、文部省が定める日本における図画工作の占める授業時間数は、小学校低学年で6~8%、高学年で5~6%とされており、わが国と比べても、フランスが芸術教育に力を入れていることが伺える<sup>注11</sup>。また、フランスは独自に「学習リズム」という考え方で学期や授業カリキュラムを構成しており、約7週間の授業の後に約2週間の休みを取る「7-2リズム」という区分けや、「宗教教育の日」として設けられた休日を毎週水曜日に設定してい

る。そこで、ルーブル美術館では、毎週水曜日にメディア・テックと呼ばれる教師のためのスペースを開放し、芸術教育の支援を行なっている。そこには、各8部門に係わる書籍や、これまでルーブル美術館で行なわれた講演会のオーディオテープやCDが貸し出され、自習スペースでは教員用のデータベースを自由に利用出来るうえに、学芸員への相談も受け付けている。さらに、ルーブル美術館の中で行なう教師や引率者向けの教育プログラムが年間を通して組まれており、

- (1) クラスを伴う引率者向け
- (2) 講演会やホールでの催しに参加する方向け
- (3) 自分たちで講座を行なう方向け

の大きく分けて3つの性格からなるプログラムを用意している。

まず、「(1) クラスを伴う引率者」向けのプログラムでは、

- ・ 先生が引率した場合：事前の準備として、メディア・テックやAtlasデータベースの紹介がされており、学芸員への事前相談もすすめられている。
- ・ 学芸員を伴って館内を案内する場合：年間のテーマが既に用意されている。
- ・ ワークショップ：幼稚園以外の初等学年（3プログラム）、小学校低学年（9プログラム）、小学校高学年（16プログラム）、小学校～大学（4プログラム）、高校と大学（8プログラム）、と各学年のレベルに分けられている。また、この中でも小学校高学年向けのプログラムが一番多く、全プログラムのうち40%を占める。

次に、「(2) 講演会やホールでの催しに参加する方」向けのプログラムでは、

- ・ 各種の一般向け講演会：特に映画や演劇、演奏会などが紹介されている。
- ・ 美術史を重んじる現代画家に関する個展
- ・ 教育講演会

最後に「(3) 自分たちで講座を行なう方」向けのプログラムとして、

- ・ 館内を鑑賞する際の初歩的な指導講座
- ・ 常設展示に関するテーマ別の講座：「肖像画について」、「イタリアルネッサンス」、「エジプト芸術における造形の伝統」など年間13のテーマが開かれる。
- ・ 企画展をめぐる講座：「バビロン」「大戦中のルーブル写真展」などがある。
- ・ パートナー関連の講座：ルーブル美術館のパートナーに関連したテーマがある。

これらのプログラム内容からも理解できるように、博物館の教育支援は現場を伴うものが中心であり、指導者の育成とその支援は美術館側の教育担当者が受け

持つ。ルーブル美術館では、基本的にワークショップや現場での教育が中心であり、ワークショップ全体のプログラムは毎年約40ものタイトルが開かれている。それらは実践的に絵画を学ぶものが主であり、具体的には、ローマ人と同じようなタイルをはり、ローマ人が使っていたような漆喰を使って作るというものや、その他に4歳児から始まるような幼児向けのプログラムで、イスラム世界に伝わる話を聞き、それに出てくる動物が実際にイスラム美術の中でどのように現れるかを実際の作品を鑑賞し、タイルでその話しに出てきた動物をモザイクで作成するといったことが行なわれている。

ただし、これら現場を主体とする教育支援も、パリ市内の学校に勤める教師には心強いが、郊外でなかなか施設へ足を運べない教師においては、オンライン・データベースによるデジタルコンテンツを活用したり、メールを使って学芸員とコンタクトを取るなど、美術館との連携にITテクノロジーが欠かせないものになっている。実際、「図3-3に示すようなeducation.louvre.fr」(<http://education.louvre.fr>)という教育指導者向けのWebサイトでは、さまざまな検索のカテゴリーが設けられ、テーマに沿った作品集やマイスペースではアルバム機能やスライドショー、その他自ら調べたことをメモ機能で解説を付加することの出来る機能を持たせている。



図3-3 「education.louvre.fr」 (<http://education.louvre.fr/>)

また、ルーブル美術館以外にも独自の教育プログラムを構築している美術館は多く、例えば、ポンピドゥ・センターはインターネットサイト”ジュニオ” (<http://www.junior.centrepompidou.fr/>) (図3-4) というホームページを開設しており、これは、子供が自宅で自己学習する教材として、大きく分けて3つの特徴あるコンテンツを公開している。

1つめは、アーティストの制作活動について。

2つめは、アーティストそのものについて。

3つめは、美術館が所蔵しているコレクションについての説明。



図3-4 「ジュニオ」 (<http://www.junior.centrepompidou.fr/>)

その他、図3-5に示すようなセンターが年に2~3冊出版している子供向けの“Zig Zart”という教材があり、美術館で展示されている作品について自らの発見を促すものとして、各作品について細かな違いを解説しており、テーマや1つの作品の中をジグザグ状に散策して回るという発想からZig Zart という名前が付いている。



図3-5 ポンピドゥがオリジナルで発行する教材「ZIGZART」

このようなフランスにおける各ミュージアムの具体的な事例は、日本での取り組みと比して、比較に値しないほど、国家レベルで教育課程にしっかりと組み込まれていることが理解できる。

美術館は近代社会の公共性を育む場でもあったが、旧態然としてハコモノを設

け、外部から展示コンテンツを持ち込むだけでは、地域のコミュニケーションを活性化していくことは難しい。外部の観光客だけでなく、地域に根差す地元の人々を巻き込みながら文化情報の集積拠点として、アートの新しいあり方や体験そのものを提示していく工夫も必要である。これは日本の地方再生にとっても重要なヒントになると確信する。

#### 4. 考察

フランスにおける文化政策と情報化政策は、一見すると、それぞれ異なる分野の取組みとして行なわれてきたように思えるが、これまでフランスが文化大国として歩んでいく中で、それぞれの政策は互いに重要な役割を担うと共に、密接な関係にあったことが今回の調査で明らかとなった。Digital Archives（デジタルアーカイブ）という造語は日本でこそ今や認知された言葉であるが、これは、情報通信網のインフラ整備を積極的に進めた「e-Japan構想」の時代に、デジタル化を前提としたアーカイブコンテンツ開発を象徴するものでもある。それに比べ、アーカイブを市民革命の時代より永年に渡り手がけてきたフランスでは、アーカイブが前提にあり、単に、そのデジタル化が現在、進められているということになる。これまで歴史的に進められてきた経緯からアーカイブに関するノウハウは体系化されており、欧州全体のデジタルアーカイブの中心を担うフランスの文化情報戦略は世界の中でもより先進的なものであると言える。近年の話題として、フランス政府は世界に先駆け、2007年4月より10万本におよぶテレビ番組、ラジオ番組をインターネット上で公開する「Archives pour tous」と名づけられたサービスを開始した<sup>注12</sup>。これは、INA：Institut National de l'Audiovisuel（フランス国立視聴覚研究所）<sup>注13</sup>が、これまで公共サービスとしてアーカイブしてきた膨大な映像とオーディオ資料をインターネット上で閲覧できるようにしたものである。

このようなINAの事例が示すように、フランスという国家の威信が感じられるこれら数々の文化事業はアンシャンレージュム期以後の特権階級と市民とのヒエラルキーの解体に端を発した歴史的「文化の民主化」と、国民に「教育、文化の機会均等の保証」を象徴するものでもある。フランスが取り組んでいるこれらの政策には、日本におけるミュージアムが目指すべき方向性として参考にすべき点が多い。将来的にデジタルアーカイブ化への取組みはますます盛んになると予想されるが、未来に向けて過去をアーカイブすることは「今」に生きる我々のあり方を問うことに資するものであるともいえる。また、それらのコンテンツをどのように生かしていくべきかは、体系的なアーカイブのノウハウと教育や芸術などさまざま

な分野が相互に働きかけることで初めて機能していくものとする。国内における施設ミュージアムの担当者の多くはデジタルデバイスやデジタルテクノロジーへの依存に抵抗感を示すような傾向が強いが、伝統ある美術館を多く抱えるフランスでは、むしろ、さまざまな先進技術を取り入れることで、本来の使命でもある「教育・文化の機会均等の保証」を促し、新たな作品に対する理解と興味を喚起させることに積極的に取り組んでいる。前述したように、日本におけるテクノロジー優先型のデジタル・アーカイブと歴史と伝統に裏付けられたフランスのアーカイブとデジタル・アーカイブに対比されるそれぞれの社会規範がそのような抵抗感を生じさせているとも考えられる。ただし、フランスにおける“文化予算の1%確保という”日本とは異なる環境が背景にあることも加味した上で、これから、本質的な中身ある文化政策の体系化とそれらをサポートする先進テクノロジーが相互に機能し合えるような学術レベルの研究・調査と、それを支える環境作りがより必要であるとする。

注1 国際電気通信連合 (ITU: International Telecommunication Union) 無線通信と電気通信分野において各国間の標準化と規制を確立することを目的に設立された国際連合の専門機関に位置付けられる。

注2 ビデオテックスとは、テレマティクサービス (telematic service) の一種であり、テレビ受像機やビデオモニターに接続した専用の端末と電話回線を通じてセンターに接続し、さまざまなサービスを利用者主体で受けることができる。

注3 総務省「平成19年 通信利用動向調査」

注4 de l'Autorité de Régulation des Communications Electroniques et des Postes 「La diffusion des technologies de l'information dans la société française (2007)」

注5 兼子利夫：連載 世界各国のIT政策 第6回フランス 情報管理, Vol. 48.No8.pp539-546(2005)

注6 (財)日本情報処理開発協会 (JIPDEC) 調査部 先端情報技術・普及グループ (<http://www.icot.or.jp/>)

注7 西野嘉章：博物館学—フランスの文化と戦略、pp61-78、東京大学出版

(1995)

注8 ユピテルとはローマの神様、ジュピターともいう

注9 ルーブル美術館のデジタルアーカイブを担当するAgnes Marconnet氏へのインタビューによる

注10 <http://arts-graphiques.louvre.fr/fo/visite?srv=home>

注11 二宮皓：世界の学校、pp44-47、学事出版株式会社（2006）

注12 映像は、タイトルや人物、時代、番組名などのさまざまな検索キーワードで探し出すことが出来る。また、これまでの閲覧履歴表示や映像に関連するキーワードの表示、これをクエリーとした検索の結果などが直感的なインターフェイスで構成されており、公開時にはアクセスが殺到し、初日の数時間で600万件のアクセスがあったことをフランス ル・モンド紙が報じている。

注13 ORTF：Office de radio diffusion-television francaise（フランス公共ラジオ・テレビ局）の解体後、アーカイブ、人材育成、制作・研究という分野を統合する公共サービスとして設けられたのがINAである。

#### 引用・参考文献

総務省『平成19年 通信利用動向調査』2007.

de l'Autorité de Régulation des Communications Electroniques et des Postes『La diffusion des technologies de l'information dans la société française (2007)』2007.

兼子利夫『連載 世界各国のIT政策 第6回フランス 情報管理』情報管理,Vol. 48.No8.pp539-546,2005.

(財)日本情報処理開発協会（JIPDEC）調査部 先端情報技術・普及グループ (<http://www.icot.or.jp/>)

西野嘉章『博物館学—フランスの文化と戦略』pp61-78,東京大学出版,1995.

二宮皓『世界の学校』pp44-47,学事出版株式会社,2006.

(星野浩司；九州産業大学 准教授)



【調査報告】

## 江口海岸の縄文遺跡 ～さつき松原遺跡の調査から～

白木英敏

さつき松原遺跡は、福岡県宗像市上八1975-6地先に所在する縄文時代前期の遺跡である。遺物包含層が海岸部に露出し、自然崩壊の恐れがあることから平成21年度に発掘調査を実施した。縄文土器・石器計約300点、ドングリと思われる炭化物などが出土した。宗像地域最古クラスの縄文遺跡であり、当時の古地形・古環境を知る上でも希少な調査例となった。

### 1. 発見の経緯

宗像市さつき松原の海岸は、全長6kmに及ぶ弓状の砂浜と松林が続き、北部九州有数の景勝地としてよく知られています。平成19年、この美しい海岸でちょっとした発見がありました。「遺跡らしいものが海岸に現れている」とたまたま江口海岸を訪れた市外にお住まいの方から宗像市へ連絡が入りました。文化財担当職員が現地に急行したところ、確



第1図 さつき松原遺跡



第2図 調査の様子（遠景は鐘崎）



第3図 調査の様子

かに砂丘下から縄文時代の土器片が顔を出していました。遺跡であることを一般の方が見ぬかれたことに驚くとともに、市教育委員会ではこのままでは大波によって遺跡が消滅する恐れがあることから平成21年10～11月にかけて発掘調査を実施しました。

## 2.遺跡の概要

遺跡は土器や石器を含む遺物包含層（いぶつほうがんそう）と呼ばれるもので、貝塚のように貝類はほとんど含んでいませんが、縄文時代の暮らしや環境を知る手がかりが残されています。

調査はあまりにも海に近いため、波や風との戦いでしたが、いくつかの重要な成果が上がっています。



第4図 荒れる玄界灘と遺跡（手前）



第5図 さつき松原の縄文土器

時代は縄文時代前期前半の轟式（とどろきしき）土器や前期後半～末葉の曾畑式（そばたしき）土器などがみつまっていることから約5000～6000年前の遺跡であることがわかりました。約300点の土器片や黒曜石製石鏃（せきぞく）ほか、ドングリと思われる木の実が少量出土しています。

### 3. 宗像の縄文遺跡

まず、全国的に著名な縄文時代の遺跡として市指定史跡「鐘崎（上八・こうじょう）貝塚」があげられるでしょう。ここから出土した土器は「鐘崎式土器」（かねざきしきどき）と名づけられ、縄文時代後期前半の標識遺跡としてよく知られています。昭和8年頃に貝塚として認知され、昭和9年から昭和38年にかけて計3回の調査がなされていますが、詳細は判っていません。これまで土器・石器合わせて320点ほどが出土し、貝類にはアサリ・カキ・バイ・アカガイなど海水産のほか、淡水産のシジミ・カワニナが混じっています。このほか、女性の人骨と鹿角製筭（かんざし）2個が出土しています。



第6図 鐘崎貝塚の縄文土器（鐘崎式土器）

このほか、採集品ですが江口の皐月宮付近で前期の曾畑式土器がみついています。発掘調査された遺跡ではほとんど後期から晩期にかけて営まれた遺跡で、釣川上流域の吉留下惣原遺跡、吉留池ノ浦遺跡、冨地原川原田遺跡、冨地原深田遺

跡などがあります。今のところ入海となっていた釣川中流域では縄文時代の遺跡は確認されていません。

離島に目を向けると絶海の孤島、海の正倉院ともよばれる沖ノ島にも縄文人の足跡が残っており、驚かされます。古墳時代から平安時代にかけての航海安全を祈願した国家的祭祀遺跡としてよく知られていますが、沖ノ島4号遺跡は縄文時代の洞穴遺跡でもあり、前期の曽畑式、中期の阿高式（あたかしき）、晩期の黒川式土器が出土しています。また、社務所前遺跡でも前期、中期、晩期の土器が出土しており、遺跡の範囲も比較的広いことからこの島での中心的な縄文遺跡と推定されています。獲物はサメやベラ、マダイ、フグなど魚類のほか、今では絶滅したニホンアシカなどを追って丸木船で渡海したと考えられます。沖ノ島は縄文時代を通じての定住地ではなく、夏場のキャンプサイト（一時的な居住地の遺跡）とみられます。

#### 4.まとめ

さつき松原遺跡は沖ノ島の縄文遺跡とほぼ同時期から若干遡る期間にいとままれた遺跡であることがわかりました。離島であるため断定できませんが、最も近い陸地は宗像であり、ムナカタ海人と沖ノ島とのつながりが国家的祭祀の始まる古墳時代より遥かにさかのぼることも考えられます。

また現在の砂丘の下には古砂丘と呼ばれる大昔の砂丘が隠れており、さつき松原遺跡は今の砂丘と古砂丘とにサンドイッチのようにはさまれていることがわかりました。古砂丘はさらに海まで延びていたと推測されることから、縄文時代前期



第7図 遺物包含層の堆積状況

頃の海岸線はもっと沖合いにあったとみられ、古地形を考える上でも重要な手がかりを示す遺跡といえます。

今回の調査区は遺跡のごく一部であり、集落の中心エリアは山側の東南側へと広がるものと推定しています。住居跡や貝塚、墓などムナカタ縄文人の生活構造を知る遺構は、さつき松原が広がる現在の砂丘下に良好な状態で残されている可能性が高いでしょう。

#### 参考文献

宗像神社復興期成会編1979「宗像・沖ノ島」

花田勝広2005「第2章 鐘崎貝塚の縄文土器」『倭政権と古代の宗像』

【研究論文】

## 宗像地域の古代史と遺跡概説

花田 勝広

### 1.はじめに

宗像地域の北側は玄界灘に面し、東側は三郡山地北端となる湯川山・孔大寺山・金山・城山の四塚連峰が遠賀地域と境界をなす。南側は赤城山の低丘陵群が鞍手郡へと連なる。西側の津屋崎には、対馬見山・在自山・宮地嶽の丘陵が伸びる。唯一の河川である釣川は、全長15kmの2級河川で宗像の小平野を南から北に流れる。福間の西郷川流域は、小平野となり粕屋郡の低丘陵に続く。地形的には、釣川流域の平野部、西郷川の平野の2ブロックに大別される。

宗像の語源は諸説あるが、文身（身体に刺青状のようなものを入れる）に起因する説や江戸時代からの「空潟」・「沼無潟」の地理的要因説などが有力な説である。古代の遺跡は、海岸部に立地するものと平野部に立地するものに大別でき、玄界灘で一般的なあり方を示している。海岸部では、縄文時代以来の海を生業とする漁労（漁業）が中心となり、平野部では弥生時代以来の水稻農耕が経済の基盤となっていることは現在と変わらない。

しかし、古代においては主導的な役割が、移動性の高い玄界灘の漁労民と、脆弱な小平野の農耕民の間で変化する。その原因は、北部九州が朝鮮半島に近く、古代の朝鮮半島の人々の移動・文化の伝播・物資の移動が、本州島に伝わる門戸をなしたからと言える。この宗像の地理的要因が、海に生きる海人の活動に影響を与え、古墳時代に大和を中心に発生したヤマト政権の国家形成期に沖ノ島祭祀に見られるような、古代の宗像と大王家のつながりを緊密にしてゆく。このように、宗像の古代史を理解する場合、以下の二つの視点で、遺跡の変化、遺物の解釈をする必要がある。それは、①弥生時代から続く農耕文化の地域的発展のあり方を解明すること、そして②福岡平野などの周辺部からの影響やヤマト政権との政治的な影響で理解することの二つの視点である。

沖ノ島祭祀に目を奪われ、宗像を過信しすぎると、本質であるヤマト文化のマツリであることを見抜くことができない。本来の宗像の地域的発展を知るためには、①である地域の遺跡・遺物の検討を通して、その実態を知り、深めることが

大切である。このようなバランスのとれた視点が、この地域の正しい歴史認識につながる。

## 2. 古代地形と遺跡

### 2-1. 入海と釣川の形成

釣川流域は、現在平野となっているが、江戸時代には頻繁な洪水を引き起こしたことが、古文書から知られている。釣川の氾濫との戦いが古代からの農民の歴史でもあった。私も子供の頃に、台風で氾濫した釣川水系を間近に見たことがある。釣川の語源はよく分からないが、江戸・明治時代初期には江口川・田島川などの大字名が付いており、河川全体を示すものはなかった（西日本文化協会、1981）。また、史料や字名に釣に「ツル」のルビがあり、渡り鳥の鶴が語源かも知れない。ツルは、水路・水路のある低地を意味するとする考えもある。今後、詳しく調べる必要がある。

遺跡には、人の住む集落や水田跡、埋葬のための（墳墓・古墳）、生産をする場所（須恵器窯・鍛冶工房・製塩）などの跡が、発掘調査や分布調査で見られている。これらの遺跡を理解するためには、どこにいくつあるかを知る必要がある。古代の地形の様子を知らなくては、明らかにすることができない。

#### 2-1-1. 縄文時代の入海

まず、下山正一「釣川平野の発達史」と題する画期的な研究を紹介する（下山、1997）。平野部でボーリング調査を行い、地下の地質資料から縄文時代前期（4700年前）の地形が判明し、海岸線が推定された。この成果によると、田島・大井・東郷・稲元まで、入海が入っていた。現在の高さで5m前後あたりになる。現在の考古学の知見でも、後の弥生時代の遺跡でも、釣川遺跡を除くと全ての集落遺跡が、この高さよりも低い位置に立地しているものはない。したがって、この研究成果が全ての起点となる。

#### 2-1-2. 弥生～古墳時代の宗像潟

弥生時代遺跡を潟から立地を見ると、田島瀧ノ口、多礼コキゾノ、河東久戸、稲元久保、須恵クヒノ浦、三郎丸、田久、田久松ヶ崎、曲香畑、曲善王寺、東郷下ノ畑、東郷登り立、田熊石畑、大井三倉、大井池ノ谷、大井和歌遺跡などが、潟周辺に位置している。この内部が後背湿地や入海となるが、唯一向手丘陵の標高4m前後（推定）に立地する釣川遺跡が位置する。これらのことから、海退が進み田久北側、稲元南側、曲北側、東郷北側を中心に広域な入海は後背湿地を含め、大きな潟を形成していたものと推察される。集落遺跡から見ると最も低いのが、

5mの稲元下牟田遺跡（散布地）となる。

古墳時代の遺跡も、同様の位置で集落が配置されており、潟の干上がりは進んだものの、景観は変化が少なかったと推定される。集落の立地は、湿地縁辺から谷奥へ水田開発に伴い、分村集落が著しく多くなり、ほとんどの平野低地部に開発が進んだのであろう。そして、古墳時代の終わりには、山麓部に群集墳が造られる。

### 2-1-3.奈良・平安時代

律令期の宗像郡は、『倭名類聚抄』（以下和名抄と略記）により、「秋・山田・怡土・荒自・野坂・荒木・海部・筵内・深田・蓑生・津九・辛家・小荒・大荒」14郷が知られるが、半分の郷の位置が明らかでない（亀井，1998）。その郷名から旧宗像郡の範囲を超えて、遠賀郡の西側、粕屋郡の北側を含む領域と考えられる。したがって、古墳時代の宗像氏の勢力エリアがこの地域も含むと考えられる。

和名抄の郷名は、中世的郷名の成立で、分解・変化したものと考えられる。条里制の「坪」などの痕跡を留めるところは、曲・朝町・野坂などであり、潟より離れる小平野部となる。

古墳時代後期には、水田開発地帯と推定される。宗像市史で郷名と条里痕跡から、水田開発計画の時期が数時期にわたることが指摘される（亀井，1998）。一部、この時期のものが含まれる可能性もあるが、大半は東郷北側の一带付近は鎌倉期以降ではなかろうか（日野，1967）。奈良～平安時代には、大宰府からの駅路が整備されるが、武丸大上げ遺跡の評価をめぐり、従来考えられていた「宮司→桂→名児山→田島→田野→垂水峠」のコースでなく、「内殿→畦町→原町→赤間」のコースで、現在の唐津街道のルートに官道が想定されている（木下，1998）。

### 2-1-4.鎌倉～江戸前期

鎌倉時代の史料に宗像荘・赤馬荘・東郷・野坂荘などの記述があり、宗像神社の根本神領となったと見られる。宗像荘・赤馬荘・野坂荘は、土穴・山田・須恵、赤間・三郎丸、野坂・朝町などの釣川中流から上流に所在しており、農耕基盤の安定した部分とみられる。

鎌倉時代には、稲元・曲・東郷などの中世郷名が知られ、釣川・横山川・八並川・朝町川・高瀬川などの氾濫原及び湿地に灌漑を施す開発が推察される。注目されるのは、宗像大宮司氏の拠点をもとに、山田・土穴・田久の地名に基づき、「〇〇大宮司」呼称されている。宗像神社の根本神領は、土穴・須恵・稲元とされ、鎌倉時代以降の宗像氏の重要な経済的基盤を支えていた。この事は、宗像大



社文書などの中世史料や経筒の記載が知られる。また、野坂別府・田野別府なども史料で検討されるが、考古学的には不十分な点が多い（宗像神社復興期成会編，1961）。宗像の中世研究は、領主化した大宮司と開墾型条里、集落内の宗像神社末社の問題を、史料と共に、総合的に理解をすることが可能な地域である（桑田，2003）。戦国時代末の『田島諸小路屋敷帳』も一例で、田島・福田周辺に屋敷の存在が天正二年（1574）の史料に記事があり、この区域には屋敷・寺院が確認されよう。

### 2-1-5.江戸中期以降（釣川の改修）

江戸時代中期に東郷村の前身である集落が、釣川の氾濫で壊滅し、現在の位置に移動したことが知られている。水害の多い釣川本流沿いは、長期集落を営むには適切な土地ではなかったようである。しかし、宝暦三年（1754）・寛政三年（1791）には、富永軍次郎などによる釣川河口の江口に屈曲していた出口を直線的に延ばす開削工事と江口～辻田橋までの釣川浚渫が行なわれた。筑前国続風土記によると、深田周辺に洪水のたびに耐水していた水が流れ、流域の水はけがよくなり、湿地に排水路が掘られ、耕地化が進んだことが予想される（貝原，1703）。また、釣川の水運は、舟が土穴（船庭）まで遡上することが知られる。江戸中期の釣川の古絵図をみると、流路はほぼ現在の位置に固定しているようである。ところが、流路周辺には、河東久戸・曲北側などに沼地の溜池などが残っていたようである。明治末期～大正年間には、大字ごとに圃場整理事業が行なわれ、現在の区画畦畔の景観がつくられる。古い地割を踏襲しながら、用排水路の整備がなされた。しかし、釣川沿いには標高5 m以下の地域には長期集落が営まれることがなかった。

## 2-2.福間潟と桂潟

### 2-2-1.福間潟

海岸は蓑生浦と呼ばれ、和名抄の蓑生郷が、西郷川下流部に推定される。中流に神興廃寺・畦町遺跡があり、津丸郷の推定領域となっている。弥生～古墳時代の集落は、原町の香葉、福間駅東側、津丸五郎丸遺跡などが知られるが、実態が明らかでない。西郷川の下流域の氾濫原には遺跡は確認されておらず、上西郷や検見坂付近まで氾濫原がひろがっており、弥生時代から古墳時代には潟湖の存在が推定される。上流部に畦町遺跡があり、内殿・畦町周辺は集落や水田が広がっていたものと推察される。

### 2-2-2.桂潟

『宗像市史』に縄文時代前期の海岸線が復元されている（下山，1997）。弥生時

代～古墳時代においても、入海が広がっていたものと推定されている。同時期の遺跡も、丘陵や海浜部に勝浦・練原・新原奴原・生家・在自遺跡などが知られる。古墳時代の集落・古墳群の様相から潟や入海の様相が想定される。農耕は、谷水田を中心とする農耕基盤と考えられる。奈良～鎌倉時代には、交通路も丘陵部をとおり、名見山越のルートである。ただし、中世には在自西ノ後遺跡が、唐坊（津屋崎中学校）と考えられることから、潟の陸地化が進んだと見られる。

江戸時代には、塩田に広く利用されており、現在も潟が残る。留意されるのは、渡半島が塩浜から勝浦浜に続いて砂州が延びていたことで、海の中道の景観を呈していた。ところが、一部、白石浜で低い部分があり、古墳時代後半期には砂州帯を切通し、玄界灘に繋がっていたものと、私は推定する（花田, 1993）。

このように、宗像地域の景観は現代と異なり、潟が広がっていたものと考えられる。同様な現象は、古賀地域・糸島地域・遠賀川流域でも知られる。人々の営みの中で、入海→潟→湿地→水田への変化を遂げた。宗像海人の基層部分は海と平野の基盤を持つ特性が、地理的要因から考えられる。

### 3.旧石器時代・縄文時代の遺跡

#### 3-1.旧石器時代

発見されている遺跡は、宗像市池浦トボシ遺跡（ナイフ形石器）、平等寺長浦・原遺跡（剥片）、光岡長尾遺跡（台形石器）、福津市井ノ口遺跡（剥片尖頭石）、牟田池遺跡（ナイフ形石器・剥片尖頭石・楔形石器）手光酒屋遺跡（ナイフ形石器）などである。牟田池遺跡では、石器が多く、今後にもまだ発見される可能性がある。遺跡のあり方から、季節的な狩猟場などと推定されている。時期は、ナイフ形石器～細石器文化とされる。また、田野瀬戸古墳周辺でも石器などが出土した（平田, 1997）。

#### 3-2.縄文時代

縄文時代の遺跡は、最も古いものが江口海岸遺跡（前期）、江口神原遺跡（前期）などが知られている。江口神原遺跡は、昭和56年11月～12月に発見され、中村修身氏より報告されている（中村, 1982）。縄文土器は前期の曾畑式と思われるもの1点と中期後半～後期初頭の粗製深鉢の破片が採集されている。これらに伴って、鯉節形大珠・剥片・スクレパー・石匙・礫器・石鏃・打製石斧が採集されている。遺跡は土砂取りの発見のため詳細は不明であるが砂丘上に立地し、2枚の文化層が確認されている。遺跡は、現在のところ貝塚を伴っていないが、周辺で

発見される可能性もある。江口海岸遺跡は、白木の本号報告がある（白木，2010）。

縄文時代後期の鐘崎上八（こうじょう）貝塚は、後期中葉「鐘崎式」の標式遺跡で著名な貝塚である。大正年間に、坪井正五郎が鑑定を行なった。貝塚の調査は、昭和9年～昭和38年に3回実施されているが、第2・3次は立会調査であつた（田中，1936）。第1次調査（昭和9年11月）は、田中幸夫・鏡山猛によって、貝塚と隣接地（住居？）が調査されている。貝塚は、「標高4間余、砂山の頂から表面の砂を取り除けば、一尺至3尺位の貝層が45坪の面積を充していて、その下はまた砂層になっている」ということであつた。貝類は、アサリ・カキ・バイ・アカガイ・ナガニシ・テングニシ・レイシ・クボガイ・イガイ・ツメタガイ・ヨメガカサ・オホヘビガイ・ホタテガイ・サザエ・アワビ・ウミニナ等の海水産の貝類を主としている。また、淡水産のシジミ・カワニナ等が混じっている。さらに、猪・鹿の角・歯・牙や・魚・鳥骨の類も少なくない。土器は縄文土器80点と石器41点が報告されている。これらは、旧宗像郷土館に展示され、現在宗像高校に保管されて



鐘崎上八貝塚の縄文土器

ている。第2次調査（昭和27年10月）は、名和羊一郎・渡辺正気・原田忠昭による調査で、縄文土器・石器以外に老人女性1体と鹿角製筭2個が出土している（原田・小川，1955）。第3次調査（昭和38年）は、4体の人骨と共に頭部にサメ歯製耳飾1個を着装する人骨が知られる。以上が鐘崎上八貝塚に関する3回の調査の概要である。

これら報告を総合すると、縄文土器163点・石器64点・貝輪等7点となり、234点は確実に出土している。これらに九州大学考古学研究室所蔵分を含めると300点前後になるものと推定される（垂水康，1979・花田，1993）。また、釣川上流の富士原深田遺跡でも土器類が出土する。晩期になると、吉留下惣原遺跡は、釣川上流で確認されたもので、A地区で遺物包含層から、縄文土器・石鏃・石斧・スクレパー等が出土してい

る。土器は、縄文晩期のものとみられているが出土量が少ない。また、福津市の手光於緑遺跡でも中期・後期・晩期の遺物が検出される。奴山馬場遺跡では、晩期の埋甕が検出される。

このように、宗像地域は釣川流域が宗像入海となっていた為、縄文時代の遺跡は少ないが、潟周辺や玄界灘沿岸の砂丘下に発見される可能性が高い（清水，1997）。

## 4. 弥生時代の遺跡

### 4-1. 弥生集落の様相

宗像における集落は、大きく釣川水系、西郷川水系、玄界灘沿岸に面した海浜部の3地区に大別される。しかし、旧海岸線を推定すると宗像入海、津屋崎入海や後背湿地などによって、水田可耕地は極端に狭く、福岡・早良平野のような大規模な集落は存在しない。近年の発掘調査で、いくつかの遺跡が調査され、実態が明らかとなりつつある。このような発掘調査成果により集落・墓域について検討する（花田，1993）。

#### 4-1-1. 釣川水系

地形と遺跡の分布により、水系を中心とする東郷、赤間、南郷の地勢圏に細別できる。

##### 東郷地勢圏（釣川中央部の遺跡）

東郷と田熊は、釣川の支流である松本川の両側に派生する低丘陵上に立地する。田熊地区では、スベットウ古墳の立地する屋根に続く示現神社（標高18m）が突出し、その北東側に標高14～16mの平坦面が広がる。遺跡は、出土地や散布地から、田熊石畑遺跡、田熊上ノ畑遺跡、田熊中尾遺跡に大別される。東郷地区の遺跡は、高塚古墳の立地する丘陵に続く、小尾根が北東に突出し、旧国道3号線へ伸びる。微高地は、等高線を詳細に観察すると8～12mの等高線が集落上に明確に認められる。丘陵は宗像高校南側から、宗像自治会館に平坦面が広がる。南側の字下ノ畑～古屋敷の畑地は、昭和46～48年当時に弥生土器・須恵器・土師器の広域な散布が認められており、遺構の存在が予想されていたが、東郷古屋敷で竪穴住居が確認される（花田，1993）。

**田熊石畑遺跡** 旧宗像高等女学校に所在する集落跡で、標高12m前後の微高地上に立地する。地下げ地は、南側がグラウンド、北側は校舎として宗像高等女学校、宗像中央中学校時代（昭和40年頃まで）に利用されていた。グラウンドは、南側1m

ほど削平されているものの、中央部は西側の水田面と同一であり、かなりの遺構が残存する可能性が強い。特に南側崖面には、耕土下に遺物包含層が露出し、弥生土器・須恵器などが現在でも採集できた。郷土館には、土器・太型蛤刃石斧・柱状片刃石斧・石戈・石剣・叩石・石包丁などがあり、弥生前期中葉～古墳時代にかけて遺構が存在するものと考えられていた。

平成20年度の宗像市調査区では、南西隅で9基の木棺墓が確認された。細形銅剣1点、中細形銅剣3点、細形銅戈1点、ヒスイ製垂飾2点、碧玉製管玉19点を検出した1号木棺墓をはじめ、調査された6基すべての木棺墓から青銅製武器が検出された。本来、南北14m以上、東西8m以上の方形の区画墓と推測される。青銅製武器は15点を数え、弥生時代中期前半と考えられる。木棺墓群の北側では、居住域が広がっている。竪穴住居6棟、貯蔵穴及び土坑170基あまりが検出されて、時期は主に中期初頭から前葉の時期に比定される。その北東部では直径約60mの環濠の半分程度を確認した。削平を受けていたため、現状では幅1.6m、深さ0.5mで、入り口2カ所も確認されている。時期は、弥生時代前期後半から末である。検出された15点の青銅製武器は、北部九州の区画墓では最多となる。また、それに併行する時期の集落跡も検出され、区画墓を営んだ集団のあり方を知ることができる。このように田熊石畑遺跡は、北部九州における弥生時代の集落や墓制の在り方を知る上で極めて重要である（白木, 2009）。

**田熊中尾遺跡** スベットウ古墳の立地する丘陵より続く小尾根上に位置し、先端は示現神社となる。示現神社周辺では、南側の崖面で袋状竪穴、忠魂碑建設にて、甕棺・銅剣1口が検出されている。また、神社南側に昭和14年当時、乳牛場があり、弥生土器が出土しているようだ。現在も、神社崖面や東郷小学校斜面に土器の散布が認められる。さらに、東郷遺跡群の調査地（中尾遺跡）に続く平坦面にも土器散布が確認される。

以上のことから、示現神社周囲に弥生前期後半の貯蔵穴群と斜面に中期の土壙墓などの墓地が存在するようだ。日の里団地の中尾遺跡調査区では、遺構は検出されていないものの弥生前・中期前半の土器群が多量に出土しており、JR線北側にも同時期の遺構群が広がることは確実であろう（波多野, 1967）。

**田熊上ノ畑遺跡** スベットウ古墳から東北に伸びる平坦面上に立地する遺跡で、従来、弥生土器・須恵器・土師器・青磁などの広域な散布が知られていたようだ。調査は、日の里団地の造成に伴って、昭和41年に遺物の集中する上ノ畑遺跡の北地区（200㎡）と南地区（300㎡）について実施されている。北地区は、北側へ傾斜する斜面に竪穴住居1棟、袋状竪穴4ヶ所・柱穴群、遺跡が検出されている。詳細な出土状況は、報告書からは復元不可能である。このうち、竪穴住居

は、山辺3.8×4.5mの隅丸方形住居で、支柱穴が4本認められる。壁溝も全周している。住居からは、土師器の甑・椀・甕が出土しており、古墳時代中期以降と考えられる。貯蔵穴と考えられる土壇はA・B・C・F穴で埋土内より弥生時代中期の土器群が出土しているようである。柱穴は、配列が明確ではないが、1～2棟の掘立柱建物が存在したのかも知れない。土器は、D地点周辺に集中して出土していたようであり、弥生中期後半のものが大半であるが、古墳時代の土師器も含まれる。

上ノ畑遺跡南地区は、約2500㎡前後の畑地に9ヶ所のトレンチが設定され、遺物の有無の確認が行われている。遺物は、弥生中～後期の土師器片が出土した（波多野, 1967）。

このように2ヶ所の調査区で、弥生中～後期、古墳時代、中世の遺構が一部検出されたに留まっている。遺跡の状況から、水田に伴う削平が著しく、大半の部分が未調査で消滅したことは惜しまれる。

以上が田熊遺跡の5ヶ所より検出された遺構及び遺物の概要である。これらを現在、確認できる出土遺物を整理し、時期別にみると次のようになる。①は、弥生前期の遺物が出土する地点は、石畑地区（宗像高等女学校）・役場裏地区（恵比須町）・中尾地区（示現神社）・上ノ畑地区の地区で確認できる。特に石畑・役場裏地区に土器・石器出土が集中するようである。②は、4ヶ所とも前期～中期に断続するようである。③は、弥生時代以降の遺物が検出されるのは、上ノ畑・石畑・恵比須町地区で、古墳時代中～後期の遺物も出土する。

**東郷登り立遺跡** 東郷丘陵背後の標高30mの丘陵上に立地する。遺構は、方形の竪穴住居1棟と石蓋土壇が検出され、弥生後期後半に比定される。宗像高校内の発掘調査では、前期初頭の長径100mの環濠が検出される。弥生時代早期としては、環濠の規模も大きい。削平されているが、後期前半～末の遺構も確認される（宗像市教育委員会, 2001）。

**大井（和歌神社）遺跡** 標高20m前後の低丘陵に位置し、石剣・太型蛤刃石斧が出土しており、弥生前～中期と考えられる。

**釣川遺跡** 釣川中央部の氾濫原である向手丘陵南端に立地している。採集遺物は、太型蛤刃石斧・広形銅矛1口・鑄造鉄斧がある。これら以外に古墳時代前・中期の遺物が多く出土する。遺構は時期不明の竪穴が確認されている程度で明らかでない。ただし、石斧や銅矛の出土から、弥生中期～後期の遺構の存在が推察される（田中, 1935）。

**大井三倉遺跡** 標高20mの丘陵上に立地する集落で、V字溝・竪穴住居2棟・袋状竪穴3基が検出される。II B区のV字溝は、幅5m、深さ1.9mで、約90mにわ

たつて続き、幅6mの陸橋部が検出されている。環壕内部では、袋状土壙などは存在しないようだ。時期は弥生前期中葉に比定される。竪穴住居は、環壕から北へ170mに位置し、円形住居2基と同時期の貯蔵穴が検出されている。時期は、中期前半と考えられている（宗像市教育委員会, 1987）。

**久原遺跡** 標高30～40mの丘陵上で、袋状竪穴18基・甕棺5基・土壙墓41基が検出されている。袋状竪穴は、Ⅱ区に18基が群集し、弥生前期末～中期前半に比定される。土壙墓は、8基が甕棺5基と共に同じ平坦面にあるが、中期の33基は、この一群と離れた位置にある。前期のⅡ-8号墓からは、有柄式石剣と有茎磨製石鏃4点が出土している。中期のⅣ-1号墓からは、細形銅剣1本・細形銅矛1本・管玉12点が出土し、中期中葉に比定される。甕棺は5基あり小児棺と考えられている（宗像市教育委員会, 1988）。

**曲香烟遺跡** 標高35mの丘陵上に立地し、袋状竪穴74基が検出されている。遺構は、A・Bの小尾根頂部にあり、前期後半～末の年代と考えられている。竪穴住居は、周辺で検出されていないが、かつては谷部に土器・黒燿石の散布があった（宗像市教育委員会, 1984）。

**稲元久保遺跡** Ⅲ区の標高35mの丘陵上で弥生中期の袋状竪穴が検出されている。

**須恵クヒノ浦遺跡** 標高30m前後の丘陵で袋状竪穴20基前後が検出されている。時期は前期～中期前半と考えられる。

### 赤間地勢圏（釣川上流部の遺跡）

**田久松ヶ浦遺跡** 田久の小平野を見下ろす丘陵上に立地し、前期前半の墳墓（木棺墓・石槨墓・土壙墓・甕棺）中期～後期の竪穴住居11棟・貯蔵穴が検出される。円形と方形の竪穴住居が検出された（宗像市教育委員会, 1999）。

**富地原梅木遺跡** 標高30～40mの丘陵上に立地し、竪穴住居14棟・袋状竪穴86基・土壙墓と石蓋土壙111基からなる集落と墓域である。遺跡は、弥生前期末～中期初頭の竪穴住居と袋状土壙の集落が廃絶した後に、中期の土壙墓群が111基の営墓がなされ、後期末の集落が形成されている（宗像市教育委員会, 1990）。

**富地原森遺跡** 平坦面に竪穴住居・土壙が検出されている。時期は、中期初頭～後期となる。

**富地原岩野B遺跡** 低丘陵に位置する遺跡で、円形住居4棟、方形住居4棟、掘立柱建物群が検出されている。円形住居は、中期前葉～中期中頃、方形住居が後期後半に比定される。

**富地原小嶺遺跡** 尾根斜面に前期～中期にかけての貯蔵穴58基、直径6mの円形の竪穴住居5棟が検出される。また、土壙墓が10基ほど調査される。

**石丸遺跡** 丘陵上に11基の袋状竪穴・溝状遺構が検出され、中期初頭の時期に比定される。このうち、3号袋状竪穴から、土器・獣骨・貝類が出土している。

**武丸初瀬遺跡** 丘陵先端に前期末～中期の貯蔵穴29と住居3棟が検出される。

**武丸的場遺跡** 直径5.7mを測る前期の円形住居が1棟検出される。

**吉留京田遺跡** 平野部に立地し、円形の竪穴住居と甕棺墓3基が調査されている。甕棺は2つの甕を合わせた小児用のもので、弥生後期と考えられている。このうちの1つからは、ガラス小玉と管玉が出土している。

**徳重高田遺跡** 名残丘陵に立地する墓地で、土壙墓44基、箱式石棺27基、石蓋土壙墓15基など各種の葬法を用いた墳墓群である。時期は弥生後期に造墓が開始され、古墳時代まで続くようである。第4次調査では、丘陵頂部に10基、北尾根上の中腹に14基、北東側裾に10基、東南裾部に2基の4単位の造墓集団が指摘されている。出土遺物は、鉄鏃・素環頭刀子・後漢鏡片などがある。これら以外に三郎丸今井城遺跡の土壙墓、徳重遺跡・安倉などに弥生遺跡が知られる（宗像市教育委員会, 1991）。

**田久立崎遺跡** 釣川を見下ろす低丘陵に位置し、前期後半の幅3mのV字形の環壕が検出された。

### 南郷地勢圏（釣川南部の遺跡）

**野坂一町間遺跡** 平野部に立地する集落であるが、削平が著しく掘立柱建物1棟・竪穴8ヶ所を検出したに留まっている。建物は一間（4.3m）×1間（3.3m）を測るもので倉庫と考えられる。竪穴からは中期後半の土器・石器類が出土している。

**野坂松ヶ崎遺跡** 前期の竪穴住居1棟と貯蔵穴2基が確認される。

**光岡長尾遺跡** 標高30mの丘陵上に直径42～46mの円形を呈すV字溝とその内外に50基以上の袋状竪穴が検出されている。V字溝は幅4m、深さ3mを有し、南北に1.5m幅の陸橋を削り残している。周囲には、竪穴住居等は検出されておらず、貯蔵穴群単体の環壕である点は注目される。遺物は、土器・石器類に伴って陶損が出土している。時期は、弥生前期末～中期初頭と考えられる（安部, 1997）。

**朝町竹重遺跡** 標高40mの丘陵上に土壙墓105基前後が検出されている。そのうち、土壙墓から細形銅戈1口・銅矛1口が出土している。この墓の年代は、中期前葉と推定される。土壙墓群は全体として、弥生前期末～中期後半の営墓と考えられる（安部, 1997）。

**光岡草場遺跡** 小丘陵上に立地する大小の土壙墓24基と甕棺2基が検出されている。このうち、2基の土壙墓に壺の供献があり、弥生中期後半と考えられる。また、2基の甕棺は、甕を合せ、墓壙内に水平に納めたもので小児棺と考えられる。



**光岡辻ノ園遺跡** 光岡の低丘陵に位置する遺跡で、中期末～後期初頭の竪穴住居2棟・土壇16・溝が検出されている。

**朝田町ノ坪遺跡** 標高15～20mの低丘陵裾で、弥生中期中葉の円形住居が検出されている。これら以外に大穂谷塚（太型蛤刃石斧）の出土地点がある。

これら以外に河東神社（中期）・久戸遺跡（中期～後期）・多礼コキゾノ（石剣）・多礼楠木（石斧）・田島瀧ノ口（石斧）などの採集地がある。

#### 4-1-2.西郷川水系（西郷川流域の遺跡）

古くは、香葉遺跡・福間川・元朔田（石器）・津丸（石剣）・大和（小児甕棺）などの出土地が知られていたが、近年に手光酒屋・福間割畑遺跡・手光久保田遺跡・福間中ノ坪遺跡などが調査される。

**手光於緑遺跡** 手光の小平野内から溝群が検出された。前期の土器が出土した。さらに、中期～後期初頭の溝状遺構や水貯遺構が検出される。

**手光酒屋遺跡** 竪穴住居1棟で中期末～後期初頭に比定される。

**福間割畑遺跡** 貯蔵穴が2基検出された。土器の他に、石包丁・砥石が出土する。

**福間福正寺遺跡** 福間の低丘陵に位置し、後期の竪穴住居3棟が検出された。

**香葉遺跡** 八龍神社西側の丘陵上に立地する遺跡で、竪穴住居等が存在したようだ。遺物からは、太型蛤刃石斧と弥生中期の土器群が出土している。

**今川遺跡** 標高14mの砂丘上に立地し、竪穴住居1棟・環壕が検出されている。環壕は幅3m、深さ1.3mで弧状となる。そのうちには、円形の竪穴住居が検出され、やや先行して造られている。環壕の時期は、板付I式期とされ、前期初頭に比定される。遺物は、打製及び磨製石鏃・石斧・砥石が多く出土し、石錘も多数認められる。また、銅鏃として2次加工された遼寧式銅剣が板付I式の文化層に出土する（酒井, 1981）。

**宮地大ヒタイ遺跡** 福間海岸の砂丘上に位置する遺跡で、前期後半～中期の貯蔵穴20基が検出される（津屋崎町教育委員会, 1993）。

#### 4-1-3.玄界灘沿岸（海浜の遺跡）

津屋崎の海浜や神湊・鐘崎の海浜の遺跡で、古くは宮司（土器・黒耀石）・須多田宮ノ下（器台）が知られていた。圃場整備に伴い、多くの遺跡が調査される。

**勝浦坂口遺跡** 弥生後期の円形の竪穴住居2棟が検出される。

**勝浦高堀遺跡** 勝浦の丘陵上に位置する遺跡で、貯蔵穴1が確認された。注目されるのは、銅鐸鋳型未製品が出土している。中期中ごろとされる（津屋崎町教育委員会, 1998）。

**奴山伏原遺跡** 奴山川南岸に立地し、弥生土器・太型蛤刃石斧・石鏃（黒耀

石)が出土している。遺物は、新原・奴山30号墳～36号墳北側で採集されたものが多い。発掘調査で中期の円形住居1棟が確認された。

**生家釘ヶ浦遺跡** 桂潟の中央部新原の南側、海岸をやや奥まった丘陵緩斜面にて、集落が確認されている。弥生時代後期～古墳時代早期の遺物も出土しており、前身集落の存在が窺える。集落は、弥生時代後期末から庄内式併行期の流路、竪穴住居3棟が確認される。

**須多田立石遺跡** 須多田の丘陵上で、中期の円形住居1棟が検出された。

**田野依嶽神社** 田野の丘陵上に立地し、太型蛤刃石斧が採集されている。

**鐘崎上八遺跡** 標高5mの砂丘上に立地し、甕棺2・箱式石棺4基などが調査されている。甕棺は口縁部を上に向け、約30度の傾斜で埋葬された単棺である。甕棺は器高70cm、体部径41cm、底径14cmで口径40cm前後と推定される。時期は前期後半と考えられる。周囲には板付Ⅱ式の壺。須玖式の高杯が出土しており、弥生前期後半～中期にかけての墓地である。箱式石棺については、出土遺物はなく、時期は不明である(鏡山, 1972)。

これら、釣川・西郷川流域・玄界灘海浜部の遺跡を通じて云えることは、水田可耕地が狭く、弥生前・中期の遺跡は、水田を見下ろす丘陵上に立地する場合が多い。一方、後期になると、小支谷や小平野の低地または丘陵に集落が立地するようになる。

#### 4-2. 弥生集落と袋状竪穴

竪穴住居が検出されている遺跡は、田熊石畑・今川・大井三倉・冨地原梅木・野坂一町間・朝町町ノ坪・吉留京田・須恵クヒノ浦遺跡などが代表的なものである。

このうち、今川遺跡が前期初頭、大井三倉遺跡(中期初頭)、野坂一町間遺跡(中期後半)、朝町町ノ坪遺跡(中期後半)、冨地原梅木遺跡(前期末～中期初頭と後期)、須恵クヒノ浦(前期終末)・田久松ヶ浦(後期後半)が年代に比定される。住居の基本形態は、前～中期を通じて円形を呈し、後期後半～終末に長方形または方形への移行がみられる。

冨地原梅木遺跡では、中期初頭～前葉の円形住居が尾根斜面に11棟が検出される。梅木Ⅲ期は尾根北側に4棟、南側に2棟の2グループから構成される。梅木Ⅳ期は20～40mの間隔で5棟が検出されている。同時期の袋状竪穴とも対応関係も認められる。また、石丸遺跡3号貯蔵穴からは、廃棄された城ノ越式期に粃・猪・たぬき・鹿などの獣骨や貝類が出土している。貝類は、釣川下流域の淡水産のしじみ、かわにな、鐘崎・神湊の岩礁性のあわび・さざえが出土している(橋口,

1980)。

一方、環壕を有する大井三倉遺跡では、貯蔵穴等の深い遺構の存在は比定されており、崖面に、前期中葉の土器群が竪穴住居状の遺構内が認められたことから、住居群に伴うものとみられる。また、田熊石畑遺跡・東郷登り立遺跡でも環壕が確認される。いずれにせよ、竪穴住居の集落群の実態は、今後の調査に待つしかない。

袋状竪穴(貯蔵穴)は、田熊石畑遺跡(170基)、大井三倉遺跡(3基)・冨地原梅木遺跡(86基)、久原遺跡(18基)・光岡長尾遺跡(50基)・曲香畑遺跡(58基)・須恵クヒノ浦遺跡(20基前後)・石丸遺跡(11基)・稲元久保遺跡・田熊中尾遺跡(2基)・田熊上ノ畑遺跡(4基)、大井平野(5基)などがあり、多数が調査されている。時期はほとんどのものが、前期後半～中期前半に比定される。これらは、水田から10～20m以内の比高差を有する丘陵上に立地する。

このうち、冨地原梅木・曲香畑遺跡などの丘陵上に群集する一群と光岡長尾遺跡のような環壕を有する大規模なものである。袋状竪穴が貯蔵穴として、穀物を主たる倉庫としての環壕内に袋状竪穴を有するものがある。前者は通有に存在し、数群のグループからなり、後者は光岡長尾遺跡の母集落が大規模なものと予想される。袋状土壇が中期後半に検出されないことから、平野部集落の掘立柱倉庫への穀物管理が変化したようだ。ただし、平野部の集落調査が進んでおらず実態は不明確な点が多い。

### 4-3.弥生墓制の様相

#### 4-3-1.墓地

発掘調査によって、田熊石畑・冨地原梅木・久原・朝町竹重・光岡草場・徳重高田遺跡などで、土壇墓・甕棺・石蓋土壇・箱式石棺などが検出されている。このうち、土壇墓が宗像の弥生時代の全般期に主流の墓制である。次に、発掘調査に伴う代表的なものを通じ、墓制のあり方を検討したい。

田熊石畑遺跡では、9基の木棺墓を確認された。木棺の同一方向のもの、直交するものなどがあり、計画的に配置されている。このうち、1号墓からは、5本(銅剣1・銅矛2・銅戈1)、ヒスイ製垂飾・管玉19が出土した。2号墓では、4本(銅剣1・銅矛2・銅戈1)と管玉9を確認された。3号墓は、銅剣1本、4号墓で3本(銅剣1・銅矛2・銅戈1)と勾玉1・管玉133が出土した。6号墓は、銅剣1本・ガラス小玉1・勾玉1が確認。7号墓では、銅剣1本・異形勾玉1・管玉48が出土した。このように、まとまった区域の墓に出土しており、有力集団層の墓域であることが注目される。遺跡は、さらに南側に広がっており、青銅器の数は増加する

と思われる（白木, 2009）。

田久松ヶ浦遺跡では、丘陵上に石槨墓1基・木棺墓9基・土壙墓3基・甕棺墓1基が検出された。石槨墓はこの遺跡を特徴づけるものである。木棺墓は、副葬小壺の収納空間を作る。出土品に有柄式石剣・有茎磨製石鏃が出土している。前期の墓地としては最も古相である（宗像市教育委員会, 1999）。

久原遺跡では、前期の土壙墓が8基と甕棺5基が検出されている。土壙墓は、長さ2m前後、幅0.6m前後の素掘りで、成人墓と見做されている。このうち、II-8号墓からは、有柄式石剣1点・有茎磨製石鏃4点が出土している。甕棺は土壙墓に群在し、土壙内より下甕が出土しており、本来合口の小児棺と推定される。したがって、久原遺跡の前期の墓地は、土壙墓が成人、甕棺が小児と考えられている。中期になると、墓地は尾根南側に移動し、土壙墓33基が密集する。土壙墓は、2段の墓壙内の中央に被葬者を埋葬する構造のものが多く、規模より成人・小児を共に埋葬したものと見做されている。土壙墓の配置は、南北に主軸を有するもの10基、東西方向の軸のものが23基あり、2群の配列が確認できる。また、祭祀遺構が調査区南側で検出されている。これらのうち、IV-1号墓は、墓壙長2.9m×幅1.9mで棺身長2.3m×幅1.2mを測り、内部より、細形銅剣1口・細形銅矛1口が出土している。群内の有力首長墓と考えられ、弥生中期中葉に比定される（宗像市教育委員会, 1990）。

光岡草場遺跡は、丘陵上に24基の土壙墓と甕棺墓2基が検出されている。その配置は南北主軸のもの8基、東西主軸の14基の2群配列が確認できる。土壙墓の構造は、2段掘りのものと、素掘りが半分であるが、大型のものは2段掘りとなっている。副葬品は、ほとんどなく、墓壙に土器供献されたものが24号・2号・11号墓が知られる。久原遺跡と同様に、土壙墓は大小があり、成人・小児が埋葬されたものと見做される。甕棺墓は、2基とも、甕形土器を合口としたものであり、小児棺で中期後半に比定される。このように、遺跡としては、中期前葉～後葉に営墓されたものであり、中葉をピークとするようである。

富地原梅木遺跡は、丘陵主軸に沿った105基の土壙墓が検出されている。その配置は尾根主軸方向に88基があり、強い規制の中で営墓が行われたようである。このうち、主軸を大きく変える13基が知られる。構造は、2段掘りのものが6割、残りが素掘りとなっているが、削平などを考慮すると、7割前後が2段掘りとみられる。規模においても長さ2m×幅0.6m前後の棺身のものが一般的で成人墓と考えられ、小型の一群は小児墓と考えられる。この中でSK-1は、墓長3.2m×幅2.2mと最大規模であり、鉄戈が副葬されることから、有力首長墓と見做される。さらに、SK-53で鉄戈、SK-75で刀子、SK-18で管玉の副葬があり留意される。一

方、12基に供献土器が認められ、これらが2段掘りの構造に多く検出されることに注目される。造墓時期は、供献土器によって弥生中期内に造墓がなされ、北から南への造墓が指摘されているまた、墓域北端に祭祀土壇（SK-200）が設けられている。

朝町竹重遺跡は、丘陵上に土壇墓・木棺墓・甕棺墓が約105基検出されている。墳墓群は、4グループに分けられ、それぞれが低墳丘を有する。墳丘は、10～15mの方形区画を有し、15～50基の土壇墓・木棺墓・甕棺墓が検出されている。時期は弥生前期末～中期後半に比定される。

徳重高田遺跡は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての箱式石棺42基・石蓋土壇墓25基・土壇墓57基が調査されている。箱式石棺・石蓋土壇墓ともに土器副葬が少ないため、年代が決定しがたいが、後期には、これらの埋葬が多く用いられているようである。

吉留京田遺跡は、平野部で3基の甕棺が検出されている。2・3号は近接し、1号はやや北へ離れた地点に位置する。このうち、1号棺は短辺0.65m×長辺1.35mの楕円形の墓壇に甕を組合せたものである。下甕内よりガラス製小玉と碧玉製管玉が出土し、弥生後期に比定される小児棺である。これらの遺跡以外に三郎丸遺跡が、2段掘りの土壇から弥生中期に推定されている。

鐘崎上八遺跡は、玄界灘に面した砂丘上で、甕棺と箱式石棺が調査されている。甕棺は、300㎡前後の傾斜地に埋置された単棺で器高70cmを測る。小児用と推定され、前期後半に比定される。箱式石棺は、出土遺物がなく時期は不明である。出土資料は東京国立博物館に保管される。

以上の遺跡が墓地として調査された主要なものである。宗像における弥生時代の通有の葬法は、土壇墓を主体とした成人墓が前～中期を通じて認められ、後期に箱式石棺・石蓋土壇墓が加わるようである。甕棺は、久原・光岡草場・富地原梅木・鐘崎上八・吉留京田遺跡にみられるように、前～中期に小児棺として土壇墓群に付属して群在し、後期には単体で分布する様相である。したがって、基本的には北部九州の成人甕棺埋葬のエリアとは異なる。一方、土壇墓には小児用と思われるものもが、成人墓内に付属して混在する。そして、有力首長墓は、土壇墓内に青銅器・鉄器を威信財として副葬する。さらに、富地原梅木・朝町竹重遺跡のように、一定方向の造墓規制を窺えるような縦列配置が中期に盛行しており、甕棺文化圏の様相と葬法は異なるものの基本的思想で類似する（花田，1994）。

#### 4-3-2.青銅器の副葬

釣川遺跡の広形銅矛を除くと他は墳墓からの出土とみられる。遺構としては、木棺墓（田熊石畑）土壇墓（久原IV-1号墓・朝町竹重SK-28号墓）・箱式石棺

(上八中羅尾)・箱式石棺(鐘崎上八)・田熊中尾(土器と共に出土)がある。地域圏でみると、釣川水系の東郷に5遺跡20本、南郷に1遺跡2本がある。玄界灘沿岸の鐘崎に2遺跡4本がある。

時期別にみると、東郷高塚が弥生前期末、田熊石畑遺跡墓が中期前半、朝町竹重が中期初頭、久原IV-1号墓が中期中葉、上八中羅尾が中期後半～後期初頭、釣川が後期後半に比定される。一方、他のものは盗難のため不明であるが、中期を中心とする時期と推定される。現在、宗像郡内出土の武器形青銅器数は25本で、田熊石畑遺跡が15本と突出する。

このように、武器形青銅器は、中期の地勢圏内の有力首長層墳墓へ埋葬されている。特に拠点集落の東郷・田熊遺跡周辺に多く集中することは、釣川流域の東郷地勢圏が、この地域の中核となるものと見做される。さらに、田熊石畑遺跡では、中期前半に特定有家族墓の個人墓が出現しており、各集落を統括する地勢圏首長層と見られる。一方、古墳時代前期に前方後円墳である東郷高塚古墳も、この地域に造墓がなされていることから田熊・東郷地勢圏の優位性が確認できる(花田, 1994)。

## 5.古墳時代

### 5-1.古墳時代の集落

集落は、弥生時代の地勢圏を踏襲し、平野部が立地しているものが多い。調査は、釣川上・中流域の宗像市と玄界灘沿岸の津屋崎町に集中しているため、周辺部の実態は必ずしも明らかではない。したがって、農耕に伴う集落の調査が多いが、玄界灘沿岸の海浜集落は在自遺跡群・生家釘ヶ浦遺跡・練原遺跡群などの調査が主なものである。

#### 5-1-1.釣川水系(内陸部の遺跡)

赤間地勢圏では、吉留京田・武丸大上げ・吉留下惣原・武丸小伏・武丸高田・富地原川原田・富地原神崎屋遺跡・石丸坂へう遺跡などがあげられる。

**吉留京田遺跡** I～III区で5,000㎡から50棟の竪穴住居が検出され、その範囲は、南北250m×東西100mの広域にわたる。竪穴住居は、方形をなすものが主流で、壁溝を廻すものが通有である。時期は、前期～後期までと考えられている(宗像市教育委員会, 1986)。

**武丸大上げ遺跡** 方形の2棟の住居が検出され、古墳時代前期のものと考えられる。

**吉留下惣原遺跡** A区で掘立柱建物2棟・竪穴住居5棟、B区では、掘立柱建物19

棟・竪穴住居14棟・溝5条が検出される。両地区とも掘立柱建物のみで構成されており、規模や構造から倉庫群と推定されている。時期は6世紀後半～7世紀初頭を最盛期とし、7世紀前半に途絶えるようである。

**武丸小伏遺跡** I区で竪穴住居2棟、I区で竪穴住居1棟が検出されている。特に2号住居は、4本の支柱穴を持ち、カマドを付設する方形プランを呈し、6世紀後半に比定される。他の2棟も同時期のものである。

**武丸初瀬遺跡** 丘陵先端に前期の竪穴住居2棟が検出される。

**富地原森遺跡** 平坦面に竪穴住居2棟・土壙が検出されている。

**武丸高田遺跡** 竪穴住居4棟・掘立柱建物1棟が検出されている。住居は方形プランを呈し、支柱穴4本で壁溝を廻すものが通有である。3・4号住居には、鍛冶炉が設けられており、工房と考えられる。集落の時期は、5世紀前半～6世紀後半とされる。また、竪穴からは、庄内～布留式（最古）併行用の土器群が出土しており注目される（宗像市教育委員会, 1986）。

**富地原川原田遺跡** 竪穴住居43棟が検出され、5世紀前半～6世紀を中心とする集落である。このうち、27号住居から軟質の韓式系土器が出土し、渡来人との関係が注目される。特に、24号住居から、畿内の庄内式の特徴を持つ、在地胎土の土器群が検出される（宗像市教育委員会, 1994）。

**富地原神崎屋遺跡** 滑石製未製品と白玉・有孔円盤・砂石が出土している。これらは、SK8の廃棄土壙や竪穴住居から出土しており、小規模な生産が行われている。滑石石材は、白玉・有孔円盤の原材料と考えられる扁平な石材などが、約3Kgが出土している。（宗像市教育委員会, 1996）

**徳重本村遺跡** 小丘陵上に5世紀～6世紀の竪穴住居10棟がC区で検出される。

**石丸坂ヘラ遺跡** 赤間の低丘陵で中期の竪穴住居2棟が確認される。

**三郎丸今井城遺跡** 弥生時代後期～古墳前期の竪穴住居2棟が検出される。

南郷地勢圏では、野坂一町間・王丸河原・朝町町ノ坪・曲田代遺跡などがあげられる。

**野坂一町間遺跡** 竪穴住居9棟・掘立柱建物1棟が検出されている。住居の改築や増築が認められるが、5世紀前期～5世紀末に集落が連続する。このうち、4号・5号・6号住居で鉄滓が2500g出土している。特に1号住居で鍛冶炉2基が検出されている。

**王丸河原遺跡** 竪穴住居10棟が検出されている。住居は、5号住居が前期初頭、他のものが6世紀後半に比定されている。これらの遺跡以外に朝町町ノ坪遺跡では、カマドを造り付ける方形住居が検出され、6世紀後半と考えられている。

**光岡六助遺跡** 古墳前期～中期の竪穴住居16棟が検出される。住居の重複から

大規模集落と推定される。

**光岡番田遺跡** 光岡の低丘陵に位置する遺跡で、中期の方形住居2棟が確認される。竈を西辺に設置する。鉄滓が出土する。

**光岡辻ノ園遺跡** 光岡の低丘陵に位置する遺跡で、古墳時代前期の竪穴住居5棟・土壇・溝が検出されている。タタキ目を有する甕が出土する。

東郷地勢圏では、大井三倉・池浦高田・久原龍ヶ下遺跡などがある。

**田熊石畑遺跡** 田熊の低丘陵に東西30m×南北50mの範囲に、16棟の掘立柱建物群が検出された。平面が2間×2間のものがほとんどで、総柱構造である。床面積は、10～20㎡が多い。建て直しも確認されるが、建物軸が揃っており同時期のものであろう。時期は、中期初頭と後期後半（6世紀後半）で、後者が中心時期であり、宗形氏中枢の倉庫群と推察される。これら以外に、田熊遺跡群でも前期～後期にかけての遺物が出土しており、今後の調査が期待される（白木, 2009）。

**大井平野遺跡** 大井の湿地を見下ろす丘陵上に位置する集落で、弥生後期終末～古墳時代前期の竪穴住居が検出される。

**大井三倉遺跡** 宗像入海を見下ろす丘陵で11棟の竪穴住居が検出されている。削平が著しいが、2号・6号・9号住居が5世紀後半、3号住居が6世紀中葉に比定されている。

**池浦高田遺跡** 竪穴住居15棟・竪穴7基・溝3条が検出されている。住居は、主柱穴4本・壁溝を有する通有のものばかりである。時期は、6世紀を中心に営まれている。

**久原龍ヶ下遺跡** 圃場整備では、竪穴住居11棟・溝4条が検出されている。住居は、2本主柱穴の長方形プランのものと、4本主柱穴の方形プランの2種があり、3世紀末～5世紀の集落と考えられている。特に3号住居から板状鉄斧（長さ32cm×幅6cm）に伴って庄内式土器の装飾壺・甕類が出土している。また、鞆羽口（1号住居）・鉄鎌（5号住居）・鉤（7号住居）などが出土しており、鍛冶集団との関連が指摘される。丘陵部では、5世紀～6世紀の竪穴住居105棟が検出され、陶質土器・古式須恵器なども含む。5世紀～6世紀中ごろまでの、この地域の最大拠点集落である。鍛冶工房は、5世紀中～後葉の野坂一町間遺跡、6世紀後半の武丸高田遺跡などが調査されており、原野や治水開発に伴う工房と見做される（宗像市教育委員会, 2000）。

### 5-1-2.海浜部の遺跡

**勝浦遺跡群** 桂瀨の北東部にあたり、海岸沿いの集落（勝浦坂口・井ノ口遺跡）と丘陵上の集落（勝浦穴田・勝浦堂ノ裏遺跡）に大きく立地している。概ね、弥生時代後期～古墳時代前期を中心とする集落が丘陵上、古墳時代中期～後



期を主体とする集落が海岸沿いにあり、大きく移動する傾向が認められる（津屋崎町教育委員会, 2000）。

**勝浦坂口遺跡**は、 竪穴住居15棟が検出される。時期は弥生後期～布留2式併行期と考えられている。弥生後期の竪穴住居は円形を呈し、庄内併行期以降は方形プランをなす。方形プランのものは、ベット状遺構や貯蔵穴を持つものが認められる。2～3棟を単位とした小群が連続して営まれたとみる。

**勝浦井ノ口遺跡**は、竪穴住居13棟が検出される。時期は布留2式併行期～須恵器出現期まで、数棟が重複するが外は間隔をおいて建てられる。大きく等高線に沿って2～3群の単位群から構成される。このうち2棟から、椀形の鍛冶滓が出土する。

**勝浦穴田（A区）**では、竪穴住居2棟・掘立柱建物1棟・谷が検出される。竪穴住居は、6世紀後半であるが、谷からは5世紀中～6世紀後半の土器類が出土しており、先行する集落が周辺に存在とみられる。

**勝浦堂ノ裏遺跡（A区）**では、竪穴住居62棟・掘立柱建物2棟・古墳1基が検出される。建物群は、5世紀中～5世紀末のⅠ期、6世紀初め～6世紀末のⅡ期に区分される。Ⅰ期は、南側に竪穴住居10棟が分布する。Ⅱ期は、重複して竪穴住居10棟が配置され、東側に掘立柱建物3棟がみられる。時期不明の竪穴住居も切り合い関係から、Ⅰ期～Ⅱ期に連続して、ほぼ同位置に建て直されたものとみる。6世紀中ごろの古墳は、竪穴住居から20mに隣接して立地している。（B区）には、8世紀の掘立柱建物2棟が確認され、周辺に連続して集落が営まれる。

**勝浦堂ノ裏遺跡（C区）**では、竪穴住居8棟・古墳1基が検出される。6世紀中～7世紀中頃の竪穴住居と同時期の古墳が、確認される。

**勝浦高堀遺跡**では、竪穴住居4棟が検出される。このうち2棟は、勝浦井ノ浦古墳の墳丘下であり、5世紀末以前のもので、造り付け竈が確認される。

**練原遺跡群** 遺跡群は、桂潟の中央部にあり海岸沿いに広がる小平野に、集落が確認されている。古墳時代中期～後期にかけてのものが多く（津屋崎町教育委員会, 1999）。

**練原（練原地区）**では、竪穴住居24棟・掘立柱建物22棟が検出される。建物群は、5世紀中～5世紀末のⅠ期、6世紀初め～6世紀末のⅡ期に区分される。Ⅰ期は、南側に竪穴住居8棟、掘立柱建物2棟が分布する。5世紀中頃の竪穴住居に造り付け竈を配置するものがある。Ⅱ期は、南側に継続して竪穴住居が配置され、東側に総柱建物6棟と掘立柱建物3棟がみられる。大型掘立柱建物を中核とした小型倉庫が配列され、竪穴住居の減少があげられる。5世紀後半～6世紀中頃までの時期と考えられる。

**練原（ヒエダ地区）**では、竪穴住居10棟・掘立柱建物が検出される。竪穴住居は、2群に分けられ、5世紀末～6世紀前半を中心に形成される。

**練原（大具地区）**では、竪穴住居4棟・掘立柱建物2棟が検出される。掘立柱建物は、堀方が0.6～0.8mで、SB-1は2間（5.6m）×7間（18.8m）、SB-2は2間（5.05m）×7間（18.9m）となり、極めて大きい。SB-2は、南側が総柱構造となる。6世紀中頃と考えられている。

**練原（中村地区）**では、竪穴住居5棟・掘立柱建物1棟が検出される。時期は6世紀代のもので、竪穴住居に伴って、2間×4間の掘立柱建物が配置される。

**練原（長浦地区）**では、竪穴住居14棟・掘立柱建物2棟が検出される。5世紀後半～6世紀後半までの時期と考えられる。竪穴住居には、総柱構造の掘立柱建物が伴う。

**奴山遺跡群** 遺跡群は、桂潟の中央部にあり海岸をやや奥まった丘陵上にて、集落が確認されている。弥生時代の遺物も出土しており、前身集落の存在が窺えるが、小規模と見られる。奴山伏原遺跡は、古墳群の北側に立地しており、同時期のものが知られる。

**奴山番田遺跡**は、奴山平野の奥部で、6世紀後半の竪穴住居8棟・掘立柱建物3棟が調査される。

**奴山大門遺跡**は、6世紀前半～末にかけての竪穴住居10棟が緩斜面に営まれる。造り付け竈に支脚とするものがある。溝から7世紀後半の遺物が出土する。

**奴山伏原遺跡**は、古墳群の北側に広がり、発掘調査によって竪穴住居70棟・区画溝等が検出されている。時期は5世紀～6世紀後半までで、6世紀代が中心時期となる。遺物は、石錘・紡垂車・移動式竈・朝鮮系軟質土器・ミニチュア土器・陶質土器などが出土する。なお、6世紀に火災住居が多いことが指摘される。

**生家釘ヶ浦遺跡** 遺跡は、桂潟の中央部新原の南側、海岸をやや奥まった丘陵緩斜面にて、集落が確認されている。弥生時代後期～古墳時代早期の遺物も出土しており、前身集落の存在が窺える。集落は、弥生時代後期末から庄内式併行期の流路、竪穴住居3棟が確認される。古墳時代の建物群は、5世紀後半～6世紀末にかけて連続して営まれる。竪穴の単位群は、3～4群があり、数棟が建替えを行い、小群をなす。移動式竈や百済系の韓式系土器が出土する。

**在自遺跡群** 桂潟の南東部にあたり海岸から離れた、奥まった丘陵緩斜面にて、集落が確認されている（津屋崎町教育委員会, 1995・1996）。

**在自下ノ畑遺跡** 竪穴住居84棟・掘立柱建物20棟が検出される。集落は、庄内式（新）併行期～布留2式併行期のもの（Ⅰ期）、須恵器出現期～陶邑TK47型式までの（Ⅱ期）、陶邑MT15型式～TK217型式までの（Ⅲ期）、7世紀後半～8世

紀のもの（IV期）に大別できる。時期の直接確定できるものは、40棟前後であるが、切り合い関係で概ね時期を窺うことが出来るものも多い。造り付け竈をもつものが、26棟が確認できる。これらは、須恵器出現以降のものと考えられる。集落の群は、削平が著しい部分もあるが、竪穴住居の時期・重複・占地により、A群～E群の5ブロックに区分される。I期では、A群・C群から竪穴住居が現れ、つづいてB群・D群に営まれる。II期には、E群が加わり、各群で複数の建物小群が認められる。III期は、竪穴住居に確実な掘立柱建物が加わる。IV期には、7世紀後半に竪穴住居が一部残存するが、小型掘立柱建物の配列は明らかでない。8世紀には区画溝と掘立柱建物が確認できる。重複した竪穴住居が多く、占地にからII期からIII期に集落が拡大していることが窺える。大型掘立柱建物の配置、竪穴住居の連続的な重複から、B群・C群が中核部分でなかろうか。B群の大型掘立柱建物は、III期のものであれば注目される。C群のSC-55は、一辺6.4×5.8mと最も大きく、L字型の竈を設置する。

**在自上ノ畑遺跡**では、A・B地区で5世紀後半～7世紀後半の竪穴住居8棟・掘立柱建物5棟が検出される。出土遺物に鳥足文の土器が出土している。

**在自小田遺跡**では、竪穴住居1棟、大型掘立柱建物1棟、祭祀土壇1基が検出される。大型掘立柱建物は、桁行5間（10m）×梁行5間（9m）で、柱掘方0.7～1.05mで韓式系土器が出土し、5世紀前半に比定される。出土遺物に鳥足文・縄蓆文の土器が出土している。

**宮地大ヒタイ遺跡** 福間海岸の砂丘上に位置する遺跡で、前期の方形住居8棟が検出される。畿内系の手あぶり形土器が出土する。

**手光於緑遺跡** 手光の平野部にあたり、溝が検出され古墳時代前期の畿内系土器群が出土する。

**神湊浜宮貝塚** 神湊の砂丘上に形成された貝塚である。遺跡は東西200m×南北80mの広大なものであり、古墳時代の貝塚としては、玄界灘沿岸で最大級のものであろう。混貝土層には須恵器の小田編年II・III型式が検出されており、6世紀～7世紀前半に比定される。自然遺物は魚骨（サメ・マダイ類・フグ・クロダイ・スズキ・カツオ・エイ）・貝類（サザエ・アワビ）は岩礁性のものが多く、潜水漁法の存在が予想される。これらに伴って鉄製ヤス・釣針・刀子・骨鏃・鹿角刀装片・土錘が出土している。同様に、小規模であるが新波止貝塚が知られる。また、渡半島の渡蛭子元遺跡では、6世紀後半～7世紀前半の土器・土錘が出土しており、海民的性格を有する（筑紫野史学研究会編, 1971）。

西郷川水系では、香葉遺跡・津丸高平遺跡で5世紀代の遺物が出土する程度で調査例が、少ない。

### 5-1-3.集落の性格と特質

**海浜集落の消長** 海浜集落は、背後の小平野・谷水田などの農耕生産の生業を考えることができるが、海岸の漁労も想定される。平野の規模からみて生産性の高い、地域とは考えにくい。古墳群との関連で考えると、造墓の開始される古墳時代中期～飛鳥時代を中心と、ほぼその盛期が一致している点が注目される。集落成立と退潮から、集落間に盛衰が認められる。

海浜集落は、背後の小平野・谷水田などの農耕生産の生業を考えることができるが、海岸の漁労も想定される。平野の規模からみて生産性の高い地域とは考えにくい。古墳群との関連で考えると、造墓の開始される古墳時代中期～飛鳥時代を中心と、ほぼその盛期が一致している点が注目される。

集落成立と衰退から、集落間に盛衰が認められる。特に、圃場整備に伴う調査成果から、その全貌を全て示しているとは云いきれないが、大きく画期を求めることができる。

前期の集落（庄内～布留新）は、勝浦井ノ口・勝浦坂口遺跡、生家釘ヶ浦・在自下ノ畑遺跡などの遺跡があり、弥生時代後期末から出現するものが、前期からの二種が知られる。いずれも、数棟の単位群から構成され、小規模なものが多い。

中期の集落（TG232～TK23）は、勝浦・練原・奴山・在自遺跡群の多くの遺跡が、この時期に竪穴住居の集落や遺物が出土する。最も特徴的なのは、造り付け竈持つ住居が出現する点である。渡来系の陶質土器・朝鮮系軟質土器などが出土する。

後期の集落（TK47～TK209）は、前代の拠点集落の周辺に位置する集落が多い。この時期の竪穴住居は、奴山伏原遺跡のように広域に広がるものもあり、地域の最盛期と考えられる。そして、多くの住居に竈が普及するようになる。

飛鳥時代の集落（TK217～MT21）は、中期から継続するもので、6世紀から成立した集落に多くが確認できる。小型の柱掘方の建物時期は、確認できるものが少ないが、多く存在している可能性がある。8世紀以降期の集落は、掘立柱建物で構成される一群で、勝浦裏ノ田B・在自下ノ畑遺跡等で、古墳時代の集落と重複する場合が多い。大型の柱掘方の建物が確認しやすいが、小型の柱掘方の建物は時期を確認できるものが少ない。

注目されるのは、弥生時代後期～古墳時代前期の集落が、丘陵上に立地する場合が多く、海岸から離れた立地となっている。古墳中期になると、海岸に近い平野部や海浜に集落が営まれる場合が増加する。その中には、神湊浜宮貝塚を伴うものがあり、漁労を中心とした拠点集落の形成が開始される。そして、陶質土

器・朝鮮系軟質土器などが散見され、朝鮮半島との交易や渡来人の存在を予想せしめる。竪穴住居は、在自下ノ畑遺跡のSB-55号などで造り付け竈の出現が知られる。後期には、これらの集落群が盛行し、竪穴住居・掘立柱建物が多く出現する。さらに、玄界灘式製塩土器が、小量ながら確認できる。特に、練原大具地区での2間×7間の南北棟が縦列して検出されており、一部総柱構造から倉庫と考えられる。時期は、6世紀中頃以降と推定されており、海上交通に伴う物資収納施設と推察される。在自下ノ畑遺跡でも、大型掘立柱建物が検出され、倉庫と考えられる。7世紀後半～8世紀にかけて、掘立柱建物が集中的に普及し、増加が認められるが、配列が確認されるものはすくないが、柱掘方の大きいものは時期が明確である（花田, 1991）。

**集落の類型** 集落の基本的な特性を明らかにし、類型化することは容易でないか、地域圏の分業的役割を考える上で必要な作業仮説である。集落の実態に併せて検討する。

海浜集落は、その様相により、A類・B類の2群に大きく区別される。A類は、海岸に立地し、貝塚を形成しない集落で、5世紀～6世紀代に盛行する。漁具は土錘が出土する程度で、顕著なものは認められない。B類は、海に接し貝塚を形成するもので、浜宮・新波止・中津宮境内貝塚などがあげられる。鉄製品、鹿角・骨製品の漁具、製塩土器などが出土する。大型のアワビ・サザエなどから潜水漁法を主とする。さらに、外洋性の魚類も確認でき、船による漁法も想定される。

農耕集落は水稻を基盤とするもので、釣川水系・西郷川水系の平野部に一般的であるが、谷水田に依拠するものも含まれる。赤間地域の吉留京田・冨地原神崎屋・冨地原川原田・武丸小伏遺跡などが知られる。東郷・南郷地域は、田熊石畑・久原瀧ヶ下・大井三倉・池浦高田・朝町町ノ坪遺跡などが上げられる。一般的な農耕集落である。

**竪穴住居の構造** 竪穴住居は、前期に長方形プランで2本支柱穴構造と方形プランの4本支柱穴構造のもの二者がある。前者は、冨地原梅木SB-1・10、久原龍ヶ下7号住居などがある。後者は、梅木SB-13住居などがあげられる。共にベット状遺構を有しているものが認められる。中期は方形プランの4本支柱穴構造が主流となり、野坂一町間遺跡SB-3・SB-5・9などがあげられる。ほとんどのものに壁溝が認められる。一部、長方形プランのものも残るが、この前後でなくなるようである。造り付けカマドは、在自下ノ原遺跡SC-23号住居に初源的なものが認められ、この集落に類例が多いようだ。後期には、方形プランの4本支柱穴構造が主流となっている。造り付けカマドも、朝町町ノ坪・武丸小伏遺跡などからみると、普及は一般的に6世紀後半以降とみられる。6世紀中葉には、武丸高田遺跡に2

間×2間の総柱の倉庫が認められる。集落としては、吉留下惣原遺跡のように6世紀後半～7世紀初頭に営まれるものがあり注目される。この集落に類例が多いようだ。後期には、方形プランで4本支柱穴構造が主流となっている。造り付けカマドも、朝町町ノ坪・武丸小伏遺跡・在自遺跡群などからみると、普及は一般的に6世紀後半以降とみられる。6世紀中葉には、武丸高田遺跡に2間×2間の総柱の倉庫が認められる集落としては、釣川上流の吉留京田遺跡、富地原遺跡群、中流の久原瀧ヶ下遺跡などは、集落の継続性が著しく、この地域圏の拠点集落と見做される。玄界灘海浜部では、在自下ノ原遺跡・練原遺跡群は規模が大きく、拠点集落とみられる（花田, 1991）。

## 5-2.前方後円墳の造墓

### 5-2-1.立地と分布と造墓時期と古墳

推定海岸線をもとに前方後円墳の分布を記入すると、津屋崎の古墳群が玄界灘に面して造墓されていることが分かる。一方、内陸部においても、東郷高塚・スベットウ・久原・クヒノ浦・相原E-1号墳などの前方後円墳も海岸線あるいは、後背湿地を視下に見下ろす丘陵上に位置する。つまり、前方後円墳の多くが玄界灘あるいは入海を意識して造墓がなされている。宗像地域は、前方後円墳が現在のところ40基が確認されている。これらは4世紀後半～6世紀末にかけて造墓が行われており、大別して3期に区分される。主な古墳を以下に説明する。なお、旧津屋崎町の国指定史跡津屋崎古墳群に詳しい（津屋崎町教育委員会, 2004）。

**造墓Ⅰ期**…宗像平野の内陸部に東郷高塚古墳が造墓なされる。古墳は釣川中流域を一望する標高30mの丘陵先端に立地する。古墳時代の3世紀末～4世紀中葉を前半、4世紀後半～5世紀初頭を後半とする。後半は、東郷高塚古墳の造墓以降で、概ね須恵器の出現までとする（花田, 1999）。

**徳重本村2号墳** 釣川の上流の徳重丘陵に位置する全長18.8mの前方後円墳である。主体部は、長さ2.5m×2.2m、深さ0.3mの木棺土壙墓で、有袋鉄斧が出土する。出土土器から、布留式の古段階に比定される（宗像市教育委員会, 2002）。

**東郷高塚古墳** 古墳は墳丘長64.4m、後円部径39mで高さ3mの盛土を行い、前方部を玄界灘に向けている。周囲には馬蹄形の外堤が後円部側に認められる。内部主体は、古墳主軸に平行する粘土槨で、割竹形木棺を納める。棺の構造は、掘方の小口板を挟む方法の木棺で内法が長さ52m×幅0.5mを測る長大なものである。副葬品は、勾玉4・管玉4・鉄刀・鉄鉾1などが出土している。また、土師器の壺が墳丘に供献されていたようである。造墓時期は、4世紀末を中心とする年代が与えられている（宗像市教育委員会, 1989）。

田久瓜ヶ坂1号墳 釣川を見下ろす田久に位置する全長32mの前方後円墳である。4つの内部主体があり、割竹形木棺2・円筒棺・土器棺を埋葬主体とする。鉄器の鉄斧2・鉄鍬先1などが検出される。円筒棺は、畿内周辺・吉備などに分布の中心があり、4世紀後半の造墓と考えられている（宗像市教育委員会, 1999）。

徳重本村2号墳は、宗像に前方後円墳が成立する最古の古墳にあたり、古墳時代前期初頭に小規模であるが、導入された意義は大きい。次ぎに、布留式の中段階に全長30.8mの田久瓜ヶ坂1号墳が造墓され、4世紀中～後半に続く。このように、この時期の古墳に共通する特徴がある。①、20m前後の小規模なもので、中心主体が複数ある。②、古墳の周辺に埋葬施設が多数あり、特定首長層の血縁集団とみられる。先行する庄内式期の土器交流からみて、玄海灘の交易に伴うものと見なしたい。この時期は、各地勢圏の一つを単位とするものであろう。全長62mの東郷高塚古墳とは、明らかに規模・埋葬法が異なり、4世紀後半の大型の定型化した葬法の導入と捉えられる。東郷高塚古墳の成立は、釣川地勢圏の3世紀末～4世紀中葉までに、地域統合が進み盟主首長となったとみる（花田, 1999）。

**前期の円墳** 上高宮古墳は、直径23mの円墳であり、箱式石棺を主体部とする。鏡・短甲・鉄鍬などが出土する（島田, 1939・田中, 1938）。同時期の大型円墳に大井平野1号墳は、直径23mの円墳で、箱式石棺・割竹形木棺などが、同一墳丘に営まれている。

大井池ノ谷古墳群は、直径10～15mの古墳4基からなる。主体部は、箱式石棺・割竹形木簡・石蓋土壙・竪穴式石室の主体部を複数が共有される。3号墳で獣形鏡・竪櫛・ガラス玉などが出土する。

下平井では、15～20mの3基の円墳が確認され、箱式石棺・割竹形木棺が主体部となる。1号墳では、鏡・竪櫛・鉄鍬などが出土する。

久戸6号墳では、17.5mの円墳で、箱式石棺の主体部に三角板革綴短甲などが、出土する（酒井, 1979）。井手ノ上古墳は、直径26mの円墳で、箱式石棺から三角板革綴短甲・鏡が出土している（津屋崎町教育委員会, 1991）。これら以外に、朝町妙見古墳・鏡を出土した福間割畑1号墳などがある。

**造墓Ⅱ期**…玄界灘に面した津屋崎町に8基が集中し、視下には津屋崎入海が広がっている。造墓時期は、5世紀前葉～6世紀中葉にかけて前方後円墳が継続して営墓される。

**新原奴山22号墳** 新原丘陵の中央部に位置する前方後円墳とされ、墳丘長75～80mと推定される。後円部径は54m、高さ7.8mで2段築成となっている。後円部墳頂に縫殿宮跡が存在し、周囲に幅8mで周壕が廻る。前方部は開墾によって大半が削平されている。墳丘からは、朝顔形、円筒埴輪が多量に出土している。内部

主体は未調査のため不明である。また、くびれ部南側に15mの奴山21号墳があり、この古墳を避けて22号墳が造墓されている。造墓時期は、陶器TK73型式併行期と考えられる。

**勝浦峯ノ畑古墳** 玄界灘を望む勝浦の小丘陵上に立地し、前方部を海に向ける前方後円墳である。墳丘は削平が著しいが全長97mに復元される。古墳の規模としては宗像地域で最大のものである。内部主体は後円部南西に開口する単室の横穴式石室である。石室は長さ4.3m、幅2.5m、玄門部で2.25mのいわゆる羽子板状の平面プランを呈する。壁面は垂直2.18mほど積み上げ、天井石に柱を架構している。羨道は、長さ3.25mで石材を平積みしている。特に玄室内には2本の石柱があり、空間を3ブロックに区分し、仕切り石で屍床を作っている。また、石室内には赤色顔料が塗付されていた。副葬品は、鏡（画文帯神獸鏡1・内行花文鏡1・珠文鏡7面）・武器（鹿角製装具付大刀40以上・鹿角装具付剣4・素環頭大刀または剣1・銀製鞘尻金具1・鉄鏃300本以上）・武具（短甲）・工具（鹿角製装具付刀子6・刀子22・装身具・銅剣1・ガラス連玉6・ガラス玉10,565・琥珀棗玉92・勾玉8・碧玉・管玉4・硬玉・勾玉1・ガラス管玉1）須恵器などが多量に出土している。造墓時期は5世紀後葉前後と考えられている（石山, 1977）。

**勝浦井ノ浦古墳** 峯ノ畑古墳東側の90mに位置し、前方部を南西に向ける3段築成の前方後円墳である。古墳は墳丘長70m、後円部径37m、前方部幅37mである。内部主体は前方部の主軸に直交して北西方向に開口する竪穴系横口式石室である。石室は長さ42m、幅25m、横口部で0.95mを測る。石室高は1.3mで当初の高さもこの程度と考えられる。壁面には赤色顔料を塗付する。横口部は1mほどの石積みが設けられている。副葬品は、武器（鉄矛1・石突1・挂甲小札約3,000・挂甲金銅張小札51・短甲23・三尾鉄2・大刀1・鉄鏃160以上）・工具（鉄斧2）・馬具（三環鈴1・鉄地金銅張杏葉1・木心鉄板被壺鐙1対・鉄地金銅張鋌留金具22・鋌留金具10・絞具10・轡2・金銅張磯金具・鞍金具）・装身具（大葉形金具）などがある。ただし、これらのものが前方部石室から出土しており、後円部の主体部については未調査である。また、前方部墳丘下で3棟の竪穴住居が検出されており4世紀末頃とされる。造墓時期は5世紀末葉前後と考えられている（石山, 1977）。

**新原奴山1号墳** 新原の低丘陵に営まれた前方後円墳で、全長50m、後円部径29m、前方部幅31m前後と復元されている。墳丘は縦方向に削平されており、前方部高3.7m、後円部高4.6mで全て盛土となっている。内部主体は、後円部に南西に開口する単室の横穴式石室である。石室は全長6.5m、玄室内法長3.3m×幅2mで玄門部1.65mとなり、羽子板状の平面プランを呈す。高さは15mで平天井であ



り赤色顔料が塗付されている。玄室は仕切り石で屍床が設けられ、玄門部に2本の立柱で袖を形成している。羨道部は長さ2.9mでハ字状に開く。副葬品は石室内で装身具（ガラス小玉）・工具（手斧1）・武具（衝角付1・綴片・鋌留式短甲・小札・頸甲・肩甲）・武器（直刀・剣・短剣・鉄鏃・鹿角刀装具）・馬具（鐙）・羨道部で工具（錐・鑿・鉄錐・鋸）などが多量に出土している。造墓時期は墳丘より出土した須恵器（甕・器台・高杯）などから陶邑TK208型式に比定される（橋口, 1989）。

**新原奴山12号墳** 新原丘陵の高所に立地する全長4.3mの前方後円墳で、後円部径25m、前方部幅29.5mを測る。内部主体は未調査のため不明である。また墳丘の周囲に幅5m前後の平坦面が存在し、墳丘の形状と一致していることから周堤帯のようなものと考えられる。造墓時期は墳丘より採集された須恵器（甕）により5世紀後半の年代が与えられている（橋口, 1989）。

**新原奴山24号墳** 22号墳の北側に位置する前方後円墳で、墳丘長53.5m、後円部径28.5m、前方部幅24mを測る。古墳の周囲には幅4mの周堤があり、外側に幅6～7mの周堤が存在する。内部主体は未調査であり不明であるが、墳丘より採集された須恵器から陶邑TK216型式併行期と考えられている（橋口, 1989）。

**新原奴山30号墳** 盟主墳である22号墳東側に位置する前方後円墳である。古墳は墳丘長54m、径円部径27.5m、前方部幅34mを測る。古墳の周囲には周壕の痕跡を留める畦畔があり周壕を有するものと考えられる。墳丘は全て盛土で後円部高さ8m、前方部高4mを測る。内部主体は不明であるが、墳丘より須恵器が採集されており、陶邑TK216型式併行期前後と考えられている（橋口, 1989）。

**生家大塚古墳** 新原奴山古墳群の南側500mの生家丘陵上に位置する前方後円墳である。前方部は鞍部を除いて昭和44年頃に削平されている。後円部径35m前後からすると、推定墳丘長は73mであろうと思われる。後円部は2段築成である。内部主体は未調査のため不明であるが5世紀代のものと考えられる（津屋崎町教育委員会, 1996）。

**造墓Ⅲ期**…前方後円墳は、津屋崎の須多田丘陵に5基と宗像内陸部に7基、玄海に9基、福岡に1基の計19基が確認できる。造墓時期は、須多田丘陵が6世紀代、内陸部が6世紀中～末のものが多。

**須多田天降神社古墳** 須多田丘陵の中央部に位置し、前方部を西へ向ける墳丘長80mの前方後円墳である。古墳は、御神体となっており、保存状況が良好であり、2段築成の墳丘が明瞭に認められる。後円部は径35～40m、前方部幅30mで、周囲27.5～8mの周壕が全周する。その外側には、幅2～3mの周堤が認められる。内部主体は未調査であるが墳丘から円筒埴輪・須恵器が採集されており、6世

紀中葉の造墓と考えられる（津屋崎町教育委員会, 1996）。

**須多田上ノ口古墳** 天降神社古墳の東側に位置する前方後円墳で全長43mを測る。後円部径は18～20m前方部幅22mを測り、保存状態が良好である。墳丘は全て盛土で、前方部高4.5mを測る。造墓時期等は不明である（津屋崎町教育委員会, 1996）。

**須多田ミソ塚古墳** 須多田丘陵の南辺に位置し、前方部を南西に向ける墳丘長60mの前方後円墳である。墳丘は削平によって著しく改変している。後円部は径20m前後、前方部幅15～20mに復元できる。造墓時期は6世紀後半に比定される。

**須多田下ノ口古墳** 須多田丘陵の南辺に位置し、前方部を南西に向ける墳丘長83mの前方後円墳である。墳丘は後円部を残し削平され、著しく改変している。後円部南には、かつて横穴式石室が露出していたという。前方部は、発掘調査によって、周濠が検出されている。2重周濠とすると、類例が少なく注目される。前方部周濠からは、須恵器が出土しており、6世紀末の造墓と考えられている（津屋崎町教育委員会, 1996）。

**在自剣塚古墳** 在自丘陵上奥部に立地し、前方部を南西に向ける2段築成の前方後円墳である。古墳は近年の測量調査で、墳丘長102m、後円部52.5m、前方部幅63m前後を測り、後円部背後の丘陵を切断して造られる。墳丘は、現在みかん園となっており削平が著しい。江戸時代の記録によると、内部主体は横穴式石室であり、造墓時期が6世紀末前後と考えられる。宗像最大の前方後円墳である（津屋崎町教育委員会, 2004）。

**相原E-1号墳** 宗像平野中流域の相原丘陵、北東へ伸びる小尾根の先端に築造される。墳丘は、残存長62mを計測し、後円部直径28～30m、高さ9mである。前方部幅は残存16mであり、推定23mで高さ2mを測る。推定復元全長は、70m前後と考えられる。宗像内陸部で最大級であり、主体部の複室横穴式石室も最大のものである。横穴式石室は、後円部中央より、主軸に直角に西側へ開口している。墳丘は、前方部を地山整形で削り出し6mの盛土を行っているが、後円部は高さ10mほど盛土を行っている。石室は羨道部を失っているが、複室の横穴式石室であり、南西方向に開口する。石室の全長は8.74mであり、玄室は長さ3.75m×幅2.3mの縦長のプランを呈す。奥壁より、1.27mの位置に4石からなる仕切り石があり、屍床を設けている。床面は、仕切り石前面より20cm低くなっている。前室は、玄室に比べて小振りの腰石が両側に配置され2.8mの高さで天井石となる。出土品は、鉄製品（挂甲・刀子・鉄刀・鉄鏃・馬具）・金銅製品・玉類・鉄滓・土器などがある。造墓は、少量の須恵器が6世紀後葉のものであり、複室構造の石

室からも、ほぼ一致するものと考えられる。特に挂甲をはじめとした鉄製品・馬具・金銅製品・鉄滓の出土があり、首長墓と考えられる（花田, 1991）。

**城ヶ谷3号墳** 城山西麓の丘陵上に位置し、61基からなる城ヶ谷古墳群の中央部に位置する。3号墳は、全長22mで、前方部と後円部の一部に区画溝が残存している。主体部は2つあり後円部の大石室は、長さ3.5m×幅2.3mで長方形プランを呈し、框石を設け、墓道となる。竪穴系横口式石室である。前方部の石室は、長さ1m×幅0.6mの竪穴系横口式の小石室である。石室は、共に同時期とされており、大石室に追葬が行われているのに対し、小石室は、単葬と考えられる。出土遺物は、大石室から、耳環に鉄鏃、留金具・刀子・須恵器・土師器が副葬されていた。小石室からは、土製丸玉・土師器が出土している。造墓時期は、6世紀中葉とされる（波多野, 1977）。

**名残高田25号墳** 釣川上流部の名残の北へ伸びる丘陵上に60基前後からなる名残高田古墳群が立地する。古墳は、全長30mの前方後円墳で丘陵頂部に立地している。内部主体は、玄室長3.5m×幅1.6mの横穴式石室と考えられる。出土遺物は、鉄鏃・鏢・刀子・須恵器が出土する。造墓時期は、6世紀後半に比定される。

**徳重高田16号墳** 16基からなる古墳群で、そのうち1基が前方後円墳である。削平のため全長が明らかでないが全長22.5m前後と考えられている。主体部は、単室の横穴式石室で、6世紀後半の造墓と考えられる。また、人形土製品が出土している。

**スベットウ古墳** 東郷田熊の小丘陵北端に位置する前方後円墳で、全長35～40mと考えられる。主体部は、竪穴系横口式石室で、長さ3.8m×幅2m、高さ3.8mのやや胴張りの長方形プランを呈する。玄門部には框があり、墓道が上方へ上がっている。出土遺物は、挂甲・鉄鏃・刀子・帯金具・金銅製品・ガラス製小玉719個・瑪瑙の切子玉・須恵器片が出土している。造墓時期は石室の形態より、6世紀前半に比定される（波多野, 1967）。

**久原澤田II-3号墳** 久原丘陵の中央に位置し、前・中期の円墳を含む52基からなる大古墳群である。II-3号墳は、全長45mで、後円部径26m、前方部幅20mを測る。墳丘の周囲には、丘陵部側に周壕・周堤が確認されている。また、墳丘上に円筒埴輪・家形埴輪・人物埴輪が出土している。主体部は、全長5.5mの単室の横穴式石室で西側のくびれ部に向かって、墓道が開口している。出土遺物は、鉄鏃・刀子・鉄斧・鉈・馬具（辻金具・馬鈴）・須恵器（器台）が出土している。時期は、6世紀中葉の造墓とされる。また、宗像内陸部で唯一の埴輪を有する古墳である（宗像市教育委員会, 1988）。

**須恵クヒノ浦古墳** 須恵丘陵の南端に位置する全長37mの前方後円墳で独立し

て1基ある。内部主体は、全長6.8mで玄室長3.8m×2.1m高さ3mを測る比較的大型の石室である。石室は、四周がせり出し合掌形を呈し、赤色顔料が塗付されている。床面は、敷石がなされ、石障と呼ばれる石列が認められる。横穴式石室は単室であるが、羨道部の石組みから、複室構造への移行期のものと考えられている。出土遺物は、鉄刀・鉄鏃・刀子・鋸・玉類が出土している。造墓時期は、6世紀後葉と考えられている。

**瀬戸1号墳** 前方部を北へ向けた墳丘長25mの前方後円墳である。後円部は、径14m、前方部幅10mで、砂丘上に厚さ2~3mの褐色砂質土を盛土としている。内部主体は、主軸に直交する竪穴系横口式石室が検出されている。副葬品は、馬具・須恵器（器台・蓋）などが出土している。造墓時期は、須恵器より6世紀初頭と考えられている。

**瀬戸4号墳** 2号墳の南側へ30mの同丘陵上に立地し、東西方向に主軸を有する前方後円墳である。墳丘は全長38m、後円部径25m、前方部幅19mを測る。内部主体は、単室の横穴式石室で、玄室長4.33×幅2.3mを測る。発掘調査の結果、胡籙・鉄鏃・挂甲・小札・管玉・馬具（剣菱形杏葉・雲珠）などが出土した（宗像市教育委員会, 2007）。

**上林2号墳** 鐘崎に近い田野丘陵に立地する全長32mの前方後円墳である。後円部と前方部は主軸方向に幅6mを残し、両側が削平されている。後円部径は1.8m前後であり、その中央に南に開口する横穴式石室が存在する。石室は、奥壁の一部が露出し、小振りの石材を小口状に積んでいる。また、墳丘は、幅10mの赤褐色と灰色土を交互に盛土を行っている。造墓時期は、6世紀代と考えられる。

**桜京2号墳** 約100基からなる牟田尻古墳群に所在する宗像唯一の装飾古墳である。前方部を西へ向ける墳丘長41mの前方後円墳である。古墳は尾根鞍部に立地し、主軸に直交し、北側に複室の横穴式石室が開口している。玄室は、幅1.8m×長さ3.5mで奥壁に石棚が設けられ、両側に立柱が認められる。前室は、幅1.3m×長さ2mで、幅6m×幅0.6mの羨道となる。特に玄室の石棚下の奥壁、立柱に装飾が認められる。奥壁は、大型の石材を上下に2段、縦2~7段に線刻に分割し、その中に赤・緑の連続三角文を配している。2本の立柱にも正面と石室形内側に、線刻にて分割線を残し、後に連続三角文を施している。造墓時期は、6世紀後半と考えられる（宗像市教育委員会, 2005）。

**牟田尻スイラA-4号墳** 牟田尻古墳群（池田支群）の丘陵頂部に立地する全長33mの前方後円墳である。後円部は、陥没しており、横穴式石室が内部主体と考えられる。造墓時期は、6世紀中頃のものであろう。

**牟田尻片峰E-7号墳** 牟田尻古墳群の丘陵頂部に立地する全長20mの前方後円

墳である。南へ開口する玄室長2.1m×幅1.8mの横穴式石室である。出土須恵器により、6世紀の造墓とされる。

**牟田尻母倉1号墳** 牟田尻古墳群の丘陵頂部に立地する全長35mの前方後円墳である。

**牟田尻母倉9号墳** 牟田尻古墳群の丘陵頂部に立地する全長30mの前方後円墳である。

牟田尻古墳群は、前方後円墳4基を含む大型群集墳であり、神湊浜宮貝塚などの海人集団の擬制的同族集団の墓地であろう。多くの前方後円墳は、6世紀～7世紀前半までに収まる年代と推察される。

**神湊上野1号墳** 神湊の独立丘陵上に立地する前方後円墳で、墳丘長40m前後と考えられている。内部主体は、横穴式石室が森貞次郎氏により発掘調査され、6世紀代のものと考えられている。詳細は、未報告のため不明。

**手光大人4号墳** 福津市の小平野北側の手光丘陵に立地する。墳丘長40～45mの前方後円墳である。墳丘は、中世の亀山城の一部として利用されている。内部主体は、玄室長3.3m×幅2.2mの複室の横穴式石室で6世紀後半と考えられている。これ以外に近年の分布調査、発掘調査によって、数基の前方後円墳が確認される。

Ⅲ期のものは、宗像市における前方後円墳の分布や形態から、小地区の系列を認めることができる。東郷・南郷地区は、スベットウ古墳→久原澤田Ⅱ-3号墳、河東・城山地区は城ヶ谷3号墳→須恵クヒノ浦古墳とみる。赤間・吉武地区では名残高田25号墳→徳重高田16号墳へ、それぞれ造墓系列が把握される。

田野地区では、瀬戸2号墳→瀬戸4号墳→上林2号墳、牟田尻地区では、牟田尻片峰E-7号墳、牟田尻スイラA-4号墳→桜京2号墳（装飾）の造墓系列が捉えられる。一方、須多田丘陵の4基については、年代が不明瞭であり、系列の把握は困難である。いずれにせよ、首長墓である天降神社古墳→在自下ノ口古墳・在自剣塚古墳と相原E-1号墳にみられるように、造墓の中心が、須多田系譜と宗像内陸部系譜が認められる。同様に5世紀代に津屋崎に集中していた墓域は、6世紀になると、須多田系譜の首長墓群と、内陸部を中心とした群集墳の分布圏を中核とし、造墓が一般化し終焉を迎える。

**造墓Ⅳ期**…前方後円墳の造墓停止後に墳形がほとんど円墳となる。宮地嶽古墳・手光波切不動古墳は、津屋崎の宮司・手光に位置するが、宗像内陸部では顕著なものは少ない。

**宮地嶽古墳** 墳丘は、緩斜面の尾根を切断し、地山整形を行い築造している。規模は、南北27m×東西34m前後の楕円形を呈す。墳丘上には、厚さ2mほどの昭

和9年以前の二次盛土が認められる。南側は、崩壊に伴う崖面で石檣上まで抉れる。周囲の列石は、幅1m、高さ1.4m前後のものを立て全周に廻し、北側に高く羨門石に連なり、羨道両側に石列が3段積み上げる。列石は墳丘周囲を削平し、昭和9年以前に設置され為、本来は直径35m前後の円墳と考えられる。ただ、墳丘の改変が著しいため、今後墳形とも併せて検討する必要がある。切石系横穴式石室の全長は、23.1m前後となり、宗像屈指の古墳であり、7世紀のものとしては奈良県石舞台古墳に匹敵する（池ノ上・花田, 1999）。

**手光波切不動古墳** 手光丘陵に立地する直径25m前後の円墳である。主体部は、南に開口する切石の横穴式石室である。玄室は基本的に幅1.3m×10.6mの平面形を呈し、奥壁から両側壁より狭くなっている。側壁は、切石を5石ほど用いている。天井は、2石目の広がる空間部分で段を設けて、入口部1段低くした天井とする。したがって、形態から奥壁より2石目までが玄室、入口部の3石が羨道と理解されよう。玄室は、広がる部分に高さ0.5mの仕切石があり、屍床の区画であろうか。石室は、奥壁よりに玄室が広がる特徴は、宮地嶽古墳に類似する。造墓年代は、7世紀代中頃と考えられるが、詳細は不明である（池ノ上・花田, 1999）。

これらの他に直径30mの円墳で、複室横穴式石室の田野桜3号墳がある。

### 5-2-2.新原奴山・須多田古墳群

有力首長層の特定墓域は、5世紀前葉～6世紀中葉に、勝浦・新原奴山・須多田地域の丘陵上に営まれた。これらは、単一地域でなく、3ブロックに分布しており、その理由が何に起因するか検討したい。

新原奴山古墳群は、低丘陵上に大小45基からなる古墳が縦列している。その分布は、西側の22号墳を中心25基の前方後円墳と3基の大型円墳、方墳が等間隔で立地する。小型円墳は、西側の大型古墳の背後と東側に分布している。造墓時期でその形成をみると5世紀前葉～後葉にかけて、小丘陵に22号墳を中心に奴山川あるいは、入海から遠望できる配列である。詳細な順位は、21号墳（小円墳）→22号墳・7号墳（陶邑TK73）→20号墳、24号墳（TK216）・11号墳、25号墳（TK208）→30号墳（TK47）→12号墳（5世紀後半）と考えられている。したがって、前方後円墳、大型円墳、方墳は、系列的に造墓がなされている。一方、6世紀代の小円墳群は、2～3基を単位とした群集墳であり、横穴式石室を内部主体とするものである。そのうち、2～6号墳について調査がなされており、宗像タイプと呼べる竪穴系横口式石室の流れをくむ24号墳（陶邑TK10）→3・5・6号墳（MT85～TK43）が発掘されている。その規模も6世紀前半では径1.3m前後であるのに対し、後半になると径10m前後となり、小型化が認められる。したがって、5世紀代のものと、6世紀代のものを同質あるいは同列の系譜と考えるに無理

がある。副葬品においても前者が武具・工具・馬具・武器などの鉄器副葬品が著しいが、後者は、土器・装身具を中心としたものに少量の武器（鉄刀・鉄鏃）・馬具が含まれており、格差が認められる。

群構成においても、6世紀代のものが、奴山の小平野からみると、25号墳の背後（26～29号墳）、22号墳の背後（15～19号墳）、西側の空間地、東側の山麓側と、いずれも、前代の古墳を意識した構成をなす。その中で、34号墳は、直径24mの円墳で、内部主体が横穴式石室であり、奥壁に石柵を有する構造のもので、6世紀後半と考えられる。したがって6世紀代は、前方後円墳という墳形の採用はできなかったが、34号墳が小首長級の被葬者と考えたい。一方、周囲に目を広げるなら、北側に径30mの奴山正園古墳（5世紀前葉）、南側に全長60～70mの前方後円墳である生家大塚古墳がある。前者が、奴山平野、後者が生家の入海を見下ろす立地を取っている。したがって、5世紀代が、宗像の有力首長に関連する古墳群、6世紀代が奴山平野を中心とした小首長級の古墳とその構成員の古墳群と理解できよう。この点は、須多田古墳群と様相を異にしており、首長墓系譜の性格を窺う上で重要な視点となる。

須多田古墳群は、大きく、須多田川流域の小平野北側に立地する一群（須多田上ノ口・天降神社古墳・須多田下ノ口・須多田ミソ塚古墳）、在自川北側の一群（在自剣塚古墳）、大石集落山麓の一群（大石岡ノ谷1号・2号墳）などを包括した一群を呼称する。古墳の分布域が広く、未調査のものが多く、圃場整備に伴う発掘調査・測量によって、首長墓の年代が判明する。4世紀後半に須多田宮ノ下古墳（円墳）が知られる。5世紀代は、須多田ニタ塚古墳（5世紀後半）が入海に最も近い位置に立地する。径36mの大型円墳である。内部主体は、古式の横穴式石室で、新原奴山1号、勝浦峯ノ畑古墳が類似することから、5世紀末葉の年代が考えられる。いずれにしろ、この2基が該当するものであろう。6世紀代は、須多田丘陵中央部に全長80mの天降神社古墳が造墓される。周壕を有し墳丘に埴輪、葺石を配するもので、6世紀中葉と考えられる。これに続く須多田下ノ口古墳と在自剣塚古墳も、6世紀末に並存すると考えられる。このように、6世紀後半においても盟主首長墓の造墓がなされる。また、須多田ミソ塚、上ノ口古墳も6世紀後半代に比定されよう。一方、対馬見山山麓部には、横穴式石室を内部主体とした群集墳が造墓されるが、その数は決して多くない。

このように5世紀末葉の須多田ニタ塚古墳の大型円墳の造墓に始まり、須多田天降神社古墳を中心とする6世紀中頃の一群、そして後半～末の須多田下ノ口古墳と在自剣塚古墳の盟主首長墓、山麓の群集墳という流れを読み取ることができる。

したがって、大型円墳、前方後円墳が集中する5世紀末～6世紀末と、群集墳が

造墓される6世紀後半～7世紀代のものは区分して理解できよう。これらのことは、新原奴山古墳群にも同様の現象が認められる。これらの群以外に、勝浦峯ノ畑古墳・勝浦井ノ浦古墳・勝浦高原11号墳が首長墓と見なされる。ただし、3基が勝浦地域に立地しており、他は、山麓の群集墳があるにすぎない。したがって、奴山・須多田古墳群のあり方とはやや異なる。

以上のことから、勝浦・新原奴山・須多田古墳群の成立、展開を理解するならば、津屋崎入海の中央部にまず新原奴山22号墳が造墓され、続いて24号→1号→30号→12号墳の順で前方後円墳と大型円墳の造墓がなされる。5世紀後葉～末に勝浦峯ノ畑古墳・勝浦井ノ浦古墳→勝浦高原11号墳の3基が続いて造墓が行われる。須多田古墳群では、現在のところ、須多田ニ夕塚古墳（円墳）のみであり、前方後円墳の造墓は須多田天降神社古墳→須多田下ノ口古墳・在自剣塚古墳のように6世紀中～6世紀後半代まで認められない。

したがって、盟主首長墓は勝浦地域が、5世紀後葉～6世紀前半に3基のみで造墓が終了、新原奴山古墳群では5世紀前～末葉までの長期造墓が行われ、須多田古墳群では6世紀前葉から7基の造墓が開始され、6世紀が中心造墓時期となっている（池ノ上, 1998）。

古墳群の分布から、津屋崎入海の中央部で、まず前方後円墳の造墓が開始され、新原奴山、勝浦そして、須多田古墳群のように入港を意識した造墓となっている。特に墓域の計画においても、勝浦が首長墓と同族墓、新原奴山が首長墓と有力小首長を含む同族墓で、東西400m×南北100mの墓域内に造墓がなされる。一方、須多田の場合、前方後円墳、あるいは大型円墳も散在的な分布を示しており、広域で規則性が非常にとぼしい。しかし、7世紀前半には宮地嶽山麓に首長墓を含む造墓IV期は、北九州全体に前方後円墳の墳形が消滅し、宮司・手光地域に墓域が再び設定され、8世紀代まで氏墓として営まれている。全てが円墳の葬法となる。

### 5-2-3.群集墳

5世紀代の首長墓が、勝浦～須多田地域に造墓されているのに対し、横穴式石室を内部主体とする円墳群は、内陸部の宗像・福岡平野を中心に造墓がなされている。その墓域は、前代のI期の造墓地を踏襲したものが多く、古墳時代前期以来の小地域圏に基づくものであろう。分布は、5世紀中～7世紀にかけての古墳が、小平野に面した丘陵上に約1,900基が周知されている。そのうち最も多いのは、6～7世紀の群集墳である。これらは、大別して10地区に分布している。この内、約500基について発掘調査が実施されている（埋蔵文化財研究会, 1998）。

**田野地区** 湯川山西麓の丘陵に立地する上八辻（6基）・上八赤坂（3基）・上八北



谷(28基)・名見(6基)・池田大古野(24基)池田仏の前(4基)古墳群で約50～60基が周知されている。そのうち、池田大古野古墳が最大規模で直径8～15m前後の円墳で構成されている。内部主体は、横穴式石室が主流を占める。特に17号墳は、直径26mの円墳で、複室の横穴式石室で、7世紀初頭と考えられる。いずれにしても、6世紀後半～7世紀前半の造墓と推察される。また、田野桜3号墳は、直径30mの円墳で、複室の横穴式石室を内部主体とするものであり、池田大古野17号墳とともに7世紀前半における中核となる古墳である。この一帯は、上林・桜・大古野古墳群が、みかん園造成、瀬戸古墳群が土取りですでに大半が破壊されている。この地区で調査が行われたものは、瀬戸1・4号墳(前方後円墳)と田野小路境1・2号墳22があげられる程度である。いずれにせよ、田野の平野部あるいは、鐘崎の海浜集落の人々(海人)の墓域と考えられる。

**吉田地区** 宗像神社(田島)の東側の丘陵上に分布する吉田小林(2基)、吉田床(2基)、吉田安入寺(4基)、吉田向(1基)、多礼暮ヶ浦(2基)、鎮国寺山(11基)、多礼岩ヶ鼻(2基)古墳群で、20～30基が周知されている。古墳は、横穴式石室を内部主体とするものがほとんどで、直径10～18m前後からなる。吉田床3号墳は、直径22mの円墳で、横穴式石室を内部主体とするもので、中核の古墳といえる。この地区は、玄界灘の入海が深く入ると考えられ、農耕の生産基盤は、広いものといひ難い。いずれにせよ、6世紀後半～7世紀前半を中心とする造墓と考えられる。

**牟田尻地区** 釣川河口西側の丘陵に分布する牟田尻古墳群と勝浦乗鞍(13基)・勝浦水押(4基)・勝浦高原(7基)・神湊上野(2基)・鍋田(10基)・神湊井牟田(3基)古墳群からなる。牟田尻古墳群は、スイラ(12基)・井下(4基)・羅漢(23基)・池田(15基)・田向(3基)・桜京(2基)・鳥越(3基)・鳥越下境右(4基)・下浦(10基)・片峰(20基)・東方ヶ浦(10基)の11支群の95基からなる。ゴルフ場の建設に伴う調査で、更に古墳数が増加し、約130基の大型群集墳である。古墳は、直径8～22m前後の円墳で、横穴式石室を内部主体とするものがほとんどである。調査がなされているものは、桜京2号墳(装飾)などであるが、池田支群からは、6世紀末～7世紀初頭の平瓶・紡錘車が出土している。また、ゴルフ場建設に伴う調査で、中浦3号墳から、金銅製杵・金銅製馬具など、注目すべき遺物が出土する。いずれにせよ、6世紀後半～7世紀前半代の造墓が主体と考えられる。

また、神湊では井牟田1～8号墳が調査されている。内部主体は、2～4号が複室の横穴式石室で、鉄器(鉄鏃25・刀子6・直刀6・鉄斧2)・耳環(9)土器が出土している。造墓時期は6世紀後半とされる。また4号墳は、複室の横穴式石室で、玄

室が方形プランを呈す。出土遺物は、銅腕・装身具・ガラス玉4・琥珀玉2・鉄鏃7・刀子・鏢2・刀2・土器が出土しており、6世紀末～7世紀中葉に比定されている。この地区は、神湊浜宮貝塚の海浜集落にみられるように海人集団を被葬者に考えることができよう。

**在自・宮司地区** 宮地嶽北西麓に分布する在自大在自(13基)・津屋崎大力様(30基)・浦田ヶ浦(27基)・宮司井手ノ上(3基)・宮地嶽(3基)古墳群の69基が周知されている。山麓の古墳群は、直径8～10m前後で横穴式石室を内部主体とする。清田ヶ浦古墳群では、直径8～12m前後の円墳が11基からなり、竪穴系横口式石室(2号)と横穴式石室を内部主体とするものからなる。前者は6世紀前半、後者は6世紀末～7世紀代前半に比定されよう。副葬品は、武具(刀剣・鉄鏃・鉄鏃)・装身具(丸玉・小玉・管玉・連玉・切子玉・琥珀玉・耳環・金製空玉・勾玉)・工具(刀子)・鉄滓・土器類が出土している。この一帯は群集が著しく、在自・宮司地域に居住する集団の墓域を考えられる。

**手光・津丸地区** 西郷川流域の北岸に分布する手光(39基)・津丸(33基)・八並千田(27基)などの146基が周知されている。その分布は、やや密集度に欠けるが、単位群が明らかなものが多い。津丸では、野間尻1号墳が竪穴系横口式石室であるが唯一のものであり、野間尻2～6号墳・長尾・飛塚古墳群など大半のものが横穴式石室を内部主体とする。造墓時期は、前者が6世紀前半、後者が6世紀後半～7世紀初頭と考えられる。手光古墳群は、小尾根上に5世紀前半～6世紀後半にかけての13基の古墳が調査されている。古墳は直径10～14mのものが主体であるが、径20m級の南2・5号墳・北2号墳は全て複室の横穴式石室で6世紀中～後半の造墓である。副葬品は、武器(刀・矛・鉄)・馬具(辻金具・轡・鉸具・雲珠)・工具(刀子・鉋)装身具(耳環・玉類)などが出土している。西郷川流域の南岸では、主なもの、上西郷大森(12基)、上西郷馬ヶ谷(9基)などがあり、本木・内殿・上西郷などで95基が確認される。これらの墓域は、西郷川流域の集団の造墓と考えられる。

**渡・塩浜地区** 古代において、島峡をなしていた渡・塩浜は、農耕生産基盤が認め難いのに渡水上(6基)・渡入津加(2基)・森山(23基)・池尻(1基)・塩浜(4基)の約33基が周知されている。これらの古墳群は、いずれも海拔50～70m上の丘陵上に分布するものが多いが、塩浜古墳のように海拔3mの古砂丘上に造墓されるものも認められる。このうち、水上古墳群で1基が調査され、6世紀後半の横穴式石室を内部主体とする円墳であることが判明している。また、森山古墳群は、径8m前後の円墳群であるが、封土に塊石を用いて積石塚状を呈しており特異である。内部主体は、横穴式石室と思われる。このようにこの地区の集団は、

海民集落の集団の被葬者が窺える。

**奴山・須多田地区** この一帯は、5世紀～6世紀前の首長墓域となっていたが、群集墳は新原奴山（36基）、須多田（10基）、生家（1基）、音ヶ裏（2基）の計49基が周知される。詳細は前述したとおりである。

**河東・城山地区** 釣川中流域の北岸に分布する一群で、横山川流域の久戸（37基）・河東（2基）・稲元（8基）・稲元久保（68基）・相原（40基）・池浦（2基）古墳群に約160基、山田川流域に須恵（5基）・須恵須賀浦（89基）・半田（12基）・平等地向原（77基）・城ヶ谷（61基）・平等寺原（9基）・平等寺（10基）三郎丸堂ノ上（12基）・三郎丸（15基）・陵巖寺宇土（21基）古墳群に約340基の合計500基前後が分布する。このうち、平等寺・城ヶ谷一帯に約190基が集中分布する。その主体部は、竪穴系横口式石室・横穴式石室・石棺系の小石室等からなる。一方、河東一帯では、久戸・稲元久保、須恵須賀浦にて横穴墓群が認められ、宗像において特異な地域である。このうちの大半のものに発掘調査がなされ、宗像にて調査密度が最も多い地区である。また、この一帯には、須恵器窯跡群が分布している。

**赤間・吉武地区** 釣川上流域に分布する一群で、武丸初瀬（20基）・武丸的場（20基）・吉留西上ノ原（9基）・吉留西中ノ尾（15基）・冨地原上瀬ヶ浦（24基）・冨地原山ノ後（10基）・冨地原大原（24基）・名残高田（26基）・徳重高田（24基）・冨地原梅木（26基）・武丸皆真庵（11基）・武丸中ノ坪（7基）・名残大原（17基）古墳群の約444基が周知される。但し、昭和54年以前の自由ヶ丘団地内の開発に伴う発掘調査がなされておらず、多くの古墳が消滅している。このうち、調査がなされたのは、名残遺跡群（仏祖・高田・楠木・小嶺）と武丸町添・武丸皆真庵がある。これらの墓域は、平野部の農耕基盤に基づく集団の古墳と考えられる。東郷・南郷地区と対比するまとまりがあり、共に小平野と水田を単位とするものである。

**東郷・南郷地区** 釣川中流城南岸に分布する一群で、高瀬川・朝町川流域の野坂入免（21基）・朝町中村（10基）・野坂中松元（21基）・朝町官作（13基）・野坂中（20基）・野坂塚ノ元（14基）・朝町百田A（13基）・浦谷（54基）・朝町百田B（13基）・朝町山ノ口（22基）・王丸清勢（14基）・王丸黒尾（10基）・王丸鎌田（20基）・大穂町ノ口（8基）などに約365基が確認される。東郷丘陵から大井丘陵に久原澤田（52基）・新屋（8基）・東郷（4基）・村山田高田（3基）・平井（5基）・大井三倉（10基）・大井割石（7基）などに約140基の合計505基が周知される。

このうち、調査されたものは、朝田妙見・朝町山ノ口・浦谷・久原澤田・大井

三倉・東郷古墳群などで、農耕基盤の中枢部でありながら、実態は不明確な点が多い。その一因は、昭和40年代の東郷遺跡群、日の里団地造成に伴う古墳群・遺跡の消滅である。いずれにせよ、拠点集落である田能・東郷遺跡が立地しており、宗像の中枢部と考えられる。

これらの後期群集墳は、釣川水系の宗像市域に1,495基の古墳が確認され、旧玄海町内の分布調査が不十分であり、今後の調査で100基以上は増加するだろう。また、西郷川流域では、ほとんど低丘陵に古墳があり、232基の古墳が確認される。旧津屋崎町内では、165基が周知される。おそらく、旧宗像郡内に推定2,000基の古墳が存在していたと思われる。

#### 5-2-4. 在地首長墓の動向

造墓Ⅰ期では、東郷高塚古墳・田久瓜ヶ坂1号墳と径30m前後の東郷高塚2号墳と径20m以下の円墳群に明らかな差が生じている。埋葬施設においては、高塚が割竹形木棺を被覆する粘土槨、径30mの一群が箱式石棺・割竹形木棺直葬、径20m以下もこれに類似した形態をとっている。また、農耕基盤の中心地の内陸部に前方後円墳の葬法が採用されている。造墓Ⅱ期(5世紀前半～6世紀初頭)の段階では、全長70m以上の、勝浦峯ノ畑古墳・勝浦井ノ浦古墳・新原奴山22号、生家大塚、在自剣塚古墳をその候補となる。また出土遺物によって、新原奴山22号→勝浦井ノ浦古墳→勝浦峯ノ畑古墳、在自剣塚古墳の首長権の流れとして理解した。造墓Ⅲ期(6世紀前半～7世紀初頭)は、全長60m以上の古墳4基から、天降神社古墳→須多田下ノ口古墳・在自剣塚・須多田ミソ塚古墳の系列を考えた。各期でその特性をみるならば、墳形、規模、埋葬施設によって格差が存在するようである。

造墓Ⅱ期は、規模において70m以上の首長墓、40～50mの前方後円墳の一群7基と、直径25～40mの円墳・方墳の3ランクの格差が生じている。大半のものが新原奴山古墳群の計画墓域へ集中していることも起因しているものと思われる。外部施設においても首長墓と40～50m級の前方後円墳に周壕や段築が普及している。埋葬施設は、概ねの古墳については不明だが、古式横穴式石室を採用する勝浦峯ノ畑古墳・新原奴山1号・須多田ニタ塚古墳があり、勝浦井ノ浦古墳の竪穴系横口式石室(前方部)を除くと、大半のものが横穴式石室系譜のものと考えたい。特に、前述したように海を意識した計画墓域がこの段階である。

造墓Ⅲ期は、60m以上の首長墓4基と、35～45m級前方後円墳7基、25～30m級前方後円墳6基の墳丘構成となっている。したがって、首長墓と他の14基の格差が明確である。その分布も、須多田の首長墓系譜と宗像一円の地勢圏分布となる。そして、群集墳の群構成に含まれるものが大半である。首長墓が横穴式石室を採用しているのに対し、スベットウ・田野瀬戸1号・4号墳・徳重高田16号・

城ヶ谷3号墳等が、竪穴系横口式石室あるいはその系譜を引く石室である。したがって、横穴式石室(久原Ⅱ-3号・田野桜3号・須恵クヒノ浦古墳)と竪穴系横穴式石室の二者が埋葬施設となっている。

造墓Ⅳ期は、胸形君徳善の墓と目される宮地嶽・手光波切不動古墳の首長墓と径30m前後の円墳である。同時期のものとして相原2号・田野桜3号墳等があげられる。内部主体は全て、巨大化した横穴式石室である。後者のものは、7世紀前半代に前方後円墳の消滅後に円墳としてあらわれるもので、また造墓Ⅲ期の前方後円墳分布圏に認められる。宮地嶽古墳の被葬者は、「胸形君徳善」の墓と推定する岡崎敬・渡辺正気・小田富士雄氏が、概ね肯定的されている(宗像大社復興期成会, 1979)。しかし、柳澤一男は、手光波切不動古墳が年代の方が胸形君徳善の没年代により近いことを指摘され再検討を促している(柳澤, 1991)。通説的な年代観に従えば、手光波切不動古墳の造墓時期とするのが、妥当と云える。しかし、古墳出土土器群の暦年代が今後、飛鳥の土器編年の確立に伴い、年代観が下れば宮地嶽古墳の造墓時期とも合致する可能性もある。ただし、この問題の解決は、考古学的には非常困難である。いずれにしろ、宮地嶽古墳→手光波切不動古墳→宮地嶽蔵骨器に続く被葬者が、後に「宗形朝臣」一連の血縁集団の首長であろうことは変りがなく、宗形郡司として大領・神主を世襲兼務することとなる。

宗像地域の首長墓は、須多田下ノ口古墳の前方後円墳を最後とし、さらに7世紀代に畿内色を強めた造墓がなされる点、朝鮮半島の百済をめぐるヤマト政権の直接的な関与に宗形氏が政治的色彩を強めて行くことになる。特に、関東地方では、7世前半代に切石系石室を含めた大型円墳・方墳が、後の有力氏族の領域と一致することが指摘され、ヤマト政権による東国経営のための「国造」の墓とする見解もある。宮地嶽古墳の被葬者は、北部九州にて同等の勢力を有し、政権中枢と繋がった政治勢力とみて誤りなからう(池ノ上・花田, 1999)。

#### 5-2-5.生産工房

宗像地域では、須恵器窯跡・鍛冶工房・滑石玉作り遺跡などの手工業生産に関する遺構・遺物が発見されている。古墳時代の在地勢力の生産構造を示す重要な視点である。生産集落は、須恵器・鍛冶工人・玉作りなどの作業場とその工房を単位とするもので、厳密には工人のみの集落を構成することは少ない。内陸部の河東地区には須恵器窯が群集し、5世紀末～8世紀まで連続して操業がなされる。釣川遺跡では、窯壁片の出土から集積地の可能性がある(花田, 2002)。

**須恵器生産** 釣川内陸部に位置する須恵窯跡群は、近年20基からなる須恵須賀浦窯跡群の調査によって今後の議論が活発に予想されるため、再度まとめおきたい。

須恵窯跡群は、孔大寺山から西南派生する緩やかな丘陵上に分布する。窯跡は、稲元日焼原(5ヶ所)・稲元墨巡(13ヶ所)・稲元新池(4ヶ所)・須恵古池(7ヶ所)・稲元(1ヶ所・灰原)・須恵須賀浦(20ヶ所)・須賀浦北など50ヶ所で散布地等が周知されている。そのうち、須恵須賀浦で25ヶ所が調査されている。その分布は、稲元丘陵に開析する日焼原小支谷の中央部に日焼原窯跡、谷奥の小支谷に古池窯跡・新池窯跡・稲元墨巡窯跡・須恵須賀浦A区窯跡が立地する。その北側の相原支谷に稲元墨巡・大浦遺跡が位置する。クヒノ浦支谷は、谷奥に稲元窯跡が確認される。須恵須賀浦窯跡は、南群に23ヶ所・北群に数ヶ所が知られる。操業時期は、日焼原窯跡が小田編年ⅢA期～Ⅳ期、新池南・新池北窯跡ⅢA期～ⅢB期、墨巡・稲元・稲元墨巡・古池南窯跡ⅢB期を中心とする時期と考えられる。一方、中核の須賀浦窯跡はB区17ヶ所の大半のものがⅢ期であり、操業終了後の7世紀前半の横穴墓が造墓を開始している。このことから、工人集団の墓が横穴墓と考えられている。また、須恵古窯跡群の周囲に2～5kmに、山田井ノ上窯跡(7世紀末～8世紀前)・三郎丸堂ノ上C遺跡・陵巖寺寺ノ前(ⅣB期)・朝町木山窯跡(Ⅳ～Ⅴ期)・浦谷窯跡がある。日焼原窯跡は、尾根斜面に4ヶ所の窯跡と5ヶ所の竪穴が検出される。以上のように、須恵器窯の操業は、5世紀末～8世紀までで、6世紀後半～7世紀前半が中心時期にあたる。須恵器窯跡群では、福岡県最大の大野城市牛頸窯跡群に次ぐ規模である。

**鉄器生産** 集落・古墳から発見された鉄鋌・鍛冶具・羽口・鉄滓などがある。これらは、古墳前期の板状鉄斧から、奈良時代の鉄滓埋納までの遺構があり、連続した遺物が認められる(原,1997)。

集落では、鍛冶工房としては、5世紀後半～6世紀代に武丸高田・野坂一町間遺跡がある。規模的には、5世紀から6世紀前半まで小規模であり村方鍛冶と理解できる。これ以外に、勝浦井ノ口遺跡・勝浦穴田A遺跡・在自小田遺跡で、古墳時代中期～後期にかけての遺跡より鉄滓の出土が知られる。

鉄器生産の鍛冶具として、鉄鉗・鉄鋌・鑿・砥石などがある。宗像では、新原奴山1号墳・平等寺原5号墳・朝町山ノ口5・6号墳・手光南支群2号墳の5基が知られる。鍛冶具類は、新原奴山1号墳(鉄鉗1・鉄鋌2・鑿2)・朝町山ノ口5号墳(鉄鉗1・鉄鋌2)・6号墳(鉄鉗1・鉄鋌1)・平等寺原5号墳(鉄鉗1・鉄鋌3)の鍛冶具が出土する。新原奴山1号墳、前辻のごとく陶器TK208型式に比定される首長墓である。他のものは、6世紀末～7世紀前半の群集墳である。また、手光古墳群南支群2号墳から、鑿が出土している。古墳供献鉄滓は、相原E-1号墳・百田A-1号墳・B-2号墳・B区埋納遺構・浦谷H-4号埋納遺構・清田ヶ浦8号墳・須多田立石2号墳・須多田ニタ塚古墳において、検出される。概ね5世紀末～7世紀前半のものである

が、浦谷H-4号のように8世紀代のものも知られる。鉄滓供献の儀礼は、鉄生産・鉄器生産に係わる地域での祭祀儀礼である可能性が高い。

このようなことから、製鉄炉は現在のところ検出されていないが、鉄滓の分析結果から判断すると、遅くとも6世紀末前後に海岸部で開始された可能性がある。鍛冶工房で作られた製品の内容が明らかでないが、5～7世紀には操業が確認できる。鍛冶具も5世紀代のものが有力首長の副葬品となっており統括者と推定される。6世紀後半以降は、群集墳の有力家長層に副葬されており、操業担当者と考えられる。また、鍛冶具の副葬古墳に大型の鉄鎚・鉄鉗の存在から、6世紀後半以降の特異な鉄鏃と相俟って、大規模化した可能性が高い。

**滑石製玉作り** 玉作りは、滑石製品の未製品・製品の出土から、富地原神崎屋・釣川・練原・在自下ノ口遺跡などで製作が知られる。概ね、5世紀代を中心とするもので、粕屋郡の若杉山からの石材を用い、短期に製作されたとみる。昭和10年、田中幸夫の釣川遺跡の報告で、素材から製品までの工程が復元され、古墳時代中期後半とされる。富地原神崎屋遺跡は、滑石製未製品と白玉・有孔円盤・砂石が出土している。これらは、SK8の廃棄土壌や竪穴住居から出土しており、生産が行われている（宗像市教育委員会，1996）。滑石石材は、白玉・有孔円盤の原材料と考えられる扁平な石材などが、3Kgほど出土している。したがって、滑石製作が容易であるため、粕屋地域の拠点集落から石材を入手し、製作されたと理解できる。共伴する須恵器により、5世紀末～6世紀初頭に生産が行われている。

ここで、注目されるのは古代祭場との関係である、祭祀位置が概ね決まった場所で行うものを祭場とし、他は祭祀遺跡とした。祭場は、沖ノ島、大島のロクドン・井浦川流域、田島の高宮遺跡などが知られるが、ヤマト政権の関与によるものである。祭祀遺跡としたものは、その把握が困難だが、大井和歌神社でも滑石製品が採集される。集落内祭祀は、有孔円盤・白玉・剣形石製品などで用いられるが、固定的な場所でなされるのか不明な点が多い。滑石製品は、これら祭祀に用いられたものであろう。

**製塩** 製塩土器は、古墳時代前期に神湊上方B遺跡が知られる。古墳時代後期～奈良時代に大島大岸、新波止貝塚、神湊上方A遺跡、生家釘ヶ下遺跡で行われる。一般的に外面にタタキ目を持つ甕であり、濃縮用の土器である。

**津機能** 津は、一般的に海岸の集落の船を泊める港のようなもので、「津・湊・泊」などと呼ばれる。集落の舟着き場程度のものでなく、常設性の高いもので、宗像では鐘崎の港が有名である。ここで云う津は、大規模な舟着き場程度のものである。津機能の設備として、小規模な石積み突堤などが遺構と確認できたものは少ないが、神湊浜宮、神湊新波止など多くの海浜に近い集落や入海の集落に存

在するものと推察される。

以上のように、鉄器生産・須恵器生産は宗像地域にて大規模に展開しており、福岡平野の生産工房群に次ぐ規模で、その様相は断絶がなく継続生産であり、墓制においても竪穴系横口式石室の系譜を残すものが多く存在するなど、他地域と性格を異にする。

## 6.奈良時代～平安時代

この時期は、天皇を頂点とする古代国家の形成期であり、平城京などの都城の整備に伴い、宗像郡衙・駅家などの文献史料との関連が注目される。特に、宗形郡司の大領（長官）の名前が知られ、神官を兼務する。宗形郡衙が発見されれば、この地域の解明が画期的に進むと考えられるからである。集落の発掘調査例が少ないが、敢えて取り扱うのは、中世宗像氏への移行が解明されるからである。

### 6-1.遺跡の様相

**武丸大上げ遺跡** 武丸久戸の東麓部に位置し大型掘立柱建物3棟が検出された。建物1は、2間×4間で、柱掘方が1m前後となる。3棟はコ字形の配置となる。出土の軒丸瓦は、単弁16弁蓮華文、軒平瓦は変形した均整唐草文である。時期は、8世紀後半～9世紀前半と考えられている。延喜式駅の候補地で「津日駅」の推定地とする理解もある。正木喜三郎氏は、赤間院の郷倉とみる（宗像市教育委員会, 1985）。

**三郎丸今井城遺跡** 奈良時代後半の土壇内から、須恵器に伴い和銅開宝・万年通宝・神功開宝などが121枚出土した。共伴の須恵器甕片に「由加主□」のへら書きがあった。倭名抄の山田郷推定地にあたる（田中, 1998）。

**王丸河原遺跡** 奈良後半の柵列が検出されている。倭名抄の荒木郷推定地にあたる。

**石丸坂へら遺跡** 赤間宿の低丘陵の先端で大型掘立柱建物1棟が発見された。

**野坂一町間遺跡** 掘立柱建物5棟に伴い、円面硯・玄界灘式製塩土器が出土した。倭名抄の野坂郷にあたる。

**徳重本村遺跡** 須恵器に「国」と読めるへら書く土器が出土した。

**富地原岩野A遺跡** 掘立柱建物1棟と溝が検出され、8世紀前半に比定される。

**田久瓜ヶ坂遺跡** 田久丘陵（I区）で、8世紀の蔵骨器が出土している。

**徳重本村遺跡** C区の土壇より、8世紀後半～9世紀前半の土器が出土する。

**王丸梅ノ木谷遺跡** 2区より土壇内に炭を詰めた中央部に杯蓋を控え、塊石を組



んでいる。9世紀とされる。倭名抄の荒木郷推定地にあたる。

**奴山番田遺跡** I区の奈良時代の遺物を含む溝が検出された。倭名抄の辛家郷内にあたる。

**須多田前田遺跡** 須多田の小平野に位置し、掘立柱建物1棟が発見された。包含層より、タタキのある甕が出土する。奈良時代後半～平安初期と見られる。

**在自下ノ原遺跡** 古代の掘立柱建物が70棟前後存在する、広域な集落である。遺構の密度が高く、詳細が判明しないが、大規模な在自の拠点集落である。土器は、奈良～平安前期のものがある。倭名抄の荒自郷内にあたる（津屋崎町教育委員会, 1997）。

**在自三本松遺跡** 在自集落の山手にあたり20棟の掘立柱建物群が検出される。その中に総柱建物が土器の他に瓦が出土している。奈良時代末～平安前期の遺構群とされる。和名抄の在自郷内となる。倭名抄の荒自郷内にあたる（津屋崎町教育委員会, 1996）。

**手光酒屋遺跡** 大型の並列した2棟の掘立柱建物が検出された。遺物がなく、年代が判明しないが、この時期のものであろう。倭名抄の蓑生郷推定地にあたる（福間町教育委員会, 集1996）。

**上西郷クニサキ遺跡** 遺物包含層が確認され、玄界灘式製塩土器・緑釉陶器が出土し、9世紀後半～10世紀前半とされる。

**津丸五郎丸遺跡** 8世紀末～9世紀の遺物包含層より、玄界灘式製塩土器・越州窯系青磁などの他に、沖ノ島と類似する滑石製勾玉が出土している。また、久末石原林遺跡では、越州窯系青磁・長沙窯系青磁が出土した。倭名抄の津九郷にあたる（松岡, 1973）。

**蓮鳥遺跡** 土壇内より「石足」のへう書きの土師器杯が出土している。

**神興廃寺** 福津市神興にある廃寺で、試掘調査で瓦類が出土した。宗像郡唯一の奈良時代寺院である。建立が8世紀中期以降で、延喜11年銘(911)の平瓦の出土は、瓦窯の存在が推定され、寺院の大改修・補修が行なわれたと推定される。神興神社の境内に移動した塔心礎がある。一般的に、宗形氏の氏寺と考えられている。倭名抄の津九郷推定地にあたる（福間町教育委員会, 2000）。

**畦町遺跡** 福津市畦町の中央部に位置する。江戸時代に礎石の存在が知られる。近年、不明であった瓦出土地が判明した。寺院とされたが、最近では駅家の推定地とされる。

以上のように、調査例が少ないが、福間地域に寺院・駅家推定地などがあり、越州窯系青磁などの出土が知られる。

**高宮遺跡・宗像神社** 田島高宮祭場周辺で滑石製馬形・舟形・白玉・土器類が

出土する。古墳時代中期から続く祭祀遺跡である。伝承によると社殿は、奈良時代末～平安時代初期に建立されたとする。祭祀にあたり、宗像郡衙推定地から離れており、宗形氏の祭祀に伴う施設が山麓部にある可能性が高い。神社以外の遺構の発見が待たれる。倭名抄の深田郷にあたる（花田, 2010）。

**金崎港** 奈良時代には、『続日本紀』神護景雲元年（767）に「筑前国宗形郡大領外従六位下宗形朝臣深津授 外従五位下。其妻無位竹生王外従五位下。並以被僧寿応誘 造金崎築瀬也。」の築港記事があり、宗形朝臣深津とその妻竹生王が、僧寿の進めで金崎に築瀬を造り、官位の昇格が知られる。金崎とあり、現在の鐘崎京泊あたりだろうと推定される。

『倭名類聚抄』に宗像郡に「秋・怡土・荒自・野坂・荒木・海部・席内・深田・蓑生・辛家・小荒・大荒・津九郷」の14の郷が知られる。その比定地は、亀井輝一郎氏の具体的考証がある。海部郷は鐘崎を含めた地域とされるが、伊藤彰氏は神湊以西の海辺を含む地域と考え、玄界灘沿岸部とみる。この見解は、神湊地域の浜宮貝塚・新波止貝塚などを重視し、本来の本貫地はこの一帯で、鐘崎の築港後に海人の移動を推定する（伊藤, 1985）。宗像海人については、『万葉集』巻16に神亀年間（724～729）宗形部津麻呂の航海に関する記述は、舵師として外洋航海技術の巧みさ伝えている。さらに、糟屋郡の白水郎荒雄、いわゆる志賀の海人とも協業関係にあり、対馬に物資を輸送した際の遭難記事が著名である。

## 6-2.宗像郡衙の位置

奈良時代～平安時代前期の宗像郡の行政統治・管理施設である宗像郡衙は、大郡ということもあり、注目される遺構が発見されると考えられる。郡衙の位置については、三つぐらいの候補を考えてよいのではないかと思う。①福津市八並地域、②宗像市土穴「鍵の前」、③手光地域などが考えられる。

①については、宗像郡の郡寺（神興廃寺）・駅家（畦町遺跡）の推定から有力候補である。八並地名説は、歴史地理の木下正氏の地名説である（木下, 1998）。いずれにしても、太宰府に対面しての官道設置の理解と思う。②は正木喜三郎氏の論文によく出てくる説で、後の宗像神社の根本神領がこの一帯であり、「鍵の前」地名に基づくものである。正木喜三郎氏は、宗像庄の関係で重視されている（正木, 2004）。この説は明治時代の『大日本地名辞典』のような吉田東吾氏の説である。③は、手光酒屋遺跡の大型の掘立柱建物群が、7世紀後半～8世紀代のものと類似する。さらに、宮地嶽古墳・手光波切不動古墳に近い立地であり、位置的に問題はない。②の土穴説は、銅銭を百枚出土した三郎丸今井城遺跡が8世紀後半

に比定される。銅銭は出土数が全国的にも突出した出土量であり、私鑄銭（贗金）の可能性もある。通常、郡衙が同じ位置に長期間あるケースは全国的に少ない。例えば古い時期は①・③のいずれかにあり、新しい時期は②の可能性もある。郡衙は、位置の移動が知られており、①に継続して存在しなくても良い。

基本的には、宗像評衙→郡衙→宗像大宮司居館への移行の中で施設位置の変更と機能移転によるものである。宗像大宮司は、恐らく神官・社家などの祭り機能が宗像神社の政所、行政権機能が大宮司居館となると思う。B→Cの時期は平安時代中期以降と推察される（花田，2010）。留意されるのは、宗形氏の大領・神官の分離が奈良時代末にあります。評衙→郡衙は、同一地点でもかまわない。神興廃寺の建立が8世紀中期以降で、延喜11年(911)の平瓦の出土は、瓦窯の存在が推定され、寺院の大改修・補修が行なわれていたと見ることは妥当と思われる。恐らく、宗像大宮司の関与が推察されます。

また、江戸時代の『筑前国続風土記拾遺』の神興に「享和元年辛酉 六月十二日銅印一顆を得たり。難冠紐書跡古雅にして、古色愛しつべし。宗像社所蔵の勘合印また山田村増幅院にある所の氏雄の印に同様なり。」の記事は、この寺院の重要性を示すと思う（青柳，1864）。もし、Aの西郷川流域に宗像郡衙があるとすれば、律令国家の官道整備の奈良時代前期以降と推察されます。それ以前には、手光の評衙→郡衙でも良いような気がする。いずれにしても、詳細は不明である。但し、宗像郡大領は、宮地嶽古墳→手光波切古墳の被葬者の血縁集団と考えられる。行政統治の郡衙と祭場の宗像神社を統括しており、宗像郡衙の発見が待たれる。私は、神興・畦町・八並一帯に位置を推定する（花田，2010）。

また、津日駅家の推定も、上八地域（津日の浦）とする説、畦町説、武丸大上げ遺跡とする説がある。交通路としては、畦町遺跡説、武丸大上げ遺跡などが有力な候補であり、共に官衙的性格の強いものである。両者は瓦類を出土している。津丸五郎丸遺跡・蓮鳥遺跡は津丸郷内にあたり、神興廃寺（氏寺）の立地と相俟って、郡内でも律令国家の香りがするところである。一方、在自下ノ原遺跡・在自三本松遺跡は、荒自郷の中心集落であろう。

宮地嶽蔵骨器（ガラス製）は、原位置を保っていないため出土の詳細は明らかでないが、奈良時代初頭に宗形氏の宮地嶽奥ノ院付近に、墓域が周辺に存在したのである。被葬者は、史料にみる宗形朝臣等杼に比定する森貞次郎氏説や尼子娘の帰葬とする渡辺正気説の考えがある（森，1976・渡辺，1984）。いずれの意見も、墓誌の伴う文禰麻呂のガラス骨蔵器が、慶雲4年(707)のものであり、その形態が類似し宙吹き技法も共通することから、この頃のものとする。尼子娘とみる見解も依然有力であることに変わりない。一方、文禰麻呂が正四位上、宗形朝臣

等掬が従五位上であり、明らかに官位差が存在する。奈良時代には、手光波切不動古墳に近接して氏寺である神興廃寺が建立され、塔心礎が残る。出土瓦は、いわゆる鴻臚館式瓦で占められ、8世紀中頃の創建と考えられる（高橋，1983）。また、畦町遺跡は礎石・古瓦を出土した古記録より、駅家の展開が西郷川流域に分布している。この二つの遺跡は、律令期の津丸郷内となろう。

神興神社の祭神に宗像三女神があり、古代寺院である神興廃寺の存在も相まって、興味深く、郡衙は周辺のような気がする。宗像神社大菩薩縁起には、「室貴六嶽」への三女神降臨伝承があり、神興が登場するのも興味深い。但し、縁起の成立は鎌倉時代末期と考えられている。宗像神社史には、直接的に宗像郡衙の位置を示す記述は確認できない。但し、宗像神社の周辺に祭祀に伴う、居宅あるいは政所の存在することは考えて良いと思う。恐らく、神社の史跡外、政所社あたりと考える。

## 7.宗形氏とヤマト政権

### 7-1.海民の地方神

弥生時代には、『魏志倭人伝』にみられるクニが、伊都国・奴国などの地域連合体の統合が進む中、このクニを特徴づける甕棺埋葬・大量の青銅器副葬墓の存在は宗像には顕著に現れない。したがって、北部九州外縁部として、早期には環濠集落などは出現が確認されるが、中期・後期には少数の青銅器副葬墓、列状土壙墓群などの墓制が思想を共通するものの、史料にもとづいて比定される伊都国・奴国の様相と異なる。後期には、玄界灘沿岸を掌握する伊都国連合の支配領域に含まれるとみる。

田熊石畑遺跡の青銅器の大量副葬は、弥生時代前期～中期前半に福岡平野などの遺跡と同様に地域的発展を遂げていたことが証明された。しかし、中期後半～後期には、現在のところ大規模な遺跡は少ないようである。日の里団地の開発で、この時期の遺跡群が消滅した可能性もあるが、基本的には地理的に農耕基盤の脆弱性が原因で釣川流域地域の政治的な成長に抑止が働いたのではなかろうか。

古墳時代早期（3世紀前～中）には、沖ノ島・今川遺跡・久原瀧ヶ下遺跡・富地原川原田遺跡・神湊上方・下高宮遺跡などで、庄内式併行期の土器が確認される。特に、今川・久原瀧ヶ下・富地原川原田遺跡で畿内の庄内式の精緻に模倣される器種が知られる。今川遺跡では、庄内式の他に山陰系・近江系の土器が検出される。近江系の甕は、近江湖東・湖北地域のものと考えられ、瀬戸内海交易ルート以外に、日本海（東海）の交易ルートを示すものとして注目される。この

時期は、福岡・糸島平野の在地首長とヤマト政権の前身勢力である邪馬台国連合の地域間交易・接触を示すものと考えられる。つまり、邪馬台国の時代に畿内（大和・河内）の影響を受けた模倣土器が多く出土する。神話「神武東征」の正反対の現象が起きている。つまり、邪馬台国の九州説は全く成立しないのであり、古事記・日本書記の神話に騙されてはいけない。

一方、沖ノ島の信仰は、玄界灘沿岸海民の外洋航海・避難島として、縄文前期・弥生中期・古墳早期の生活遺物が認められる。古墳時代前期前半までは、海民の地方神として息づいていたものとみる。

古墳時代前期前半までは、ヤマト政権の磯城・佐紀に墓域を形成した王権は糸島・早良・福岡・粕谷平野に早期以来の在地首長層と政治的結合・掌握を進めたことが、前方後円墳の造墓の様相から窺い知ることができる。前方後円墳集成1期～5期までの古墳が、糸島・早良平野で16基、福岡・粕谷平野に9基、遠賀川河口に5基、豊後灘に面した曾根平野に1基が確認できる。この分布の様相は、倭人伝の航海ルートとほぼ一致する。

## 7-2. ヤマト政権の航海神の昇華段階

古墳時代前期後半の沖ノ島祭祀開始される4世紀後半～6世紀前葉が、この時期にあたる。玄界灘沿岸海民の地方神がヤマト政権の関与により、宗像在地集団が航海神奉斎者を媒体に海民集団の組織化を図り、外洋・物資輸送など宗像首長層を取り込み、在地首長権を承認、海上航海権の直接的な掌握を進める段階とみる。

4世紀後半は、沖ノ島祭祀が開始される。東郷高塚古墳は全長62mで、宗像入海を見下ろす位置の造墓である。釣川河口に近い上高宮古墳は、後の高宮祭場の地にあたる。この時期の宗像の古墳は、遠賀川河口の磯部1号・塩屋・豊前坊1号に比べると、突出した規模ではない。

5世紀初頭～6世紀初頭は、古市・百舌鳥古墳群の被葬者が、ヤマト政権の中核勢力として、航海路の掌握を進める時期で倭の五王の時代にあたる。史料にみる「海北道中」として宗像の在地首長の古墳群に変化が現れる。玄界灘沿岸の津屋崎入海（桂潟）に、勝浦峰ヶ浦・勝浦井ノ口古墳、生家2号墳、新原奴山古墳群の形成が開始され、全長70～100m級の大型首長墓が出現する。宗像入海から、桂潟の津の成立と関連するとみられ、外洋航路の確保と交易が在地首長によって、進められたとみる。集落も在自遺跡群・勝浦練原遺跡群・生家釘ヶ崎・奴山遺跡群などの、海浜集落の盛行が確認できる。田島の中殿山祭祀が確認でき、高宮祭祀の上限とみる。

玄界灘沿岸の前方後円墳の首長墓は、5世紀前半に首長墓系列の断絶が知られる。新たに出現する系譜は、宗像系列が顕著であるが、他の系列は古墳規模が30～40m級のものが多い。このことは、沖ノ島の航海神を奉斎する玄海灘海民集団の盟主に宗像首長層が権力を掌握したとみる。一方、ヤマト政権は、筑後川水系の月ノ岡・塚堂古墳の吉井、御塚・権現塚古墳の三潞地域の掌握が指摘される。

### 7-3.ヤマト政権の地域施策推進と関与

6世紀中葉の玄海灘の航海権を掌握したヤマト政権は、環有明海首長連合の盟主筑紫・磐井との航海路の掌握をめぐり、対峙・抗争となり、史料にみる「磐井の乱」となって現れる。環有明海の首長連合は、5世紀前～中葉に急速に朝鮮半島への独自の航海路・物資輸送・船舶の確保などを、持っていたとみられる。この勢力範囲は、「筑紫・火・豊」を含むと考えられるが、筑後・肥後を中心に線的に交通の要衝を掌握したとみる。乱に伴い宗像首長の位置が、ヤマト政権と筑紫君磐井政権の中立的立場とする見解がある。しかし、宗像首長層の造墓、群集墳の連続性から考えると、ヤマト政権の傘下とみる。それは、筑紫君磐井政権が「糟谷」に拠点を持っていたとされるが、農耕基盤であり、玄海灘沿岸海民集団を掌握していたとは考えない。乱後、6世紀後半には、「糟谷屯倉」・「那津官家」の設置が史料にみられる。この時期に、囲柵建物群が比恵・有田・鹿部田淵遺跡が玄界灘沿岸の遺跡で検出され、初期官衙的性格が指摘される。ヤマト政権の直接支配拠点として、物資の集積・津港などの交通・軍事的要衝に設置された。宗像などの在地首長を媒介としない、中央政権の政治・軍事拠点となる。宗像の首長墓は、奴山・大石・須多田系列が9基、全長60～100m級の前方後円墳が知られる。それは、天降神社・須多田ミソ塚・須多田上ノ口・須多田下ノ口・在自剣塚古墳・奴山12号・30号墳・大石岡ノ谷1号・2号墳などである。これらの様相から、筑紫の地域支配への参画に積極的に加担したとみる。田熊石畑遺跡は、このような情勢下で成立したものであり、宗形氏の経済的基盤を支えた倉庫群と考える。玄界灘沿岸では、博多湾の今津の港に今宿大塚古墳（全長64m）、比恵遺跡に近い東光寺剣塚古墳（全長75m）が造墓されることから、ヤマト政権に協力した在地首長とみる。特に、磐井の乱後に大野城市牛頸窯の生産が拡大することや砂鉄原料の鉄生産の盛行は、ヤマト政権の地域生産集団の再編と技術移転などの地域掌握の政策とみる。

7世紀初頭～7世紀中葉には、「筑紫大宰」が史料にみられ、ヤマト政権を構成する中央豪族の派遣も確認でき、朝鮮半島への航海路拡大と維持から軍事拠点としての性格が強くなる。宮地嶽古墳は、畿内の中央豪族墓を凌ぐ規模・構造・副

葬品から、沖ノ島の航海神の奉斎・船舶の統率・軍事指揮などの諸権力を統括していたとみる。このことが、大海人皇子と尼子娘の婚姻関係を生じたとみる。造墓は、宮地嶽古墳が孝極・孝徳朝、手光波切不動古墳が斉明朝前後の年代を想定する。

#### 7-4.大宰府設置に伴う地方官人化

政治拠点の大宰府の設置に伴い、道路・港湾の整備が一層進められ、宗形氏も朝鮮半島の軍事的参画が進む。高市皇子は、壬申の乱における大海人皇子軍の最大の功労者として著名である。この天武2年(673)以前に「胸形君」が個人として史料に登場することはなく、高市皇子の活躍が正史に反映されたものとみなされている。『日本書紀』天武13年(684)の条に八色の制の制定に伴い、52氏の「朝臣」の賜姓の中で、九州では「胸形君」だけである。律令国家の確立に伴い、和銅2年(709)～弘仁4年(813)に宗形朝臣の郡司の人名が知られる。和銅2年には、宗像郡司に同一親族の三等以上の連任が許され、延暦17年(798)に郡司・神主の兼帯が知られる。これは、高市皇子につづく長屋王などの政治的地位が起因したとみる。平城京長屋王宅の付札木簡は、宗形郡宗形大領等杼より、送られたと考えられる。沖ノ島の航海神祭祀は、高宮祭祀でも認められ、辺津宮社殿建立される8世紀後半まで行われていたとみる。

一方、和銅2年に筑前国御笠郡司として、「宗形部堅牛」が益城連姓を賜ったことが『続日本紀』にあり、北部九州での官人の活躍を知る具体例として注目される。さらに、玄界灘沿岸の嶋郡川辺里の戸籍、大宝2年(702)に宗形部を名乗る人の存在があり、6～7世紀の海上交通掌握に伴う海民の婚姻・移動の末裔とみることもできる。

以上のような、各段階を経て宗像氏の成長とヤマト政権の北部九州の地方政策が成し遂げられると考える。

#### 参考文献

青柳種信『筑前國續風土記拾遺』1864

安部裕久「弥生時代」『宗像史市 通史編』第1巻 考古・自然 宗像市史編纂委員会 1997

池ノ上宏「宗像における前方後円墳の終焉」 第43回埋蔵文化財研究会 1998

池ノ上宏・花田勝広「筑紫宮地嶽古墳の再検討」『考古学雑誌』85巻1号 1999

石山勲ほか『新原・奴山古墳群』福岡県文化財調査報告書 第54集 1977

- 伊藤彰「鐘崎と海人文化」『海と列島文化 玄界灘の島々』小学館 1985
- 貝原益軒『筑前國續風土記』1703
- 鏡山猛「甕棺累考」『九州考古学論攻』1972
- 亀井輝一郎「ヤマト政権と宗像」『宗像史市 通史編』第2巻 古代・中世郎 宗像市史編纂委員会 1998
- 木下良「律令制下における宗像郡と交通」『宗像史市 通史編』第2巻 古代・中世郎 宗像市史編纂委員会 1998
- 桑田和明『中世筑前国宗像氏と宗像社』岩田書院 2003
- 酒井仁夫ほか『久戸古墳群』宗像町文化財調査報告書 第2集1979
- 酒井仁夫・伊崎俊秋『今川遺跡』津屋崎町文化財調査報告書 第4集 1981
- 島田寅次郎「石器と土器・古墳と副葬品」『福岡県史蹟名勝報告書』13 1939
- 清水比呂之「縄文時代」『宗像史市 通史編』第1巻 考古・自然 宗像市史編纂委員会 1997
- 下山正一「釣川平野の発達史」『宗像史市 通史編』第1巻 考古・自然 宗像市史編纂委員会 1997
- 白木英敏『田熊石畑遺跡発掘調査概報』宗像市教育委員会 2009
- 白木英敏『江口海岸の縄文遺跡』「むなかた電子博物館」紀要第2号 2010
- 高橋章「鴻腫館系瓦の様相」『大宰府古文化論叢』下巻 吉川弘文館1983
- 田中正日子「律令支配体制の動揺と宗像」『宗像史市 通史編』第2巻 古代・中世郎 宗像市史編纂委員会1998
- 田中幸夫「筑前宗像郡釣川の遺跡」『日本先史土器論』1935
- 田中幸夫「北九州の縄文土器」『考古学雑誌』26-7 1936
- 田中幸夫「官幣大社宗像大社辺津宮と祭祀遺物」『考古学雑誌』28-1 1938
- 垂水 康・中村修身「宗像郡鐘ヶ崎（上八）貝塚出土遺物」『地域相研究』7号 地域相研究会 1979
- 垂水 康・中村修身「骨製耳飾りについて」『地域相研究』15号 地域相研究会 1984
- 筑紫野史学研究会編『浜宮貝塚調査概報』1971
- 津屋崎町教育委員会『宮司井手ノ上古墳』津屋崎町文化財調査報告書 第7集 1991
- 津屋崎町教育委員会『宮司大ヒタイ遺跡』津屋崎町文化財調査報告書 第8集 1993
- 津屋崎町教育委員会『在自遺跡群Ⅰ』津屋崎町文化財調査報告書 第10集 1995
- 津屋崎町教育委員会『在自遺跡群Ⅱ』津屋崎町文化財調査報告書 第11集 1996
- 津屋崎町教育委員会『須多田古墳群』津屋崎町文化財調査報告書 第12集 1996
- 津屋崎町教育委員会『在自遺跡群Ⅲ』津屋崎町文化財調査報告書 第13集 1997
- 津屋崎町教育委員会『勝浦北部丘陵遺跡群』津屋崎町文化財調査報告書 第14集 1998
- 津屋崎町教育委員会『練原遺跡』津屋崎町文化財調査報告書 第15集 1999
- 津屋崎町教育委員会『勝浦』津屋崎町文化財調査報告書 第16集 2000



- 津屋崎町教育委員会『津屋崎古墳群Ⅰ』津屋崎町文化財調査報告書 第20集 2004
- 中村修身「縄文時代大珠について」『地域相研究』11号 地域相研究会 1982
- 西日本文化協会『福岡県史 近代史料編福岡県地理全誌(二)』1981
- 橋口達也『石丸遺跡』宗像町文化財調査報告書 第4集 1980
- 橋口達也『新原・奴山古墳群』津屋崎町文化財調査報告書 第6集1 1989
- 波多野院三ほか『東郷遺跡群』日本住宅公団 1967
- 波多野院三『城ヶ谷古墳群』福岡教育大学歴史研究部考古学班 1977
- 花田勝広「筑紫宗像氏と首長権」『地域相研究 20』地域相研究会 1991
- 花田勝広「宗像郷土館の研究」『古文化談叢』30号(上)九州古文化研究会 1993
- 花田勝広「宗像郷土館の研究 幻の青銅武器をもとめて」『滋賀考古』14号 滋賀考古学研究会 1994
- 花田勝広「沖ノ島祭祀と在地首長の動向」『古代学研究』146号 古代学研究会 1999
- 花田勝広「筑紫宗像の生産工房」『田辺昭三先生古稀記念論文集』2002
- 花田勝広「古代・中世の宗像神社と宗像氏居館」『宗像考古』8号 2010
- 原俊一「古墳時代」『宗像史市 通史編』第1巻 考古・自然 宗像市史編纂委員会1997
- 原田忠昭・小川俊郎1955「福岡県宗像郡鐘崎上八貝発掘の人骨」『解剖学雑誌』30-3・4 1955
- 日野尚志「筑前国宗像郡の条里」『地理科学』8号1967
- 平田幸治「旧石器時代」『宗像史市 通史編』第1巻 考古・自然 宗像市史編纂委員会 1997
- 福岡町教育委員会『手光酒屋遺跡』福岡町文化財調査報告書 第10集 1996
- 福岡町教育委員会『福岡町史 通史編』2000
- 埋蔵文化財研究会『前方後円墳の終焉』第43回埋蔵文化財研究集会 1998
- 正木喜三郎『古代・中世 宗像の歴史と伝承』岩田書院 2004
- 松岡史ほか『福岡バイパス関係埋蔵文化財調査報告』福岡県文化財調査報告書 1973
- 宗像考古刊行会『田中幸夫と宗像郷土館』宗像郷土館考古資料調査報告 1994
- 宗像市教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概要』宗像市文化財調査報告書 第7集 1984
- 宗像市教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報告書』宗像市文化財調査報告書 第9集 1985
- 宗像市教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概要』宗像市文化財調査報告書 第10集 1986
- 宗像市教育委員会『大井三倉遺跡』宗像市文化財調査報告書 第11集 1987
- 宗像市教育委員会『久原遺跡』宗像市文化財調査報告書 第19集 1988
- 宗像市教育委員会『東郷高塚Ⅰ』宗像市文化財調査報告書 第21集 1989
- 宗像市教育委員会『名残Ⅱ』宗像市文化財調査報告書 第25集 1990
- 宗像市教育委員会『久原Ⅲ』宗像市文化財調査報告書 第26集 1990
- 宗像市教育委員会『名残Ⅳ』宗像市文化財調査報告書 第29集 1991

- 宗像市教育委員会『富地原川原田』宗像市文化財調査報告書 第39集 1994  
宗像市教育委員会『富地原神崎屋』宗像市文化財調査報告書 第41集 1996  
宗像市教育委員会『田久松ヶ浦』宗像市文化財調査報告書 第47集 1999  
宗像市教育委員会『田久瓜ヶ坂』宗像市文化財調査報告書 第46集 1999  
宗像市教育委員会『久原瀧ヶ下』宗像市文化財調査報告書 第48集 2000  
宗像市教育委員会『東郷登り立』宗像市文化財調査報告書 第51集 2001  
宗像市教育委員会『徳重本村』宗像市文化財調査報告書 第52集 2002  
宗像市教育委員会『桜京古墳』宗像市文化財調査報告書 第58集 2005  
宗像市教育委員会『田野瀬戸古墳』宗像市文化財調査報告書 第59集 2007  
宗像神社復興期成会編『宗像神社史』上巻 1961  
宗像神社復興期成会編『宗像神社史』下巻 1966  
宗像大社復興期成会編『宗像・沖ノ島』1979  
森貞次郎『北部九州の古代文化』明文社 1976  
柳澤一男『筑前』『前方後円墳集成 九州』前方後円墳研究会1991  
渡辺正気ほか「特集 古代の宗像」『歴史手帳』13巻9号 名著出版 1984

【資料】

## この瞬間、この感動、そして、想いを記録に 二回の写真展を終えて

平井正則（「北斗の水くみ写真展」実行委員長）

### 1.はじめに

「漆黒の闇に四三（しそう）の賽の目が煌く、激情の後にくる後悔と憤怒が櫂を握る若者の逞しい腕にかすかに残る・・・」舞台は大正時代、石炭ブームに沸く黒崎の小さな賭場で遊んだ若者は、手漕ぎの船で灯火の揺れる対岸の若松へ家路に急ぐ。深夜、波静かな洞海湾の上に広がる北の夜空に壮大な北斗七星が視界に入る。若者はきつと賭場で負けたに違いない。今でも眼に焼き付いた賽の目、夜空に展開する北斗の杓の四つの星、柄の三つの星、夜空の星がサイコロの賽の目に見えた。

火野葦平の小説に出てきそうな一場面。黒崎海岸から若松へ向かう小船から見ると、北の方向の空に低く北極星の下（南）をくぐる北斗七星。手漕ぎ船の櫂を握る漕ぎ手は船の進行方向を向くので、北の岸辺に続く低い夜空を見ることとなります。漕ぎ手の見る北斗の星の並びは眼の錯覚で信じられないほど雄大に見えます。これは内海で静かな洞海湾の水面のすぐ上に展開する星のドラマだったのです。現在、洞海湾には若戸大橋があり、明るい橋のイルミネーションで景色は一変しています。星の和名研究家「星座巡礼」の著者で知られる野尻抱影の「ふるさとの星名調査にある「北九州地方で北斗七星を『しそうのほし』と呼んだ」という報告にヒントを得ました。

星は絶えることなく生活者の心に刻まれた姿を記憶しています。星の情景があつて、人が居て成立するものです。むなかたの「北斗の水くみ」も“みずくみ”があり、“見る人”の心を得て物語は完成します。

人々の生活空間をこえ、半径6800キロもの地球が音もなく自転する姿を、人は夜空に輝く星の僅かな動きを確かめ、想像力を駆使して知ります。その作業を確かめるのが私達「北斗の水くみ写真展」の目的と言えます。

想いを込めた撮影者の写真を楽しんでいただいていたのはじめて写真展は完成します。応募作品として届けられた“世界でも珍しい”この地の情景をいつまでも記録にとどめ、愉しむために絵葉書にしようと提案しています。

## 2. 「北斗の水くみ写真展」の経過

2008年はじめての試みでした。北斗の水くみの撮影時間は、市街光の減る深夜に撮影条件がより良いであろうという判断から公募期間を7月1日～8月31日としました。2009年には撮影の機会を広げるため、締め切りを9月30日としました。

撮影方法や撮影の説明会は観望を兼ねて、2008年は7月18日第1回説明会、続いて8月7日夏休み中の説明会、8月29日締め切りに近い最後の説明会と3回行いました。前後2回は「道の駅むなかた」集合し、北側のさつき松原海岸で、8月は宗像市主催の大島夏祭りに合わせて行いました。2009年には写真公募期間は終わっていましたが、11月14日市民の方々と夕刻「北斗の水くみを眺める会」を主催しました。いずれも関心のある市民の方々に参加いただき、それなりに北の空の観望、北斗七星や季節の星座を楽しみました。2008年には4社の新聞の記事となり、2社のTV取材を受けTV放映されました。

2008年、ある社の新聞記事に対して星に詳しい読者から「世界でここしか・・・」は「“地中海近くでも水をくむ”のでは？だから記事は科学的でない！」という反論があり、「世界でも珍しい」と訂正せよとのご意見をいただきました。しかし、「水くみ」の条件について詳しい科学的説明を公開しておりますので、我々の趣旨を理解頂くことで留めました。

応募作品については「むなかた電子博物館」、さらには「北斗水くみ写真サイト」(<http://hokuto7.org>)に、作者のデータ、審査結果、総評などがアップされ、公開されています。応募点数は2008年15点（作者5人）、2009年13点（作者8名）でした。締め切り後、地元写真クラブ指導の先生、プラネタリウム学芸員、天文学者の大学教官と写真展委員により審査委員会を開催、芸術的、天文学的、写真技術的、市民の方々へのアピールなどの観点から優秀作品として各年2点、入選作品5点が選ばれました。すみやかに総評を付けて「むなかた電子博物館」に公表され、作品はプリントでも宗像市役所に公表されました。初年度の作品は福岡県青少年科学館などにも掲示させていただきました。いずれも力作でした。天候、深夜撮影など作者には苦勞の多い作業のようでした。また、審査の諸先生方には大変尽力いただきました。

写真撮影のQ&Aから一つ二つの話題を紹介します。

1) 簡単なデジカメの夜景モードでは星が写らないという質問がありました。デジカメ各社の夜間モードでは露出時間、絞りなど設定が決まっているため自動的に星が写りにくい？シャッターが開かない（カメラで予想した状況には夜空撮影のセットが準備されていない）などの問題があります。現在、委員会で検討中で

す。なお、できるだけ簡単にその瞬間を捉える工夫を考えたいと思います。

2) 公募期間中は深夜の「水くみ」なので、年配の方々は深夜海岸を撮影のために出かけるのは難しいという意見をいただきました。その点を配慮して、2009年は公募期間を一ヶ月延長しました。むしろ、皆さんと一緒に撮影する会を期間中に開催してはとも考えますが、開催日に天候が思わしくない場合開催の仕方をどうするか?ということもあって、現在私たちの次の宿題です。

### 3.二回の写真展で何が見えたか?

応募作品をみますと、単に北斗の傾いた写真というよりも、この地に特有の景色とか、撮影中飛行機の光跡を入れたり、はまゆうを背景とする北斗七星、地島、大島の島影の向こうの北斗七星、若干北よりの海老津海岸だったりと様々でした。いずれも撮影者の情感のこもった作品が多く見られ、カメラを向ける視点の面白さに感心させられました。

北斗七星を構成する星はほぼ2等星くらいの点光源です。北斗七星全体を写す画角では大気の低い空で星像は大きくなるのですが、それでも、デジタルカメラの焦点面ではせいぜい数ピクセルにしかなりません。結果的に七つの星は画像上で派手な星像には写らず、星が強調されません。そこで、クロス・スクリーン・フィルターを使う試みがあります。フィルターにより光芒が十字に光って、美しく強調されるはずですが、それには露出時間を延ばす必要があります。露出を伸ばすにはアマチュア天文家がしばしば使用する赤道儀による追尾撮影が必要です。しかし、静止撮影の場合と違って星を追尾すれば視野中心が動きますので静止している海岸の景色がぶれてしまいます。また、露出時間の延長で空が“がぶり”、船の灯火が写野に入れば明る過ぎて星を消してしまうなど種々の問題も起こります。

実際、応募に挑戦いただけた皆さんはもちろん、応募に至らなかった皆さんにはここに挙げた以上の困難があったことでしょう。

### 4.宗像海岸の夜空の明るさ

ここで作品のひとつに注目し、宗像北海岸の夜空の明るさを調べました。

第1図に撮影された星野写真(全体)と星図(左側の白い部分)を示します。

星図は写真の四角で囲んだ領域と同じ星図を白黒反転しています。四角内の星と左の星図を比較してください。星図では明るい星は大きく、暗い星は小さく描いています。星は点像ですが写真の露出時間内に大気のシーイングにより星は大きさをもったほぼ円形に写りますので、星図と同じように明るい星は暗い星より大きく写ります。星図は簡単には写真を再現しています。そこで写真を参考に写ってい



図1 限界等級

るぎりぎりの明るさの星を調べて空の暗さを測ります。なんだ！夜空の明るさなんて簡単だと思うかもしれませんが、実は、厳密には以下の難しい問題があります。

まず、測定の原理は星は空の明るさと同じ明るさで空に埋没して区別できません。だから、見える一番暗い星の明るさが空の明るさを測るものさしです。ここにちょっと複雑な事情があります。

星の明るさは点ですが、空の明るさは面積ですから（天文学では単位立体角当たりに空からくる光量を輝度とします。）広い面積の空を見るほど明るくなります。空を拡大するほど（写真のレンズや望遠鏡の焦点距離が長いほど）見る空の面積が狭くなり空は暗く写ります。一方、星は点光源ですから面積に関係なく暗い星ほど暗く写ります。今の場合、北斗七星全体を写す必要からカメラの焦点距離はほぼ一定で焦点面のピクセルに入る空の面積は一定です。

星には赤い星や青い星があります。写真は光の色によって感度が違います（感度の分光特性）。星の色と写真の色感度の組み合わせで星の写り方が変わります。デジカメはCCD（電荷結合素子）を使うので比較的赤い光に感度が高いのが普通です。CCDのピクセルサイズについてこれ以上詳しい事は省略します。

とにかく、写真と星図の比較からここではほぼ8.5等級（可視等級）の星まで写っ

ていると判断して左の星図を示しました。8.5等級という結果は地平線に近いために非常に明るい夜空ということになります。（もちろん、露出時間など撮影環境によりますが）

この結果から考えますと8.5等級の夜空では北斗七星のアルファ星（1番目）を簡単に2等級（実際は1.8等級）としますと、空の明るさが同じに写るには露出時間はほぼ400倍かかるという意味です。つまり、写真の露出時間が10秒だったとすれば1時間くらい露出すると写真は真っ白になる（完全に空が“かぶる”）という意味です。結論として、露出時間には十分余裕があることになります。まだまだ、撮影には一工夫できるということになります。以上が解析結果です。なお、解析資料には2008年の作品「シルエット」廣畑直樹さんのものを使わせていただきました。

2年間の撮影結果だけでは宗像の空の明るさの変化は分かりませんが、宗像北海岸の夜空は市街光の増加でだんだん明るくなっていくことでしょう。宗像市の大気の汚れて透明度が悪くならないようにと祈るばかりです。光害の原理とその実情については多くの作品が集まる頃、検討してみたいと思います。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1	1530	1328	1138	936	738	536	338	136	2334	2136	1934	1736
2	1526	1324	1134	932	734	533	334	132	2330	2132	1930	1732
3	1522	1320	1130	928	730	528	330	128	2326	2128	1926	1728
4	1518	1316	1126	924	726	525	327	124	2322	2124	1922	1724
5	1514	1312	1122	920	722	521	322	120	2318	2120	1918	1720
6	1510	1309	1118	916	718	517	318	116	2314	2116	1914	1716
7	1506	1304	1114	912	714	513	314	112	2310	2112	1910	1712
8	1502	1300	1110	909	710	509	310	109	2306	2108	1906	1708
9	1458	1257	1106	904	706	505	306	104	2303	2104	1903	1704
10	1455	1252	1102	900	703	501	302	100	2258	2100	1858	1700
11	1451	1249	1058	857	658	457	258	57	2255	2057	1855	1657
12	1447	1245	1055	852	655	453	255	52	2251	2052	1851	1652
13	1443	1241	1051	849	651	449	251	49	2247	2049	1847	1649
14	1439	1237	1047	845	647	445	247	45	2243	2045	1845	1645
15	1435	1233	1043	841	643	441	243	41	2238	2041	1838	1641
16	1431	1229	1039	837	639	437	239	37	2235	2037	1835	1637
17	1427	1225	1035	833	635	433	235	33	2231	2033	1831	1633
18	1423	1221	1031	829	631	430	231	29	2227	2029	1827	1629
19	1419	1217	1027	825	627	425	227	25	2223	2025	1823	1625
20	1415	1213	1023	821	623	422	223	21	2219	2021	1819	1621
21	1412	1209	1019	817	619	418	219	17	2215	2017	1815	1617
22	1407	1205	1015	813	615	413	215	13	2212	2013	1812	1613
23	1403	1201	1012	809	612	410	212	9	2207	2009	1807	1609
24	1400	1158	1007	805	607	405	207	6	2203	2006	1803	1606
25	1355	1154	1003	801	603	402	203	1	2200	2001	1800	1601
26	1352	1149	1000	758	600	358	200	2358	2155	1958	1755	1558
27	1347	1146	955	754	555	354	155	2353	2152	1953	1752	1554
28	1344	1142	952	749	552	350	152	2349	2148	1949	1748	1549
29	1340	-	947	746	548	346	148	2346	2144	1946	1744	1546
30	1336	-	944	742	544	342	144	2342	2140	1942	1740	1542
31	1332	-	940	-	540	-	140	2338	-	1938	-	1538
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

表1 北斗の水くみ早見カレンダー

## 5.便利な観察カレンダー

ここで今後の撮影のための簡単な「北斗の水くみ早見カレンダー」と「水くみ時刻ダイヤル」を作ってみました。ご利用ください。

表1は月日での水くみ時刻を03時13分なら313と、観察できる時期を見ます。7月4日水くみ時刻表から3時26分(326)ですが、3時28分にはすでに空が明るくなり(薄明終わり)観察できません。

1月から7月4日までは、空が明るくて(昼間に入って)北斗七星は見えません。また、11月14日の水くみ時刻は18時43分(1843)ですが、18時42分には日が沈

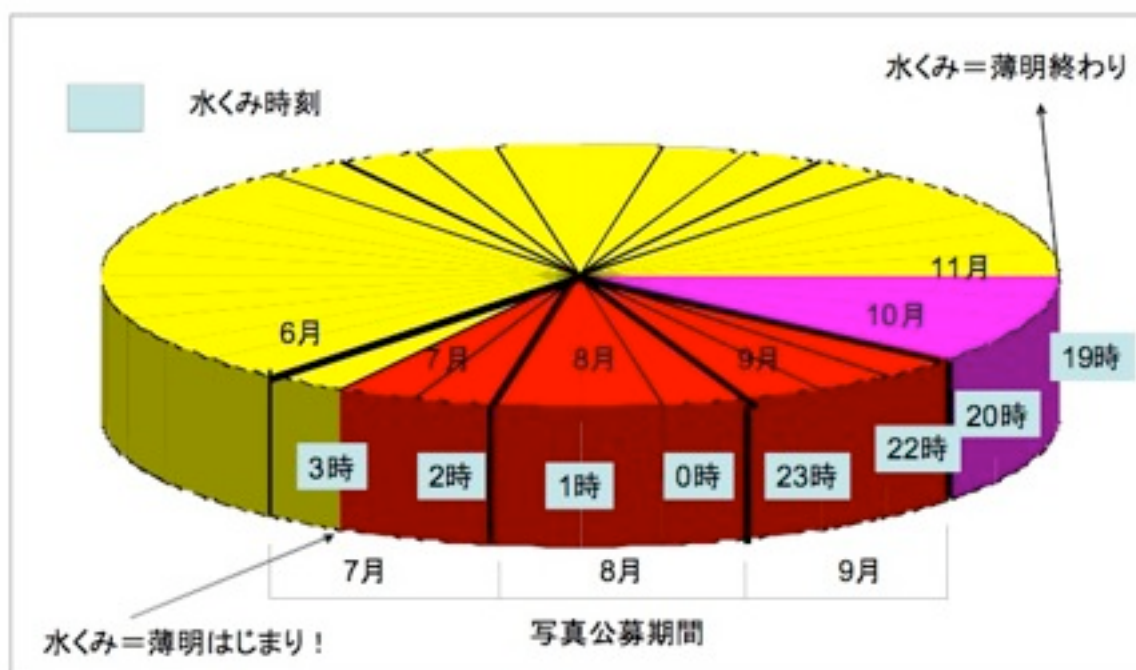


図2 北斗の水くみ時刻ダイヤル

んで暗くなります。この日以降(12月へ)は水くみは昼間になって北斗七星は見えません。

次年度は全国で見える北斗七星を並べて見てはともっていてもいます。そうすれば、宗像での北斗七星の特異な姿がより鮮明になるかも知れません。これから次回の写真展の企画立案が始まります。





## 【研究ノート】

## さつき松原遺跡の発見と海岸浸食

伊津信之介

2009年に発掘調査されたさつき松原遺跡は海岸浸食によって露出した。遺跡発見のきっかけとなった海岸浸食について我が国の状況を概観し、さつき松原海岸の復元の提案を行なった。

### 1.はじめに

2008年に発見され、2009年10月から11月に宗像市教育委員会によって発掘調査が行われたさつき松原遺跡は、さつき松原海岸の波打ち際から数メートルに位置し、海拔も2メートル程度である。この遺跡は縄文時代と推定されている。すると現在より数メートル海水準が上昇していた縄文時代には、この遺跡の場所は海水に覆われていたはずである。まず遺跡が海岸浸食によって露出した事実がある。そして遺跡が現在よりも数メートル高い位置になれば、土器片や生活痕が残るはずがない。

我が国における海岸浸食の経緯とその原因を考え、さつき松原海岸侵食の特徴と今後の対応について検討する。



図1 発掘現場

## 2.川は水が流れるだけではない

筆者は海岸の砂浜はどこから運ばれてきた砂で成り立っているのか、という調査で1980年代に、佐賀県の虹の松原に出かけたり、東海大学の調査船で駿河湾の海底に分布する礫（石ころ）の起源を調べるなど、水の流れの仕組みを解明しようとしてきた。

当時、駿河湾西岸の静岡市安倍川河口から三保半島にかけての久能海岸で、著しい海岸浸食が起こった。そのときにSBS静岡放送で、『海はおなかがすいている』という番組制作に関わり、河川の上流から海岸まで、水の役割を問い直した。

水はすべての元素を溶かし込み、地球表面を削り込み、美しい地形、荒々しい地形を作り、生命を育む魔法の存在である。その水の働きの一つに河川の浸食・運搬・堆積がある。海岸浸食の要因のひとつに、人の営みにより浸食・運搬・堆積の働きを阻害している事を上げなければならない。

江戸時代に武田信玄は、信玄堤（霞堤）を築いて釜無川の氾濫から甲府盆地を守った。加藤清正は、熊本平野に越流堤を築いて白川・菊池川を治めた。二人の治水には共通点がある。それは、河川の氾濫を封じ込めるのではなく、溢れた水を分散して地面に戻す方法である。地面に戻すために堤と合わせて、森林や竹藪を整備し、水に逆らわず、自然の性質を上手に利用したのが、信玄と清正の治水だ。これらの生き生きとした川の営みを、子どもから大人にまで見事に示したのが、富山和子の『川は生きている』（講談社・青い鳥文庫）である。

明治時代に来日したオランダの治水技術者デ・レーケが、石川県の常願寺川を見て「これは川ではない。滝だ！」と叫んだと云われている。確かに日本の河川は、降雨量が多く山岳地域から海岸線までの流域面積が狭いので、急流域の割合が高い特長がある。このような河川は浸食・運搬量が多い。したがって信玄・清正流の治水を行なわないと大変なことになる。その事例をかつての毎日新聞記者森薫樹が、1983年発行の「ドキュメント・ダム開発」（三一書房）でまとめている。

大井川水系の千頭ダムの堆砂率は、当時98パーセントだった。2000年度国交省の調べでも堆砂率は98パーセントに達する。20年間、千頭ダムは、約2パーセントの水しか貯水しないダムであり続けた。このように水力発電用のダムですら膨大な量の堆積物を貯め込む。全国の砂防ダムや、多目的ダムを合わせると、本来海に運ばれて砂浜を維持するはずの砂が、供給できていないことがわかる。

### 3.アジアの思想で水に流す

水に流す思想とは、自然と調和し、自然を維持しながら作りかえてゆく、あの耕して天に至るアジア大陸の思想である。明治維新によって、ヨーロッパの思想や技術が上滑りなまま定着し、日本の自然と調和的に発達してきた思想と技術はうち捨てられた。信玄の霞堤よりコンクリートの堤防の方が、土地利用には効率的である。しかし、コンクリートの堤防による水の流し方は、問題を下流へと先送りし、日本全国の海岸浸食を一層進めることとなった。

水に流す思想、禊（みそぎ）によって汚れを清める思想は、日本だけの特殊なものではない。世界の宗教は、水を神聖な儀式に用いている。インドでは、火葬にした灰をガンジス川に今でも流している。もちろん、河川や海洋の自然浄化力には限界があるので、限界を超えて水に流すことが出来なくなるのは、人口の増加と産業の発展がもたらす必然的結果である。私たちは「水に流す」際に、本当の哲学を持たなければならない時代を迎えた。それは、アジアの東のはずれにある我が国の、気候風土を反映させた哲学である。その哲学は縄文時代から1万年の歳月をかけて根付いてきたものなのである。2003年10月初めに哲学者梅原猛が北九州市立大学で開催された比較文明学会第22回大会において、「東アジアの哲学の語るもの」と題する特別講演を行った。

水に流す思想は、外部世界との行き来が難しい時代に、内部世界の調和を維持する思想哲学だった。外部世界との交流によって、我が国が成り立つようになった現代に、その思想哲学が普遍的でなくなるのは、自明なことである。我々は、水に流すことを問い直す時期に差しかかっている。

### 4.我が国の海岸浸食状況

2004年9月6日付けの宮崎日日新聞は、防潮林の流出が続いている宮崎県佐土原町下那珂の石崎浜と周辺の海岸が、台風16号による高波で新たに約400メートル浸食され、流出の総延長が約1450メートルに達したことを報じた。ふ化の時期を迎えたアカウミガメの卵も流出したとみられる。宮崎県中部農林振興局が9月に行った調査によると、石崎浜の約160メートルの松林が、幅2、3メートルにわたって浸食された。この区域は、6月の台風6号接近の際には被害を逃れた部分で、今回の浸食と台風6号で被災した区域と合わせると、南北約1200メートルがほぼ一直線上にえぐり取られた。さらに、同海岸から約2キロ北側の同町大炊田地区の海岸線に接する防潮林が、南北約250メートルにわたって削られているのも見つかった。二カ所の総延長約1450メートルは、佐土原町の海岸線全域の約4分

の1にも達する。

1980年から始まった駿河湾静岡県久能海岸の侵食は、1981年夏台風の高波で一挙に砂と砂利で構成された海岸を失った。静岡市に流れ込む1級河川の安倍川河口から始まった浸食は、次々と海岸を浸食し、天女が羽衣をかけたと言われる羽衣の松がある三保海岸をも削った。

海岸浸食については、1956年発行の海上保安庁水路部報告で「函館大森海岸付近の海岸浸食」についての詳細な報告がまとめられており、日本の敗戦と共に海岸浸食への取り組みが始まったことを示している。この調査研究は、1947年に計画と準備が開始され、1959年の調査報告刊行まで約10年の歳月を要する長大なプロジェクトであった。この報告によると、福岡県宗像郡神湊町江口付近の浸食延長0.26Km、全国の海岸線(1,146.3km)の5%(22.549km)、約500箇所ですでに海岸浸食が認められている。それから50年、我々の取り組みがいかに弱かったかを近年の浸食の著しい進行に接するとき痛感するものである。



図2 さつき松原海岸の離岸堤と消波ブロック

海岸浸食は、防波堤の建設で潮流や波の動きが変化したり、ダム建設や河川改修によって上流からの土砂供給が減少したりして起きる。九十九里浜（千葉県）や一ツ葉海岸（宮崎県）、三保松原周辺の清水海岸（静岡県）など全国で多発しており、ウミガメの産卵にも影響を与えている。平成16年度版環境白書によると、海面が30cmまたは100cm上昇した場合、現存する砂浜のそれぞれ57%、90%が消失すると見込まれている。現在でも浸食の進んでいる日本の海岸は、海面の上昇により、更に深刻な影響を受ける。

従来の浸食防止策は、海岸沿いに消波ブロックを積み、離岸堤を築く工法が主

流だ。しかしこれだけでは浸食により失われた海岸を維持する事はできない。特に消波ブロックの設置は自然海岸の景観を全く失う。そこで「養浜」（ようひん）と呼ぶ工法が一般化しつつある。これは離岸堤の設置に合わせて、失われた砂と同質の砂を海岸に人工的に供給するものである。養浜に用いる砂を確保することは大変困難である。しかし「さつき松原」海岸には古い時代の海岸地形が古砂丘として残されている。ここには養浜に必要な同質の砂が分布する。

しかし宗像市内の古砂丘は農地改良などの名目で乱開発されている。できるだけ早く古砂丘の砂採取を禁止し、国や県と共同で古砂丘の砂を海に戻す試みを始める必要がある。さつき松原海岸の一部を除き、まだ養浜可能な状況にある。しかし一刻も早い取り組みが行政機関に求められる。



3図 玄海ゴルフ場近くの標高約40mにまで分布する古砂丘

## 5.海はおなかが空いている

「『唐津砂 ブランド』価格以上の高品質で人気」という見出しの記事が、2010年4月6日付毎日新聞に掲載された。この記事によると2008年度経済産業省によると、九州・山口・沖縄の海砂の採取量は1146万立方キロメートルに達し、なんと全国採取量1193万立方キロメートルの90%になる。中でも福岡県の採取量は352万立方キロメートルと飛び抜けている。九州北部・西部の福岡県、佐賀県、長崎県の海砂採取量は、748万立方キロメートルで全国採取量の63%に達する。この地域の砂は花崗岩に由来するもので、石英や長石を主体とした硬質の白砂である。真水で洗浄して塩分を取り去れば、コンクリートの骨材として高値で取引され

る。高層ビルの林立する都市は、九州地域の砂を材料に増殖を続けていることになる。

かつて我が国では河川砂採取によって河口付近の海岸浸食が問題となり、河川砂の採取は禁止された。それでも海岸浸食が進行する九州北部・西部で海底の砂が採取され続けている。まさに海は人が砂を横取りするおかげで、おなかが空いている。

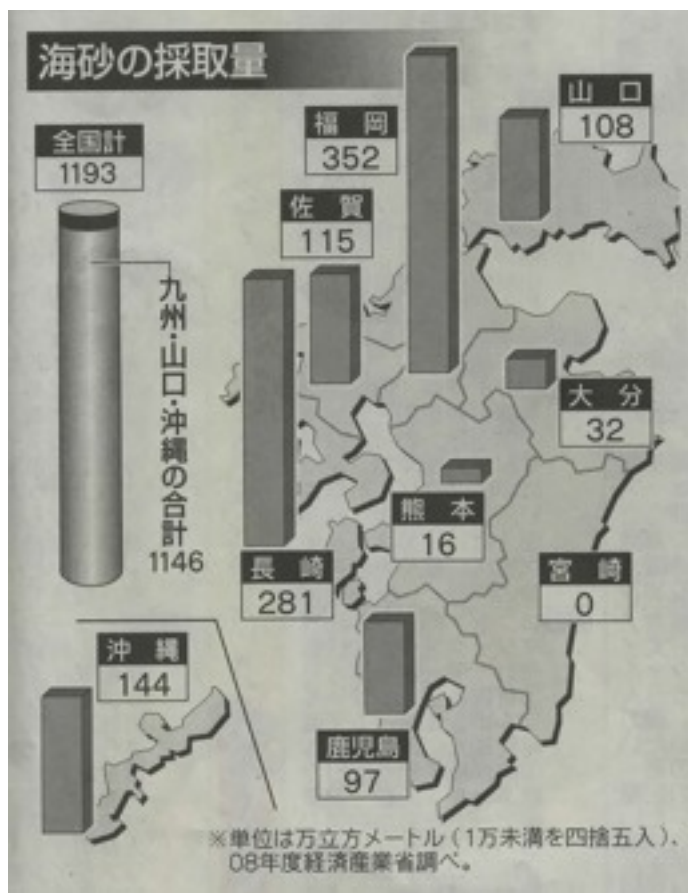


図4 九州沖縄の海砂採取量(毎日新聞)

### 参考文献

- 富山和子.川は生きている.講談社(青い鳥文庫).1978
- 森薫樹.ドキュメント・ダム開発.三一書房.1983
- 田中彰.脱亜の明治維新.NHKブックス.1984
- 梅原猛.東アジアの哲学の語るもの.比較文明学会第22回大会講演.2003
- 樋口清之.日本人はなぜ水に流したがるのか.MG出版.1989
- 小向良七.函館大森海岸付近の海岸浸食.海上保安庁水路部報告第13巻.1956





【実践ノート】

## むなかたの弥生時代の人々の暮らし ～田熊石畑遺跡出土の武器型青銅器「銅戈」をつくろう～

鎌田 隆徳

### 1.はじめに

子ども達の夏休みに宗像の歴史を学ぶ会の主催で、子ども達を対象にした「むなかたの弥生時代の人々の暮らし～田熊石畑遺跡から出土した銅戈（どうか）をつくろう～」の講座をおこなった。

講座では、平成20年4月からの田熊石畑遺跡の発掘調査でわかってきた「宗像の弥生時代の様子」について話をし、出土した武器型青銅器の鋳型・鋳造という青銅器づくりの工程を模して木型とブロンズ粘土を使って「銅戈づくり」を試みた。



### 2.田熊石畑遺跡から出土した武器型青銅器

田熊石畑遺跡の発掘調査で今から2,200年前の弥生時代中期初め頃と思われる9つの墓（木棺墓）が発掘された。墓の中から葬られた人に添えられた武器型青銅器が出土した。その数は1号墓の5本をはじめとして合計15本出土した。九州の弥生時代の遺跡から出土した数としては最多である。

武器型青銅器は、中国から稲作とともに伝わってきたもので、その種類は、銅剣・銅矛・銅戈の三種類ある。（はじめは実戦的なものから後はお祭りのものへと用途が変わっていく。）

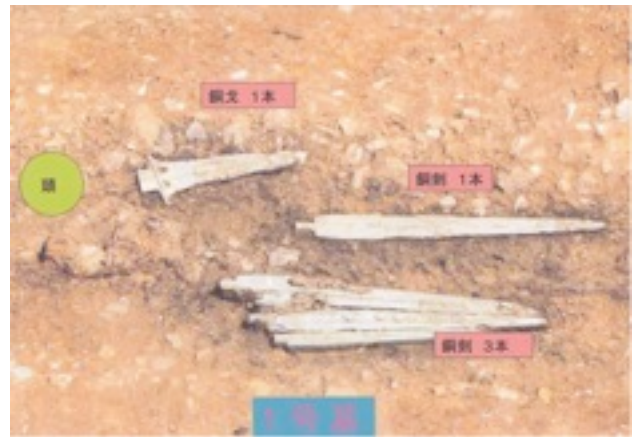


これらの武器型青銅器は、特別な者・権力者だけが持つことができるもので、権威の象徴であった。

これまで宗像地域での弥生時代については 稲作は早くより伝わっていたが（2,300年前、東郷登り立遺跡）、弥生の人々の小さなムラ々があったにすぎないと考えられていた。

ところが、多くの武器型青銅器が出土したことによって、弥生時代中期始め頃には、宗像地域においても北部九州でトップクラスの有力者がいてムラ々をまとめクニとして治めていたことがわかった。

宗像地域の弥生時代中期頃の様子とともに北部九州全体の弥生時代の社会の様子が見直されることにもなった。



### 3. 「銅戈」のレプリカをつくる

力をもつ者しか持つことができなかつた武器型青銅器をつくろう

武器型青銅器の作成は、鑄型（いがた）を二つ合わせ、湯口から高温で溶かした青銅（銅とすず）を流し込み、固まったところで、鑄型を外して磨きをかけて仕上げていくという工程で行われている。

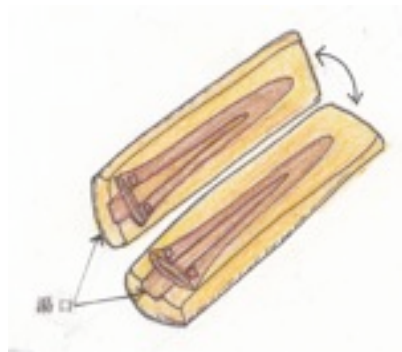
実際、青銅を溶かしての鑄造はできないので、鑄型は木型、青銅はブロンズ粘土を使用する。

田熊石畑遺跡で最初に発見された記念すべき1号墓の武器型青銅器5本（銅剣4本、銅戈1本）のうち「銅戈」をつくる。

- (1) 材料 ・ブロンズ粘土※1 ・木板※2
- ・竹へら ・銅戈の実測図

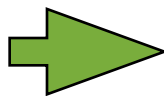
(※1) ブロンズ粘土は、色がブロンズ色で強く固まる。半乾きの時磨きをかけると光沢がきれいにでる。

(※2) 木板は、桐材がやわらかくて彫りやすい。



#### 3-1. つくり方

**3-1-1. 木型づくり**：木板に原寸大の銅戈の図面（実測図）を写し取り、彫刻刀で彫り込み型をつくる。（木型は、事前に作成）



**3-1-1**



**3-1-2.**ブロンズ粘土を木型に練り込んでいく。

**3-1-3.**しっかり練り込んだら、型から粘土をはがす。

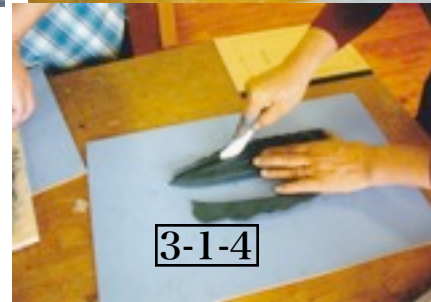
**3-1-4.** はがしとったら、型にそっていらぬ粘土をヘラで取り除く。

**3-1-5.** 形を整える。(2つの□の穴は割り箸であける。)

**3-1-6.** 形ができ

あがったら板に張り付けて完成だ。(出土した時の状態)

なお、上記の順で型どりしたもの2つ合わせ接合すれば両面の銅戈ができる。



#### 4.おわりに

私は、子ども達を対象とした郷土史講座では、「郷土の歴史を楽しく学ぶ」ことをもとに、当時の人々が使っていた道具をさわる、つくる、つかってみるなど五感を通した体験活動を入れるようにしている。

そして、体験によって子ども達が歴史に興味や関心を持ち、先人の気持ちを感じ、知恵や工夫について考えていくことを学び取らせていきたいと思っている。

講座の銅戈づくりにあたって、「宗像歴史を学ぼう会」の平松秋子さん、辻洋子さん、石村陽子さんには準備などご協力をいただいたことに感謝する。

(2009年7月19日 宗像中央公民館にて実施)

#### 参考文献

白木英敏「田熊石畑遺跡発掘現場から」「むなかた電子博物館」紀要1号.2009

【資料】

## 文献にみる宗像三女神降臨伝承について

平松秋子

### 1.はじめに

宗像大社は田島に古くからあり宗像神社といわれていた。現在、全国の6200余りの神社で分祀がおこなわれている。宗像地域の人々の信仰も厚く、交通安全の神様として近郷からの参拝者も多い。

玄界灘に浮かぶ絶海の孤島・沖ノ島には沖津宮が、神湊（こうのみなど）から渡船で20分ほどの福岡県最大の島、大島には中津宮が、本土、田島には辺津宮がある。三宮を合わせて宗像大社といい、それぞれに祭神として女神が奉られている。沖津宮の田心姫神、中津宮の湍津姫神、辺津宮の市杵島姫神である。

毎年10月1日には三人の女神の御霊が船に乗り、お伴の数百隻の漁船を従えて海上を進み、辺津宮で一同に会するという祭事「みあれ祭」が行われる。

海の正倉院ともいわれる沖ノ島では、昭和29年から3次にわたって調査が行われ、古墳時代の4世紀後半から、遣唐使の廃止される9世紀頃にかけての祭祀遺跡が発見され、出土した遺物のうちおよそ8万点が国宝に指定された。ペルシャ製のカットグラスや唐三彩、金銅製龍頭など、国際色豊かなものである。なぜ沖ノ島にこのように貴重な品々が納められたのだろうか。それについての文献はない。

中国や朝鮮諸国からの文化は海上交通によって人々が行き来してもたらされる。玄界灘の只中にある沖ノ島は半島への航路である海北道中の真ん中で、宗像海人族はこの広い海域を治め、沖ノ島を御神体として崇めていた。

当時の大和朝廷にとって、国家の威信にかけて大陸文化の導入は不可欠であった。朝鮮半島や、大陸との交渉をするにあたり宗像の神の助けを借りることが必要となった。その後、沖ノ島では国家的な祭祀が執り行われた。

宗像の神から、律令国家の進める政策に必要な国の神として、天皇の奉りごとを助けるために宗像三女神は道中に降臨されたと『日本書紀』にある。この宗像三女神の降臨伝承について古代から現代までの文献を調査した

## 2.古代の三女神の出現と鎮座に関する文献（奈良・平安時代まで）

古代のその当時のものは残っていない。後世になって書写されたものや木版本として伝わっている。

### 2-1.『古事記』

天武天皇の時代に立案され712年元明女帝の時代に完成した。編纂に加わったのは、太安万侶と、舎人・稗田阿礼であった。稗田阿礼が口述する『帝紀』『旧辞』を太安万侶が筆で書きしるした。上、中、下、全3巻で物語風の歴史書である。推古天皇までが記録されている。表記は日本漢文体でなり、オオクニヌシを中心とした出雲神話が中心で、氏族の系譜もあり、上巻には次のような記事がある。

#### 『古事記』 上（要略）

「故爾（かれここ）に各（おのもおのも）天安河（あめのやすかは）を中に置き、宇気布（うけう）時に、天照大御神、先づ建速須佐之男命（たけはやすきののみこと）の佩（みは）かせる十拳劔（とつかのつるぎ）を乞ひ度して、三段に打ち折りて、奴那登母母由良（ぬなとももゆら）に、…天の眞名井に振り滌ぎて、佐賀美邇迦美（さがみにかみ）て…

吹き棄つる氣吹の狭霧に成りませる神の御名は、多紀理毘賣命（たきりびめののみこと）、…亦の御名は奥津嶋比賣命（おきつしまひめののみこと）と謂（まを）す。次に市寸嶋比賣命（いちきしまひめののみこと）、亦の御名は狭依毘賣命（さよりびめののみこと）と謂す。次に多岐都比賣命（たきつひめののみこと）。…多紀理毘賣命は、甕形の奥津宮（おきつみや）に坐（ま）す。次に市寸嶋比賣命は、甕形の中津宮に坐す。次に田寸比賣命は、甕形の邊津宮（へつみや）に坐す。此の三柱の神は、甕形の君等が以ち伊都久三前の大神なり。…

故此の大國主神、甕形の奥津宮に坐す神、多岐都比賣命に娶ひて生みませる子、阿遲鉏高日子根神（あぢすきたかひこねのかみ）。次に妹高比賣命、亦の名は下光比賣命。此の阿遲鉏高日子根神は、今、迦毛大御神（かものおほみかみ）と謂す者なり」（宗像神社史より）

概略は次のとおりである。宗像三女神は天安河で素戔鳴尊と天照大神の誓約より素戔鳴尊の劔を物実として誕生した。多紀理毘賣命は奥津宮に、市寸嶋比賣命は中津宮に、田寸比賣命は邊津宮に座す。この三柱の神は宗像の君等が奉る神である。大國主神は奥津宮に坐す神、多岐都比賣命を娶り二神が生まれた。と、三女

神の誕生の様子が書かれている。

## 2-2. 『日本書紀』

中国の歴史書に倣った正史である。720年、元正天皇の時代に完成した。全30巻と系図1巻がある。『古事記』と同じく『帝紀』『旧辞』が資料となっている。

川嶋皇子、忍壁皇子、天武天皇の皇子・舎人親王等が制作に関わり、完成させた。持統天皇までを載せ漢文体で天皇の系譜を載せる。後に『続日本紀』797年、『日本後記』840年、『続日本後記』が869年に完成している。三女神の出現と鎮座については次の記事がある。

### 『日本書紀』 一神代上 (要略)

「是に天照大神、乃ち素戔鳴尊の十拳劔を索ひ取、打ち折りて三段に為し、天真名井に濯ぎ…さがみに咀嚼みて、…吹き棄つる氣噴の狭霧…に生まるる神を、號けて田心姫と曰す。次に湍津姫。次に市杵嶋姫。凡て三(みはしら)の女(ひめがみ)ます。…此即ち、筑紫の胸肩君等が祭る神、是なり。

一書(あるふみ)に曰く、日神…先づ所帯(みはか)せる十握劔を食して生す兒(みこ)を瀛津嶋姫(おきつしまひめ)と號く。また九握劔を食して生す兒を湍津姫と號く。また八握劔を食して生す兒を、田心姫と號く。凡て三の女神ます。…乃ち日神の生せる三の女神を以ちて、筑紫洲(つくしのくに)に降りまさしむ。因りて教へて(のたま)はく、「汝三(いましみはしら)の神、宣しく道の中に降り居して、天孫を助け奉りて、天孫に祭かれよ」と。

一書に曰く、…天照大神、則ち八坂瓊の曲玉を以てち、天真名井に浮寄せて、瓊の端を嚙ひ断ちて、吹きつる氣噴の中に化な生る神を、市杵嶋姫命と號く。是は遠瀛(おきつみや)に居します者なり。また瓊の中を嚙ひ断ちて、吹き出つる氣噴の中に化な生る神を田心姫と號く。是は中瀛(なかつみや)に居します者なり。また瓊の尾を嚙ひ断ちて、吹き出つる氣噴の中に化な生る神を湍津姫と號く。是は海濱(へつみや)に居します者なり。凡て三の女神ます。

一書に曰く、…日神、先づその十握劔を食して化あ生れます兒、瀛津嶋姫命、亦の名は市杵嶋姫命。また九握劔を食して化な生れます兒、湍津姫命。また八握劔を食して化あ生れます兒、田霧姫命。…即ち日神の生れませる三の女神を以ちて、葦原中國の宇佐嶋に降り居さしむ。今、海の北の道の中に在す。號けて道主貴(みちぬしのむち)と曰す。此れ筑紫の水沼君等が祭る神、是なり」(宗像神社史より)



天照大神は、素戔鳴尊の十拳劔を三つに折って天真名井で振りすすぎ、噛み砕き吹き棄てた。その気噴のなかから田心姫、湍津姫、市杵嶋姫が生まれた。三女神は葦原中國の宇佐嶋に降り居ます。今、海北道中にあり、道主貴と曰す。筑紫の水沼君等が祭る神である。

### 2-3. 『風土記』

『風土記』は713年元明天皇の詔で作成された。諸国の産物や伝説・郡郷の名・地名の由来などについて記載されている。『風土記』と呼ばれるようになったのは平安時代からで、現存するのは、出雲、播磨、常陸、肥前、豊後の5風土記のみである。

西海道風土記には、筑前国、筑後国、豊前国、豊後国、肥前国、肥後国、日向国、大隈国、薩摩国、の9風土記があるとされるが現在では『肥前国風土記』、『豊後国風土記』の2風土記が残っているのみである。

「風土記逸文」とは、風土記にある記述の1部分を、他の書物で引用した文をいう。宗像は筑前国に入るので風土記は現存しない。しかし、中世文書『宗像大菩薩御縁起』（鎌倉末期頃）には「西海道風土記云」という記載があり、『風土記』の内容を伝えるものであるとされる。本文と一傳（裏書きの部分）に記述があり三女神の降臨について書かれている。

「西海道風土記逸文」（要略）

「西海道風土記に云く、宗像の大神、天より降りまして、崎門山に居ましし時、青蕤の玉を以ちて沖宮（おきつみや）の表に置き、八尺蕤の紫玉を以ちて中宮の表に置き、八咫の鏡を以ちて邊宮の表に置き、此の三つの表を以ちて、神體の形と成して、三つの宮に納め置きたまひて、即て隠りましき。因りて身形の郡と曰ひき。○

一は云く、天神の子四柱あり。兄三柱の神、弟大海命に教へて曰はく、汝命は、吾等三柱の御身の像として、此の地に居るべし、と。便ち一前（ひとはしら）は奥宮に居し、一前は海中に居し、一前は深田村の高尾山の邊に居す。故號て身像郡と曰う。云々

後の人、改めて宗像と曰う。其の大海命の子孫は、今の宗像朝臣等、是なり、云々」

（宗像神社

史より）

『古事記』『日本書紀』とは異なり、宗像の神、天より降りて崎門山に居る時、玉と鏡を神體の形として三宮に納めたことにより身形郡という。とある。

「一に、天神の子は四柱で兄弟である。兄三柱は奥宮、海中、深田村高尾山に居す。名付けて身像郡という。」後の人改めて宗像という。その弟・大海命は今の宗像朝臣である。

「 」の中の文字は、昭和30年の調査で見出された朱書された裏書の一部分である。「西海道風土記云」と書かれた文字の裏の紙面に朱筆の裏書きが4行あり、○の部分に挿入することによって、逸文として完全となると『宗像大社文書』には記述されている。

以上の文献にある鎮座地伝承を表にまとめると次のようになる(表1)

- ・ おおまかな場所をいう(海中など)
- ・ 3箇所的位置を示す(海濱など)
- ・ 地名を示す(崎門山など)

古事記	日本書紀 第1の1書	日本書紀 第2の1書	日本書紀 第3の1書	西海道風土記 逸文の本文	西海道風土記 逸文の一傳
	筑紫洲の道中				
			葦原中國宇佐 嶋、海北道中		
胸形之奥津宮		遠瀛		奥宮	奥宮
胸形之中津宮		中瀛		中宮	海中
胸形之邊津宮		海濱		邊宮	深田村高尾邊
				崎門山	

表1 古典にあらわれた鎮座地伝承表(宗像神社史より)

### 3. 中世の文書に見る三女神伝承(鎌倉・南北朝・室町・安土桃山)

#### 3-1. 『宗像大菩薩御縁起』

『宗像大菩薩御縁起』については『宗像大社文書』に次のように説明されている。「九州北部の宗像の地に根拠地を定めた宗像氏が、その祖先神としての宗像神が長い歴史のなかでどのような経緯によって現在の地位をしめ、どのような神徳を具備するに至ったかを説明するために、日本神話の伝承とのかかわりを通して作成した縁起である。」

『宗像大菩薩御縁起』は後の時代の文書に「宗像社記」として引載されている。成立は鎌倉時代末から南北朝時代の初め頃である。前4ページに述べたとおり「西

海道風土記云」という記述があり、宗像氏によるはるか上代からの伝承として良く知られており、それが御縁起によって今日まで伝えられたと考えられている。現在、写本三点が伝わっている。

### 3-1-1.鎌倉末期から南北朝時代にかけての写本

宗像大社が所蔵する実物古写本（原本を書写したもの）で重要文化財に指定されている。卷子本一巻で、紙本墨書、縦28, 8cm、罫線を施し本文が書かれている。御縁起の成立とほぼ同時期に書写されたものであろうとされる。現在『宗像大社文書』として影印板（写真複写で製本されたもの）が発行されている。（図1）

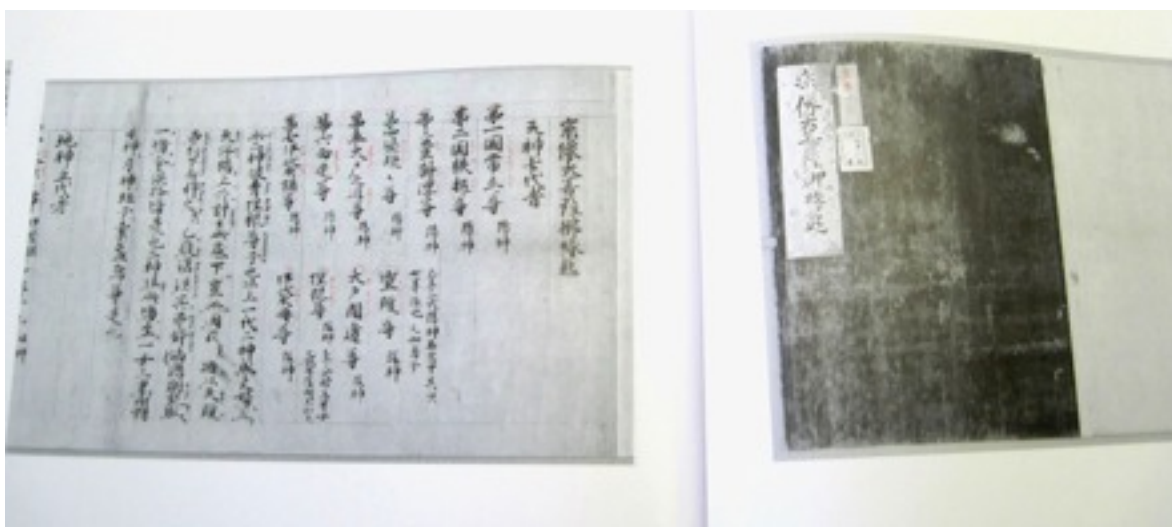


図1 『宗像大菩薩御縁起』巻頭（宗像大社所蔵 藤本健八撮影・宗像大社文書より）

### 3-1-2.戦国時代初期の写本

一般に流布している文安元年（1444年）の写本である。宗像大社が所蔵しているものである。袋綴じ1冊、縦26.2cm、横19.8cm、楷書、奥書に筆者 釋氏會周の名前がある。実物古写本の紛失の用心のために書写したことが記入されている。。（図2）



図2 文安元年 釋氏曾周書写 宗像大社所蔵（宗像神社史より）

### 3-1-3.安土桃山時代末期の写本

宗像大社の舊神宮寺である鎮国寺が所蔵する一卷である。天正20年（1592年）僧・豪詮は社家の多くの古本の中から文安元年本を選んで書写した。その写本が鎮国寺に現在まで伝えられている。（図3）

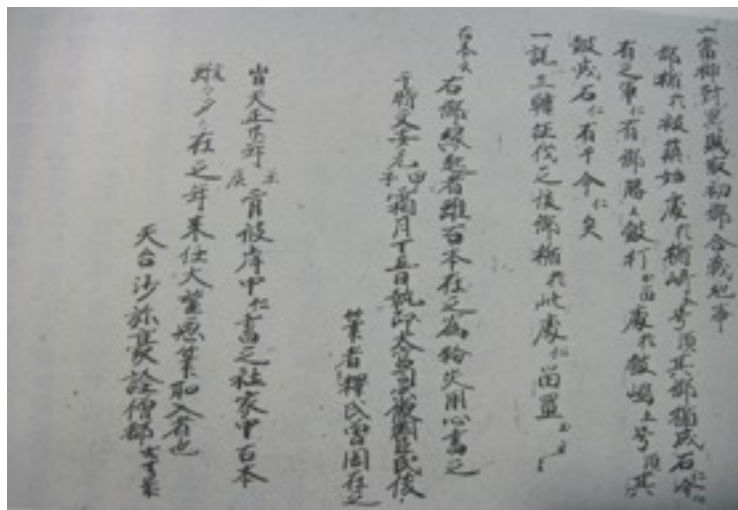


図3 鎮国寺所有の写本（宗像神社史より）

### 3-2.実物古写本の巻末の一紙について

宗像大社所蔵の実物古写本には次のような内容が書かれている。(図4)

「三所大菩薩最初御影向地事 室木六ヶ嶽に御着、神興村に着きたまう。この村において初めて神威を…その後、三所の霊地の御遷座あり云々」

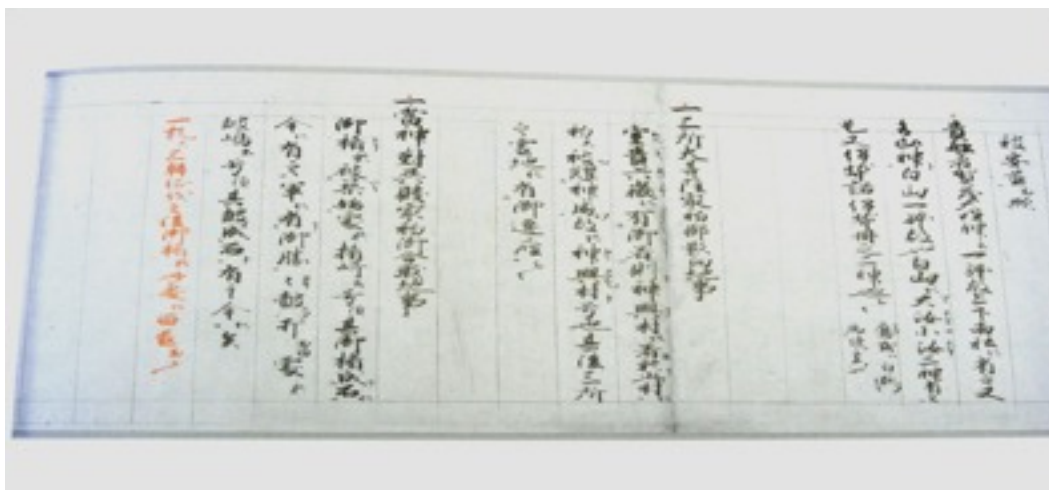


図4 実物古写本の巻末の一紙 宗像大社所蔵 藤本健八撮影(宗像大社文書より)

この料紙に書かれた部分は、原本の書写が完了した後日に別の紙を貼り書き加えたものであろうとされる。完成した本文を改めて読み直してみた選者が、なぜこの部分を追加しなければならなかったのだろうか。

中世、神仏習合がなされて体制が複雑化してきた時代に、宗像社家にとって鞍手の室木・福間の神興村は、祭祀を行うにあたって、地勢上からも重要な地域であったことを説明しようとして試みたものであろうとされる。この経緯については宗像神社史に詳細に記載されている。

## 4.江戸時代から明治までの主な文献（風土記逸文掲載）

- |            |        |      |
|------------|--------|------|
| ・『宗像記追考』   | 沙弥宗仙   | 1617 |
| ・『宗像三社縁起』  | 貝原益軒   | 1704 |
| ・『筑前国続風土記』 | 貝原益軒   | 1709 |
| ・『瀛津島防人日記』 | 青柳種信   | 1794 |
| ・『古事記傳』    | 本居宣長、他 | 1822 |
| ・『太宰管内志』   | 伊藤常足   | 1841 |

## 5. 近代の主な文献（明治・大正・昭和・平成時代）

- ・『西海道風土記逸文新考』 井上通泰 1935
- ・『古事記 祝詞』 日本古典文学大系 倉野憲司・武田祐吉 1958
- ・『宗像神社史』 上・下巻 宗像神社復興期成会 1961
- ・『日本書紀』上・下 日本古典文学大系 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋 1967
- ・『鞍手町誌』上巻 鞍手町誌編纂委員会 1974
- ・『福岡県神社史』（復刻）上・中巻 （財）大日本神祇会福岡県支部 1988
- ・『宗像市史』 通史編 第1巻 自然・考古 宗像市史編纂委員会 1997
- ・『古代・中世宗像の歴史と伝承』 正木喜三郎 2004
- ・『宗像大社文書』 第三巻 宗像大社文書編纂刊行委員会 2009

## 6. 現代の三女神信仰

### 6-1. 鞍手町の現状

『鞍手町誌』には次のように記載されている。

「古事記、日本書紀にある日本神話が大和朝廷をもとに作られたのは明らかである。

古代宗像族は出雲族とも交渉があったとみえて、大国主命は宗像三女神の一人と結婚して二神を授かっている。宗像神話は、大和朝廷が宗像神社周辺にいた宗像族を優遇してその海上権を認めた神話であろう。宗像族と鞍手族は山一つ越えて古くから交渉があったから、その神話伝説もお互いに錯綜している。

鞍手神話は六ヶ岳神話といってもよい。私達の祖先は六ヶ岳に宗像の女神が天降ったと考えていた。山麓の六嶽神社の祭神はもちろん三女神である。土地の人は三柱様とよんでいる。筑前国風土記逸文には「宗像の大神、天より降りて崎戸山に居りましし時……」とある。崎戸山は六ヶ岳のことである。宗像神社末社記には前戸神社とある…室木は天正（1573～92）の田畠指出帳までは宗像郡に入れり」

六ヶ岳とは、その名のとおり6つの山が連なっている。朝日岳は標高339メートルで一番高い。実際に登ってみたが頂上は360度見渡すことができるほど見晴らしが良く、南側からは英彦山・福知山の山並みが、北側からは遠賀、芦屋、玄界灘

まで一望できる。晴れた日には遠く宗像の新立山と城山の間の中津宮のある大島が見えるという。その他、天冠岳、羽衣岳、崎戸岳、出穂岳、高祖岳がある。

写真は筆者が朝日岳山頂から遠く玄界灘の方向を撮映したものである。(図5)



図5 六ヶ岳・朝日山頂より玄界灘方向の展望

六嶽神社境内の様子を図6・図7に示す。



図6 六嶽神社本殿



図7 由来を示す案内板

## 6-2.福岡県神社誌

『福岡県神社誌』上・中巻に載る鞍手郡近郊の三女神を奉る神社を下記の表2に示す

神社名	所在地	祭神	境内神社	攝社
①天照神社（県）	鞍手郡宮田町大字磯光字儀長		湍津姫神	
②六獄神社（郷）	西川村大字室木字下方	田心姫命 湍津姫命 市杵島姫命		
③若宮八幡宮（郷）	若宮村大字水原字假屋		嚴島神社 （宗像三神）	
④劔神社（村）	古月村大字木月字片原		神嚴島比賣神社 （嚴島比賣神）	
⑤劔神社（村）	西川村大字新延字火尾	宗像三女神		
⑥須賀神社（村）	小屋瀬町大字小屋瀬字本町東		嚴島神社 （市杵島姫神）	
⑦嚴島神社（村）	宮田町大字上大隈字二反田	市杵島姫尊		
⑧日吉神社（村）	吉川村大字下字高宮	五男三女大神		日原神社 （大国主命）（市杵島姫命） （大山祇命）
⑨日原神社（村）	吉川村大字犬鳴字下り谷	市杵島姫命		
⑩王子神社（村）	直方市感田字八つ辻	市杵島姫命 多紀理姫命 多紀津姫命		
⑪嚴島神社（県）	嘉穂郡颯田村大字鹿毛馬字宮	市杵島姫命 田心姫命 湍津姫命		

表2 福岡県神社史 神社統計表（昭和15年11月現在）

	官国幣社	県社	郷社	村社	無格社	合計
宗像郡	3	3	1	53	199	257
鞍手郡	0	1	3	46	192	242
直方市	0	2	1	6	31	40
嘉穂郡	0	5	6	93	193	297

昭和15年当時、鞍手には村社以上が50社あり、そのうち9社に宗像三女神が奉られている。これは約1割にあたる。（すべてが三女神ではなく、一神、二神の



場合も入れた)

宗像三女神を信仰し祭祀する神社はその後鞍手地方に根付き、現在まで脈々と続いている。

## 7.まとめ

宗像三女神の降臨伝承について文献を調査した。また、文献に記載されている鞍手町を訪ねて現地調査を行った。

古代の文献である『古事記』『日本書紀』『風土記』について、現在原本は残っていないが写本や逸文として今に伝わっている。

『宗像大菩薩御縁起』は宗像大社に伝わる中世の文書で、風土記逸文が記載されている文書として貴重な存在である。

その後、江戸時代の国学者達によって書写や研究がおこなわれ、現代では多くの文献が印刷出版され研究資料として役立っている。しかし、資料については批判を持ってみるのが大事だとされる。その人が生きた時代により社会的状況、文化的環境、信仰の支えとなる精神のありかたなどが異なるからである。

宗像三女神は古代、荒海玄界灘の海上交通を支配した宗像君の信奉する祭神で、道中にある沖ノ島では国家的祭祀がおこなわれた。祈りの島・沖ノ島ともいわれるように、信仰は現代まで脈々とつながっており、文献でその背景となる状況を確認できる。

昭和36年に発行された『宗像神社史』では、中世文書で重要文化財指定の『宗像大菩薩御縁起』の内容について次のことが述べられている。

1点目は、「西海道風土記云」についてである。西海道のなかには9つの国があり風土記は国ごとに奏上された。筑前国宗像郡はその中の1つであるから、「筑前国風土記」であり、選者は西海道の中に含まれているので、深くも考えず西海道風土記と表したのであろうというものである。

2点目は、巻末の1枚の料紙が本文に使われたものと明らかに異なり、墨の濃さや字体に本文とは異なる様子が見られるという点である。この部分に「三所大菩薩最初御影向地」の條があり、「室木六ヶ岳や神興村に御著あり」という記述がある。室木(ムルキ)は平安時代から江戸時代まで宗像庄として宗像神社の社領地であった。神社にとって重要な地域であったために、後日付け加えられたのだろうとされている。神興村については、後の機会に調べてみたい。

平成21年に発行された『宗像大社文書』は、宗像大社が収蔵する文書を注釈と影印版に収め発行されたものである。研究者にとっては大変貴重な資料が郷土資

料室に行けばあり、また展示公開することによる実物の劣化を防ぐという利点もある。

デジタル機器の使用は、実物と変わらない文字や形の記録が可能で、長期保存ができる。私達は、古代、中世の人々によって書写されて世の中に出され伝えられた文書を大切に、資料批判の視点を持ちながら後世に伝えていく責務がある。

【資料】

## むなかた地域遺跡分布図（第1版）

古川修士・伊津信之介

### 1.はじめに

宗像市と福津市には旧石器時代から奈良時代にかけての各種遺跡が多数分布することは広く知られている。本号に花田勝広氏が「宗像地域の古代史と遺跡概説」と題して全容をまとめた。筆者らはこれとは別に、時代ごとに区分された遺跡分布図が必要であると考え、公刊されている調査報告書などから分布図を作成した。この分布を3次元表示することが、遺跡の分布を歴史的及び空間的に把握することを容易にし、市民の理解を深める上で最適であると考え、3次元俯瞰図を作成した。この試みはまだ緒についたばかりであり、各遺跡の高度情報が未取得である。したがって今回の3次元俯瞰図には高さの情報は盛り込まれていない。

今回の分布図はむなかた地域の古代遺跡の一部を記載したに過ぎないので、今後は宗像市教育委員会及び福津市教育委員会などの調査資料などのデータも分布図に加えて行予定である。特に遺跡分布図に標高データも加え3次元表現の充実を図りたいと考えている。

### 2.遺跡分布図の地点番号と出典文献番号

遺跡番号	緯度	経度	時代	遺跡名	出典文献番号
1	33.5103	130.2859	古墳	牟田尻羅漢寺古墳群	11,39
2	33.5103	130.29	古墳	神湊西口古墳群	39
3	33.5054	130.2905	古墳	神湊上野古墳群	39
4	33.5049	130.2903	古墳	神湊井牟田古墳群	3,11,39
5	33.50475	130.2905	古墳	神湊井牟田15号墳	3
6	33.5039	130.2913	古墳	神湊鍋田古墳群	3,11
7	33.5031	130.2913	古墳	勝浦高原古墳群	39
8	33.5016	130.2905	古墳	勝浦高堀古墳	39
9	33.5013	130.2909	古墳	津屋崎41号墳	11,31
10	33.5012	130.291	古墳	勝浦峯ノ畑古墳	39
11	33.5012	130.2914	古墳	勝浦井ノ浦古墳	11,31,39
12	33.5042	130.2926	旧石器～古墳	勝浦井ノ口A遺跡	1,3,31
13	33.50328	130.29281	旧石器	牟田池遺跡	1,11,31

14	33.5026	130.2922	旧石器～古墳	勝浦井ノ口B遺跡	1,3,31
15	33.502	130.2921	古墳	勝浦乗越古墳群	39
16	33.5007	130.2925	古墳	勝浦水押古墳	39
17	33.4927	130.2929	古墳	津屋崎11号墳	11
18	33.4903	130.2911	古墳	新原奴山古墳群	39
19	33.4844	130.2904	古墳	生家大塚古墳	39
20	33.4805	130.2833	古墳	須多田二夕塚古墳	39
21	33.4811	130.2853	古墳	須多田天降天神社古墳	39
22	33.4804	130.285	古墳	須多田ミソ塚古墳	39
23	33.4804	130.2855	古墳	須多田下ノ口古墳	39
24	33.4809	130.2904	古墳	須多田上ノ口古墳	39
25	33.475	130.2907	古墳	在自剣塚古墳	39
26	33.482	130.2923	古墳	大石岡ノ谷1号墳	39
27	33.4818	130.2923	古墳	大石岡ノ谷2号墳	39
28	33.5055	130.2942	古墳	浜宮貝塚	3,11,39
29	33.5042	130.2942	古墳	牟田尻スイラ古墳群	11,31,39
30	33.5029	130.2952	古墳	牟田尻母倉古墳群	31,39
31	33.5029	130.2958	弥生～古墳	牟田尻池田古墳群	11,39
32	33.5022	130.2944	古墳	牟田尻中浦古墳群	39
33	33.5015	130.294	古墳	牟田尻峠古墳群	39
34	33.5015	130.2945	古墳	牟田尻古浦古墳群	39
35	33.5015	130.2953	古墳	牟田尻下浦古墳群	11,39
36	33.5021	130.3002	古墳	牟田尻東方ヶ浦古墳群	39
37	33.5016	130.3003	古墳	牟田尻上峰古墳群	39
38	33.5054	130.3035	古墳	江口金屑古墳群	3
39	33.5224	130.3146	縄文	鐘崎貝塚	2
40	33.52046	130.31325	縄文	さつき松原遺跡	1
41	33.5141	130.3148	古墳	田野瀬戸古墳	1,2
42	33.503	130.3043	古墳	江口大谷古墳群	39
43	33.5027	130.3051	古墳	吉田山ノ上古墳群	39
44	33.5032	130.3058	古墳	吉田古墳群	39
45	33.5038	130.3108	古墳	吉田牟田古墳群	39
46	33.5021	130.3054	古墳	吉田古寺古墳群	39
47	33.5028	130.3105	古墳	吉田安入寺古墳群	39
48	33.5031	130.3111	古墳	吉田床古墳群	39
49	33.5018	130.3056	古墳	吉田上佛古墳群	39
50	33.5008	130.3059	古墳	吉田古浦古墳群	39
51	33.4957	130.3108	古墳	吉田川端古墳群	39
52	33.4949	130.3019	古墳	牟田尻円辻古墳群	39
53	33.495	130.3034	古墳	牟田尻徳満古墳群	39

54	33.4939	130.305	古墳	田島上高宮古墳	11,39
55	33.4934	130.31171	弥生	多礼コキゾノ遺跡	1,8,31
56	33.4915	130.305	古墳	田島鞆ノ上古墳群	3,39
57	33.4906	130.3034	古墳	田島高野ヶ浦古墳群	3
58	33.4855	130.3054	古墳	田島飛松古墳群	39
59	33.4847	130.3106	古墳	田島楢原古墳群	3
60	33.4841	130.3049	古墳	田島巖石古墳群	3
61	33.48169	130.3055	古墳	大井古墳群	39
62	33.4745	130.3037	奈良	用山堂ノ上遺跡	10
63	33.472	130.3046	奈良	大井大屋敷遺跡	30
64	33.49471	130.32323	古墳	池浦高田遺跡	28
65	33.4931	130.3212	旧石器	池浦トボン遺跡	1,31
66	33.49367	130.32458	古墳～奈良	相原古墳群	27,31,37,38,39
67	33.48557	130.32032	古墳	福崎古墳群	29
68	33.4858	130.3206	古墳	久戸古墳群	16,20,27,37,38
69	33.4907	130.3238	古墳	河東山崎遺跡	31
70	33.49169	130.33035	古墳	稲元黒巡遺跡	20,27
71	33.49049	130.32583	古墳	稲元古墳群	16,20,27,37,38,39
72	33.49123	130.33109	古墳	稲元黒巡窯跡	20
73	33.48544	130.33127	古墳	稲元日焼原遺跡	20,27
74	33.48563	130.33144	古墳	稲元日焼原窯跡	16,20,35
75	33.49045	130.33247	古墳	稲元日焼原新池の窯跡	20
76	33.4845	130.3318	弥生～奈良	稲元久保遺跡	1,20,31
77	33.48476	130.33306	古墳	クヒ古墳群	35
78	33.4836	130.3333	弥生～古墳	須恵クヒノ浦遺跡	1,31
79	33.49191	130.33341	古墳	須恵須賀浦遺跡	16,20
80	33.49217	130.33422	古墳	横山古墳群	37,38
81	33.49184	130.33439	弥生～古墳	須恵窯跡群	34,36,37,38
82	33.4921	130.3431	旧石器～古墳	平等寺長浦・原遺跡	1,31
83	33.4906	130.3418	古墳	平等寺半田遺跡	16,25,34,35
84	33.4906	130.3427	古墳	向原古墳群	34
85	33.4911	130.3433	縄文～古墳	平等寺瀬戸遺跡	14
86	33.4902	130.3431	古墳	城ヶ谷古墳群	25,27,29,33,35,36,39
87	33.4904	130.3438	古墳	三郎丸堂ノ上遺跡	14,,25,29,39
88	33.4902	130.3443	古墳	三郎丸古墳群	16,25,35
89	33.48591	130.34499	古墳	平等寺古墳群	34,36,39
90	33.4835	130.3435	弥生～奈良	三郎丸今井城遺跡	4,6,19,23,31,36
91	33.33504	130.2943	古墳	桜京古墳	11,27,39
92	33.481	130.313	古墳	大井池ノ谷遺跡	1,7
93	33.4823	130.3159	弥生	大井三倉遺跡	1,7,28,31

94	33.48324	130.3231	縄文～古墳 釣川遺跡	1,20,31
95	33.47528	130.31578	弥生 田熊中尾遺跡	1,31
96	33.4747	130.32	弥生～古墳 スベットウ古墳	7,22,27,39,37,38
97	33.47438	130.3203	弥生～古墳 東郷高塚遺跡	4,6,7,16,22,27,31,33,37,39
98	33.47498	130.32138	弥生 田熊上ノ畑遺跡	1,31
99	33.48027	130.32155	弥生～古墳 田熊石畑遺跡	1,31
100	33.4808	130.3226	弥生 東郷登り立遺跡	1,31
101	33.47563	130.32243	古墳 東郷古墳群	37,38
102	33.465	130.3141	古墳 村山田高江遺跡	30
103	33.46556	130.32113	古墳 新屋古墳群	39
104	33.4808	130.331	縄文～古墳 吉留下惣原遺跡	1,17,19,23,24,31,32
105	33.48051	130.33368	古墳 後曲古墳群	37,38,39
106	33.4802	130.3338	弥生 曲香畑遺跡	1,6,10,16,22,31,
107	33.4806	130.341	弥生 田久松ヶ浦遺跡	1,4,6
108	33.4743	130.3257	弥生～奈良 久原瀧ヶ下遺跡	4,19,23,27,31,36,38
109	33.4735	130.3256	古墳 久原澤田古墳群	31
110	33.4732	130.3256	弥生～奈良 久原遺跡	1,4,6,7,16,19,22,23,36,31
111	33.4717	130.331	古墳 光岡辻ノ園遺跡	6
112	33.47052	130.33035	弥生～古墳 光岡草場遺跡	1,16,19,31,32
113	33.4656	130.3307	弥生～古墳 王丸河原遺跡	1,30,33
114	33.4635	130.3305	古墳 大穂町原遺跡	33
115	33.46318	130.33008	弥生 大穂町一丁田遺跡	31
116	33.4629	130.3305	古墳 大穂町町口遺跡	16,33
117	33.46275	130.33012	古墳 大穂古墳群	35
118	33.47154	130.33387	旧石器～古墳 光岡長尾遺跡	1,6,16,22,27,31,35
119	33.46446	130.3333	弥生～古墳 野坂一町間遺跡	1,4,16,22,30,31
120	33.4608	130.3352	奈良 野坂ホテ田遺跡	19,32
121	33.4718	130.343	古墳 朝町妙見遺跡	4,10,16
122	33.47107	130.34213	弥生～古墳 朝町町ノ坪遺跡	1,18,35,22,31
123	33.4654	130.3409	弥生 朝町竹重遺跡	6,31
124	33.46435	130.34123	古墳 中松元古墳群	18,39
125	33.46392	130.34244	古墳～奈良 朝町山添遺跡	18,22,35
126	33.46195	130.34309	古墳 中山古墳群	39
127	33.4611	130.3435	奈良 野坂中山遺跡	10,16,18
128	33.4653	130.3444	古墳～奈良 浦谷古墳群	4,13,16,18,19,21,22,23,27,35,36
129	33.4656	130.35	古墳 朝町百田遺跡	13,18,22,25,25,27,35
130	33.47545	130.34489	古墳 田久古墳群	39
131	33.4757	130.3453	古墳～奈良 田久瓜ヶ坂遺跡	4,31
132	33.4801	130.3459	弥生 田久甲ノ上遺跡	4,6
133	33.4824	130.3539	弥生～奈良 石丸遺跡	4,16,19,23,24,27,31,36

134	33.47434	130.35313	古墳 徳重古墳群	39
135	33.47153	130.35395	古墳 本村古墳群	39
136	33.4744	130.355	弥生～古墳 名残遺跡群	13,18,19,23,24,26
137	33.4743	130.355	弥生～古墳 冨地原梅木遺跡	1,4,9,12,14,27,31
138	33.4744	130.3554	弥生 冨地原小峯遺跡	1,31
139	33.47258	130.35506	古墳 名残古墳群	31,36,39
140	33.4722	130.3553	古墳 名残高田遺跡	16
141	33.4739	130.36	弥生～古墳 冨地原岩野B遺跡	1,4,9,12,13,26,31
142	33.4748	130.3607	弥生～古墳 冨地原岩野A遺跡	1,12
143	33.4739	130.3608	弥生～古墳 冨地原森崎遺跡	9,12,13,26
144	33.47245	130.36129	古墳 森古墳群	39
145	33.4731	130.3623	弥生～古墳 冨地原川原田遺跡	4,9,12,13,26,31
146	33.4808	130.361	弥生～古墳 冨地原神屋崎遺跡	4,9,12,13,31
147	33.4756	130.3619	縄文 冨地原深田遺跡	4,9,12,26,31
148	33.4752	130.3619	弥生～古墳 冨地原古賀遺跡	9,12,26,31
149	33.47287	130.36467	古墳 石井古墳群	39
150	33.4755	130.3649	古墳～奈良 武丸高田遺跡	9,12,13,17,19,21,23,24,26,30
151	33.4753	130.3652	古墳～奈良 武丸小伏遺跡	1,9,12,13,17,19,21,23,24,26,30
152	33.4742	130.3655	奈良 武丸町添遺跡	13,17,19,21,23
153	33.47387	130.3655	古墳 土師上古墳群	39
154	33.4755	130.3702	弥生～古墳 吉留京田遺跡	1,9,12,13,17,21,26,28,31
155	33.485	130.3618	古墳～奈良 武丸大上げ遺跡	1,9,13,17,19,21,23,24,26,27,30
156	33.4828	130.3632	弥生～古墳 武丸皆真庵遺跡	17,19,21,23,24,31
157	33.4832	130.3701	奈良 八所宮遺跡	17
158	33.5055	130.36107	古墳 高倉東田古墳群	36

### 3.遺跡分布図

#### 3-1.遺跡分布図

国土地理院「電子国土 1/12500」を元に遺跡を時代ごとの色別記号で表記し、遺跡には番号が振り当てた。(第1図)

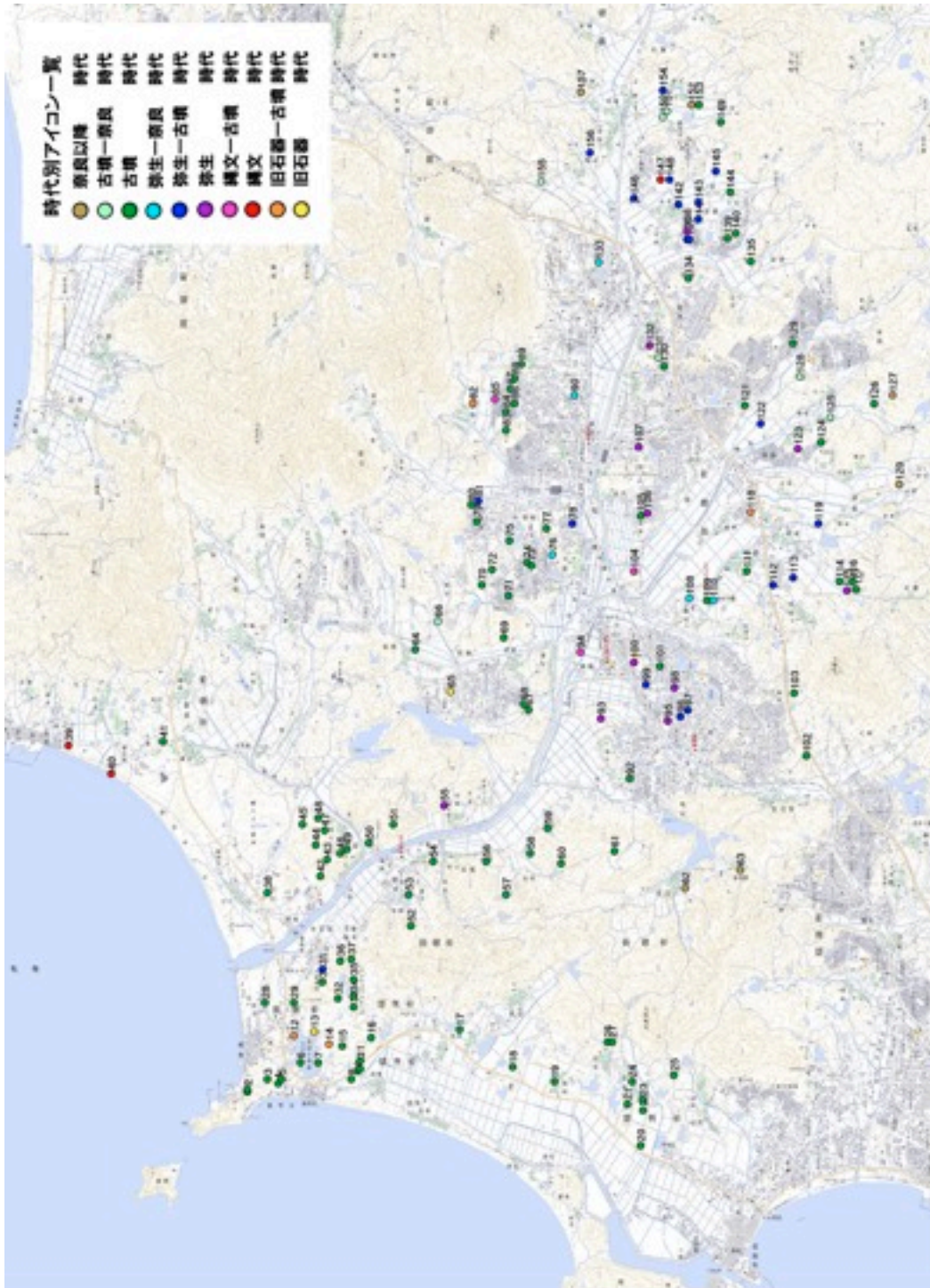


図1 むなかた地域の遺跡分布



### 3-2.遺跡分布鳥瞰図

国土地理院「5万分の1 地形図」を元にフリーウェア「カシミール3D」を使用し鳥瞰図を作成した。北西と南西から俯瞰した鳥瞰図を示した。撮影地点の緯度経度、方角、仰角を俯瞰図下に記載した。(第2図、第3図)

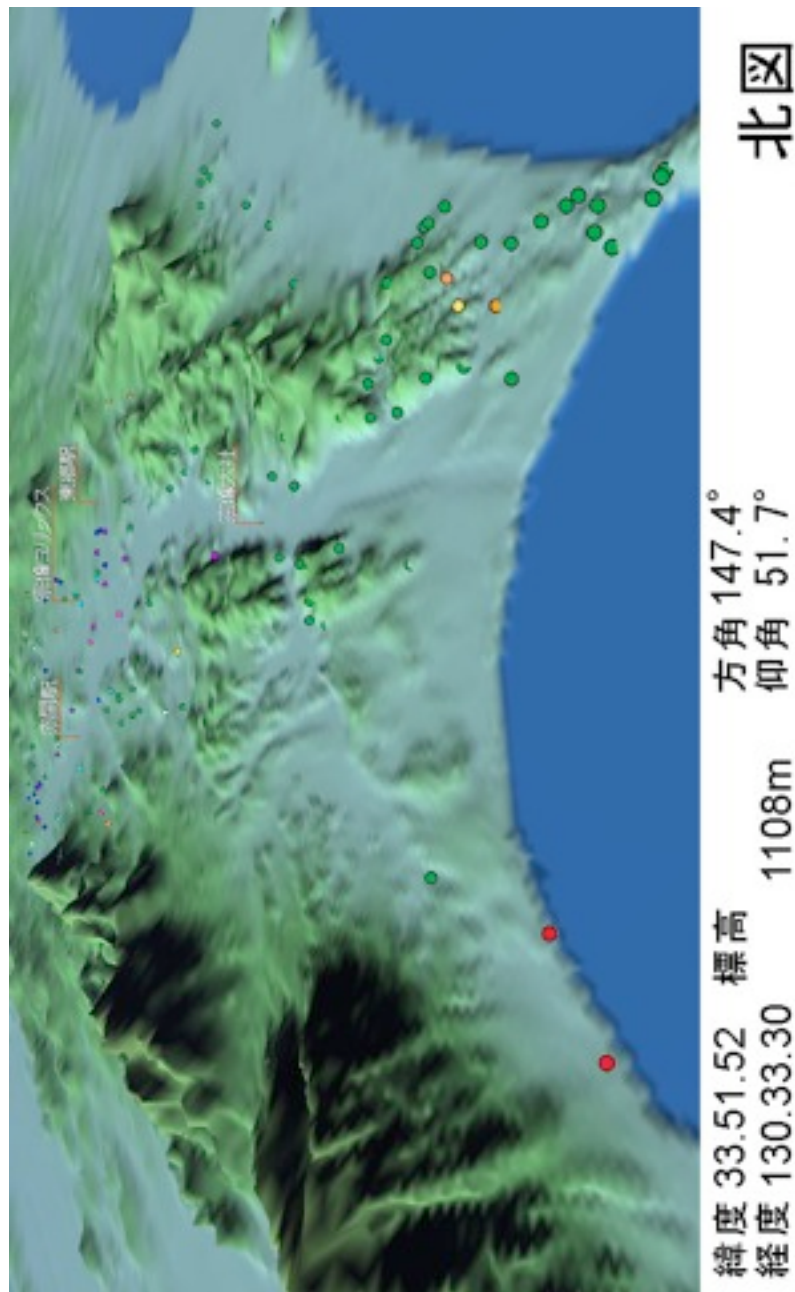


図2 宗像市北西の高度1108mから俯瞰した遺跡分布

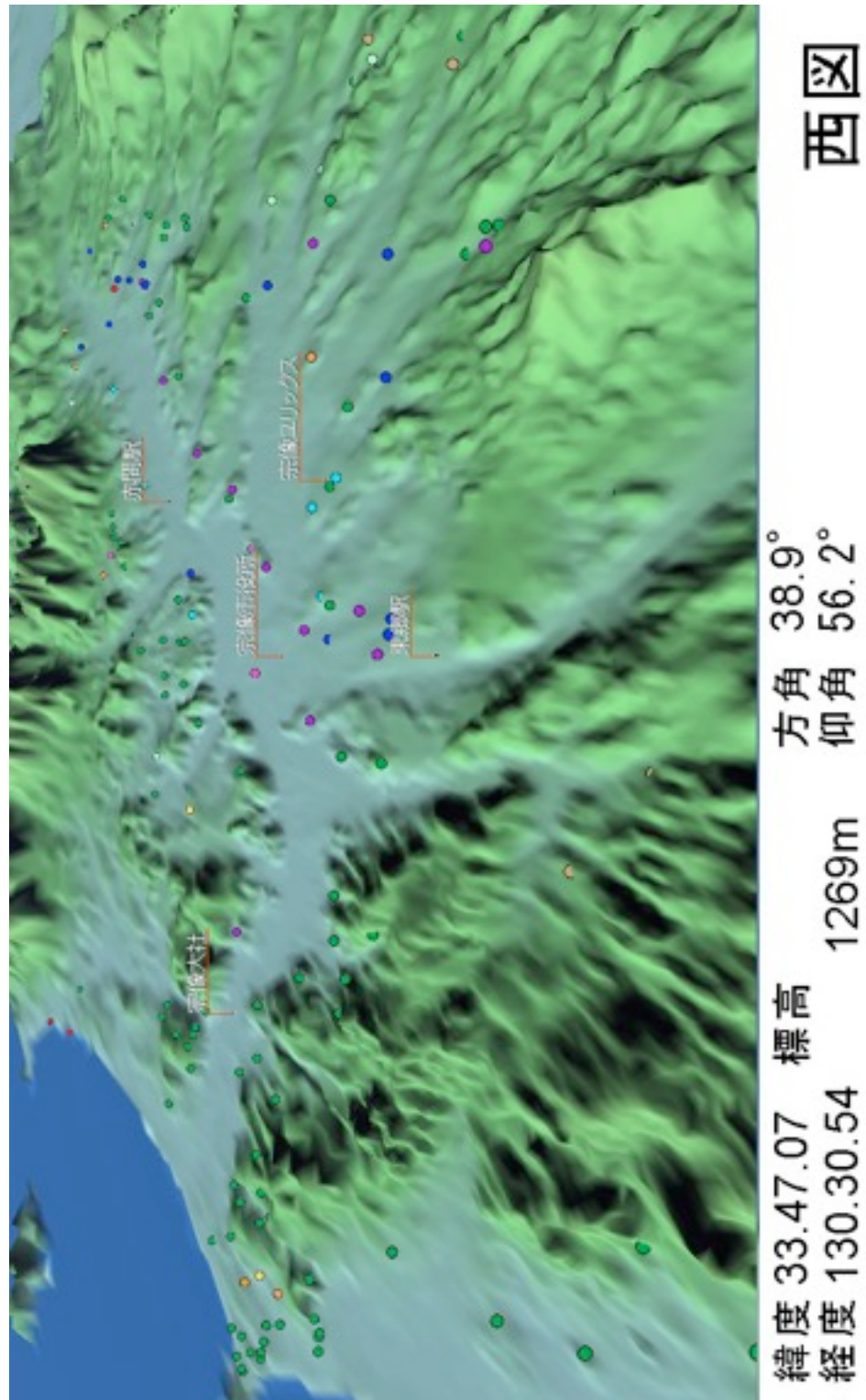


図3 宗像市南西の高度1296mから俯瞰した遺跡分布

#### 4.遺跡分布の出典文献

- 1 「むなかた電子博物館」 紀要2号 宗像地域の古代史と遺跡概説 花田勝広 2010
- 2 田野瀬戸古墳 福岡県宗像市田野所在遺跡跡の発掘報告 宗像市教育委員会 第59章 2007
- 3 桜京古墳 福岡県宗像市牟田尻所在国指定史跡(装飾古墳)の史跡内容確認調査報告 宗像市教育委員会 第58集 2007
- 4 久原瀧ヶ下 福岡県宗像市久原所在遺跡の発掘調査報告 宗像市教育委員会 第48章 2000
- 5 田久瓜ヶ坂 福岡県宗像市田久所在遺跡の発掘調査報告 宗像市教育委員会 第46章 1999
- 6 田久松ヶ浦 福岡県宗像市田久所在遺跡の発掘調査報告 宗像市教育委員会 第47章 1999
- 7 王丸長谷遺跡 福岡県宗像市大丸所在遺跡発掘 宗像市教育委員会 第44章 1998
- 8 宗像市史 通史編 第一巻 自然・考古 宗像市史編纂委員会 1997
- 9 富地原神屋崎 福岡県宗像市富地原所在遺跡の発掘調査報告 宗像市教育委員会 第41集 1996
- 10 富地原森 福岡県宗像市富地原所在遺跡の発掘調査報告 宗像市教育委員会 第40集 1995
- 11 神湊井牟田古墳群Ⅲ 玄海町教育委員会 第3集 1995
- 12 富地原上瀬ヶ浦 福岡県宗像市富地原所在遺跡の発掘調査報告 宗像市教育委員会 第38集 1994
- 13 富地原川原田Ⅰ 福岡県宗像市富地原所在遺跡の発掘調査報告 宗像市教育委員会 第39集 1994
- 14 平等寺向原Ⅰ 宗像市教育委員会 第37章 1992
- 15 浦谷古墳群 宗像市教育委員会 第36章 1992
- 16 朝町山ノ口Ⅱ 福岡県宗像市大字朝町字山ノ口所在遺跡の調査報告 宗像市教育委員会 第34章 1991
- 17 八所宮 福岡県宗像市吉留所在遺跡の発掘 宗像市教育委員会 第31章 1991
- 18 神湊井牟田古墳群Ⅰ 玄海町教育委員会 第1集 1991
- 19 名残Ⅱ 福岡県宗像市所在遺跡の発掘調査報告 宗像市教育委員会 第24集 1990
- 20 稲元日焼原 福岡県宗像市所在窯跡群の調査 宗像市教育委員会 第22集 1989
- 21 宗像武丸町添遺跡 宗像市教育委員会 第20章 1989
- 22 宗像 浦谷古墳群Ⅱ 宗像市教育委員会 第16集 1988
- 23 宗像 武丸皆真庵 宗像市教育委員会 第15集 1988
- 24 宗像 武丸原 福岡県宗像市大字武丸字原所在遺跡の調査 宗像市教育委員会 第17集 1988
- 25 宗像名残Ⅰ 福岡県宗像市所在遺跡跡地の発掘調査報告 宗像市教育委員会 第18章 1988
- 26 久原遺跡 概報 古代宗像をさぐる 宗像市教育委員会 第19集 1988
- 27 宗像 埋蔵文化財発掘調査報告書 1986年度 宗像市教育委員会 第12集 1987
- 28 宗像 埋蔵文化財発掘調査報告書 大井三倉遺跡 池浦高田遺跡 吉留京田遺跡 宗像市教育委員会 第10集 1986
- 29 宗像 城ヶ谷古墳群Ⅱ 宗像市教育委員会 第8集 1985
- 30 宗像 埋蔵文化財発掘調査報告書 1984年度 宗像市教育委員会 第9集 1985
- 31 宗像 埋蔵文化財発掘調査報告書 1983年度 宗像市教育委員会 第7集 1984

- 32 朝町山ノ口 I 福岡県宗像市大字朝町字山ノ口所在遺跡の調査報告 宗像市教育委員会 第14集 1984
- 33 宗像 大穂町町口 I 宗像市教育委員会 第13集 1983
- 34 宗像 半田古墳群 I (福岡県宗像市所在古墳群の調査) 宗像市教育委員会 第6集 1983
- 35 宗像 浦谷古墳群 I (宗像市大字朝町所在古墳群の調査) 宗像市教育委員会 第5集 1982
- 36 石丸遺跡 宗像郡宗像町大字石丸所在遺跡の調査 宗像市教育委員会 第4集 1980
- 37 相原古墳群 福岡県宗像郡宗像町大字河東所在古墳群の調査報告 宗像市教育委員会 第1集 1979
- 38 久所古墳群 福岡県宗像町大字河東所在古墳群の調査 宗像市教育委員会 第2章 1979
- 39 城ヶ谷古墳群 福岡県宗像郡宗像町大田原所在遺跡 クボタハウス・住友不動産刊 1977

【資料】

## 2009年～2010年の「むなかた電子博物館」

清水比呂之

2009年から2010年は、「むなかた電子博物館」にとって、重要な1年間であった。2005年4月に開館された博物館は、5年の歳月を経て、新たな挑戦と運営の継続というふたつの課題を抱えてきたといえる。

新たな挑戦という観点からは、今回の電子博物館の研究紀要第2号の発行と北斗の水くみ写真展実行委員会による第2回写真展開催があげられる。この二つの取り組みは、現在の電子博物館の活動の柱であり、むなかた電子博物館紀要（創刊号）は、2009年4月発行、第1回の写真展は、昨年度が初回であった。

運営という観点からは、15人の「むなかた電子博物館」市民パートナーが、「むなかた電子博物館」企画運営会議の中で、内容に関する議論を行い、市民パートナー自らが取材をしたり、コーナーを具体的につくりこんだりしている。さらに、北斗の水くみ写真展実行委員会、紀要委員会は、市民パートナーから、希望した委員により構成されている。

運営の継続にあわせて、電子博物館の訪問者の推移が、運営評価のひとつの指標になる。2005年5月開館以来、2009年12月までのアクセス件数は、62万5千件。年々、アクセス件数は増加しており、2009年の年間件数が、20万6千件に達している（図1）。

さらに、評価のための材料として、電子博物館の来館者に対し、ネットアンケートを2009年10月から開始した。本人の来館数、訪問のきっかけ、訪問目的、役に立ったページ、来館をきっかけに実際に出かけた場所・参加イベントなど、質問項目は9項目で、フェースシートとして、年齢・性別・居住地・職業・メールアドレスを任意記入とした。

ただし、このアンケートは開始以来、評価の分析に足りるほどの、回答数がまだ寄せられていないため、来館者に記入を促す工夫が必要である。アンケート結果を評価しながら、内容の充実に向けていくとともに、「電子博物館友の会」への発展を考えている。

電子博物館に対する意見だけでなく、電子博物館からの発信のためのツールとして利用できることが望ましい。電子博物館の企画に対する参加の呼びかけなど

が、行えたらいい。

今後、電子博物館が、一般的な来館者だけでなく、専門的な来館者が利用しやすい博物館として進化していくためには、相互リンクにより、研究者の専門的なサイトへと深化させていく提案がある。今回の座談会でも、博物館の発展のために、相互リンクの必要性が議論されている。

今後の展開としては、「21世紀デジタル時代の組織化」をテーマに、市民と博物館、あるいは、研究者同士を結びつけるネットワーク化が大切である。デジタルというツールを用いてのフラットな組織化は、まさに、電子博物館の目指す方向性ではないだろうか。

### ●2009年度（平成21年度）●

4月1日 「むなかた電子博物館」紀要 創刊号 発刊

4月27日 第1回 北斗の水くみ写真展実行委員会会議

- ・第1回「北斗の水くみ写真展」の反省
- ・第2回「北斗の水くみ写真展」の内容、スケジュールについて

5月28日 「ホテルの館」発 ホテル情報掲載開始。随時更新

6月9日 第1回 「むなかた電子博物館」企画運営会議

- ・今年度の事業計画について
- ・第2回「北斗の水くみ」写真展の実施について
- ・「むなかた電子博物館」紀要委員会の設置について
- ・ネットアンケートの実施について

7月1日～9月30日 北斗の水くみ写真展・写真募集

7月2日 「版画で見る 唐津街道 赤間宿・原町」公開

7月7日 第2回 北斗の水くみ写真展実行委員会会議

- ・撮影説明会について
- ・今後のスケジュールの確認

7月18日 北斗の水くみ写真展・撮影説明会 「道の駅むなかた」にて

8月7日 北斗の水くみ写真展・撮影説明会 大島七夕まつりにて

8月11日 「自然環境調査の報告書」掲載開始 随時更新

8月29日 北斗の水くみ写真展・撮影説明会 「道の駅むなかた」にて

9月26日 第2回 「むなかた電子博物館」企画運営会議

- ・第2回「北斗の水くみ」写真展の途中経過について
- ・田熊石畑遺跡のその後について
- ・さつき松原遺跡について
- ・ネットアンケートの実施について

- ・平成21年度の紀要委員会について
- 10月6日 第1回 紀要委員会
  - ・座談会について
  - ・内容、テーマについて
  - ・スケジュールについて
- 10月7日 さつき松原遺跡視察、鐘崎民俗資料館視察
- 10月19日 ネットアンケート設置
- 10月21日 北斗の水くみ写真展・審査委員会 10月26日記事掲載
- 12月4日 宗像最古の縄文遺跡発見！～さつき松原遺跡の調査から①記事掲載
- 1月6日 田熊石畑遺跡から緊急レポート（活用編）③④記事掲載
- 1月8日 第2回 紀要委員会
  - ・目次について
  - ・スケジュールについて
- 1月8日 大島民具資料館視察
- 1月20日 縄文時代の海岸線を探る！～さつき松原遺跡の調査から②～記事記載
- 3月3日 第3回 「むなかた電子博物館」企画運営会議

「むなかた電子博物館」市民パートナー 平成21年4月～平成22年3月

名前 (所属名)

- 石井 忠 (古賀市立歴史資料館 館長)
- 伊津 信之介 (東海大学福岡短期大学 教授)
- 岡部 海都 (日本野鳥の会福岡支部会員)
- 鎌田 隆徳 (自由ヶ丘南小学校教頭)
- 河田 昭 (市民公募)
- 中村 茂徳 (西南女学院大学講師)
- 平井 正則 (福岡教育大学名誉教授)
- 平松 秋子 (宗像歴史を学ぼう会メンバー)
- 堀内 伸太郎 (市民公募)
- 吉田 義男 (元宗像市史編纂室室長)
- 白木 英敏 (市民活動推進課)
- 西谷 尚子 (教育政策課)
- 占部 晃 (情報政策課)
- 清水 比呂之 (情報政策課)
- 上田 めぐみ (情報政策課)

## 編集後記

「むなかた電子博物館」紀要第2号編集長 伊津信之介

「むなかた電子博物館」紀要第2号の編集を終えた。執筆者および委員各位に厚く御礼申し上げます。「むなかた電子博物館」は、インターネットのWWW (WEB)を使った博物館である。インターネットで社会が進化し、経済や政治にまで多大な影響を与えている。我が国では選挙期間中インターネットを利用した選挙活動を行うことができず、ブログの更新や、ツイッターのつぶやきまで公職選挙法に抵触する。この状態を解消するため、インターネットを利用した選挙運動を認める公職選挙法の改正案を提出しようという動きがある。これが実現すると、国の根底を支える国政選挙がインターネットによって大きく変化することになる。時代の潮流の中で、社会教育の役割を担う博物館もインターネットと無縁でいられない。

ところでWEBというと「クモの巣」と認識するのが常識だろう。私はかねてから異論を唱えている。WEBは織物である。人々の小さな営みが結びつき広がるThe Learning Web (学習のためのネットワークと訳されている)が大切だと思思想家イリイチが1970年にDeschooling Society (脱学校の社会)に書いた。イリイチの影響を受けたWorld Wide Webの開発者Tim-Berners Leeが喫茶店で思いつき名付けた。

このようにWEBが人々の知識や技術や思いを織りなす道具であると考えたら「むなかた電子博物館」の誕生と進化は、まさにイリイチからTim-Berners Leeに受け継がれた夢が実現しつつあると言っても良いだろう。むなかた地域の人と人が、あつめ、ため、そだて、つなぎ、いかす「むなかた電子博物館」はWorld Wide Webの根底に流れる人類共通の願いなのである。「むなかた電子博物館」紀要が、そんな「むなかた電子博物館」の骨組みとなっていくことを願っている。